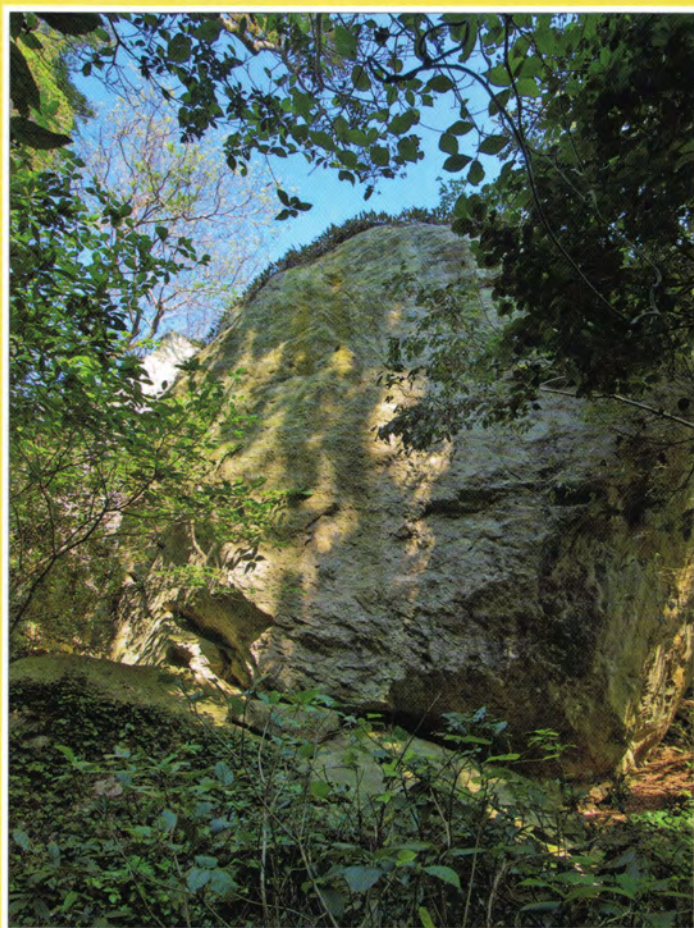


國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第5号



平成24年(2012)9月発行

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

第5号

目次

【プロジェクト活動紹介】

- 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上 順孝…… 1
「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」 遠藤 潤…… 5

【2011年度のトピック】

- 宗教文化の授業研究会 …… 7
国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育
—開かれたネットワークによる取り組み—」 …… 9
日本文化研究所購読・収蔵英文雑誌とその活用 …… 13
日本文化研究所ウェブサイトのリニューアル …… 16
第2回国学研究会 …… 19

【研究論文】

- 新宗教研究にとっての認知科学・ニューロサイエンス 井上 順孝…… 21
圓佛教の海外布教現況—日本教区を中心に— 李 和珍…… 49

【スタッフ紹介】 …… 62

【出版物紹介】 …… 71

【テレビ放映・番組紹介】 …… 73

カバー写真 福岡県宗像市、玄界灘にある沖ノ島。沖ノ島の祭祀史は三世紀の終わりごろまで遡ると思われ、その祭祀は、写真にあるような岩を磐座（いわくら）として行われたとされる。

撮影：ノルマン・ハイヴンズ

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で発足したもので、本年度は3年目にあたる。本プロジェクトは2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと有機的に連携しながらその円滑な運営を図るものであり、システム面の整備・改良を進めるものである。

他方では本プロジェクトの独自のコンテンツを作成し、充実させていく。独自の研究実施に当たっては、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」が2011年度より4年間の計画で採択されたので、これと緊密に連携を取りながら事業を推進していく。また2011年1月9日に「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク)が日本文化研究所内に設置されたが、同センターとの連携も有機的に進めていく。

以下ではまず本プロジェクトの2011年度の成果を簡単に紹介し、その上で2012年度の計画について概要を記す。なお、2012年度のプロジェクトメンバーは以下の通りである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高(専任教

員)、ノルマン・ハイヴンズ、黒崎浩行、齊藤こずゑ(兼担教員)、市川収、カール・フレレ、市田雅崇(客員研究員)、李和珍、ヤニス・ガイタニディス、加藤久子(PD研究員)、今井信治(研究補助員)、ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘(客員教授)、マシュー・チョジック、キロス・イグナシオ、小堀馨子、エリック・シッケタンツ、高橋典史、ジャン＝ミシェル・ビュテル、山梨有希子、天田顕徳、齋藤知明、村上晶(共同研究員)

2. 2011年度の成果

(1) 機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年度に正式に稼働したデジタル・ミュージアムは逐次新機能を組み込みながら、機能を拡充し、かつデータベース等の充実を図った。画像の公開に関してはかなり整備されたので、動画をより積極的に公開していくための準備作業を行った。大手印刷会社の動画利用システムを見学するなどして、現在の技術水準を確認した。

全体の調整はデジタル・ミュージアムのワーキンググループのメンバーが意見交換して、各部門における作業の進行を確認しながら行った。

◇国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」

2011年10月16日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究 (B) 「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、宗教文化教育推進センター (CERC) の共催によって、国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育」が行われた。

同フォーラムは10時半から17時半まで行われ、5つの発題に続いてコメンテーターからのコメントと総合討議がなされた。発題者とタイトルは次の通りである。

- ・織田雪江 (同志社中学校・高等学校) 「中学校社会科における宗教文化の取り上げ方と映像を用いた授業」
- ・岩谷彩子 (広島大学) 「映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって—」
- ・エリカ・バッフェツリ (ニュージーランド、オタゴ大学) 「ニュージーランドの大学における Blended teaching と宗教文化教育—大学ティーチングの再考—」
- ・アラン・カミングス (イギリス、ロンドン大学) 「一回性の限界—芸能教育におけるデジタル動画の活用—」
- ・平藤喜久子 (國學院大學) 「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」

これらを受けて、コメンテーターである岩井洋 (帝塚山大学) からコメントがあり、その後黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ (國學院大學) の司会で総合討議を行った。

同フォーラムには100名近くが参加し、充実した発表を受けて活発な議論がなされた。なお、同フォーラムを1時間に編集したものが、精神文化映像社の番組としてスカイパーフェクTVの216chで2011年11月23日と30日、2012年1月25日に放送された。またこの番組はiPhoneアプリでも視聴可能となったが、オンデマンドではない。「STYLECAST」をダウンロードすると、放映時間に合わせて

視聴できる。

(2) プロジェクト独自の成果

◇EOSの拡充

2011年度は、『神道事典』の年表、および付録の表等の英訳を進めた。年表は本文と訳語を対照させながら作業を継続している。これらにより、EOSがいつそう拡充されることになる。

EOSは本文の英語版が中心であるが、「第四部神社」と「第八部流派・教団と人物」は韓国語版を作成することになっており、第四部のアップロードがなされた。2012年度は「第八部流派・教団と人物」の韓国語訳を完了させ、校閲作業も行うこととなっている。

◇双方向翻訳

2011年度は次の4点の翻訳を行った。日本語から英語へ2点、英語から日本語へ2点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文
畔上直樹「戦前日本社会における現代化と宗教ナショナリズムの形成」(英訳 "Modernization"(gendaika) and the Formation of Religious Nationalism in Pre-War Japanese Society 翻訳者:GAITANIDIS, Ioannis)

板井正斉「高齢者・障害者の聖地旅行に見える聖性の再構築について—伊勢神宮における参拝ボランティア調査から—」(英訳 The Reconstruction of Sacredness as Seen in the Travel to Sacred Sites by the Elderly and Disabled: From an Investigation of Shrine Visit Volunteers at the Ise Shrines 翻訳者: LeFebvre, Jesse)

・英語から日本語へ翻訳された論文
Lori Meeks, "The Disappearing Medium: Reassessing the Place of Miko in the Religious Landscape of Premodern Japan" (邦訳: 「霊媒の消失—近代以前日本の宗教空間にお

けるミコの再評価―」 翻訳者：加藤之晴・加藤順子)

Loo M. TZE, "Escaping its past : recasting the Grand Shrine of Ise"(邦訳：「過去からの脱出―伊勢大神宮の再構築―」 翻訳者：高橋典史)

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

教派神道の資料のうち、神理教関係の資料のデジタル化について、神理教管長と最終的な打ち合わせをし、アップロード可能な画像、その内容等について了解を得た。メタデータを作成してアップロードする段階になった。

熊本県に本部のある神道系教団より委託された教団基礎資料について、教団から許可を受けて2008年度からデジタル化とデータベース化を進めているが、2011年度もこの作業を継続して行った。すでに1万件を越す資料についてデジタル化が進んでおり、これに基づく分析作業も入力作業と並行して開始した。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2011年度も引き続き、世界遺産と宗教に関するデータベース、映画と宗教に関するデータベース、高校の教科書にみられる宗教文化関連の用語データベース、宗教文化を学ぶに適した博物館・美術館のデータベースなど、幾つかのデータベースの構築を進めた。

さらに宗教文化を学ぶための基本書案内を加え、基礎的な知識を得やすいように工夫されたサイトも構築している。

◇科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者：井上順孝)との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、本プロジェクト責任者の井上順孝を研究代表者として2011年度から4年計画で開始された。本プロジェクトメンバーの黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高が連携研究者となっている。この他、学術資料館の加瀬直弥、神道文化学部の西岡和彦も連携研究者である。

「宗教と社会」学会のプロジェクト「宗教文化の授業研究会」との連携で、天理大学において授業研究会を開催した。

3.2012年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

本プロジェクトの最終年度にあたるので、プロジェクト独自の事業については、一部区切りをつける計画を立てている。EOSの年表英訳と神名一覧の表等は入力段階での作業を終える予定である。『神道事典』の第八部の韓国語訳は一区切りとなる予定である。EOSは旧版と新版がともに公開される状態が続いているが、2012年度に旧版の処理について検討する。

本年度は研究成果を動画によって公開する方法の具体的検討を開始した。YouTubeへの投稿とiPhoneアプリの作成が当面の課題となるが、それぞれに検討すべき課題があるので、関連の情報を収集し、次年度からの新しいプロジェクトでの展開の準備をする。

全体に関わることとしては、旧日本文化研究所で開催した学術講演会の録音などについて、これを公開ないし、学術利用するための検討を開始した。またビデオテープ等として録画されたものもあるので、これらの利用に関する総合的な議論をする必要がある。2013年度からのプロジェクトで本格的に着手するので、そのための基礎的なデータを2012年

度中に整理する。

◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳については、2012年度も4本程度の論文の翻訳を予定している。すでに20本弱の論文が成果として公開されているが、これをよりアクセスしやすい形で公開・発信する方法について、現行の形式の再構成を含めて議論していく。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

神道系教団より委託された教団基礎資料(書簡類約二万点)の整理についても一区切りをつける予定である。デジタル化されたデータからの分析に着手する。

◇宗教文化教育の充実のための教材作成

2011年度に引き続き、宗教文化教育・宗教文化士制度と連携し、特に動画による教材の制作について、制作環境の整備を含めて重点的に取り組む。

宗教文化士認定試験は、2012年6月24日に第2回、11月11日に第3回が行われる予定であるため、本プロジェクトも同事業に協力していく。

科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文

化教育の教材に関する総合研究」(2011～2014年度)との連携も継続する。「動画」を用いたオンライン教材の制作やまたその発信方法を重視していく方針であるので、動画作成チームを編成していく予定である。

◇国際研究フォーラム

本プロジェクトはCOEの第三グループによって推進された国際的な研究交流を継承し、毎年少なくとも1回は本研究所の主催で国際研究フォーラムを開催することとしている。すでに充実した研究者の国際的ネットワークが形成されているが、これをさらに発展させていく。

本年度は、宗教文化教育における動画の活用について議論するため、「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」というテーマで9月29日に国際研究フォーラムを開催する予定である(執筆時点)。予定されている発題者4名とコメンテーター4名は以下の通りである。Roberta Strippoli(アメリカ、ビンガムトン大学)、有田英也(成城大学)、小池寿子(國學院大學)、Mark MacWilliams(アメリカ、セント・ローレンス大学)。コメンテーター:加瀬直弥(國學院大學)、伊達聖伸(上智大学)、平藤喜久子(國學院大學)、小原克博(同志社大学)。司会は井上順孝(國學院大學)が務める。

「國學院大學「国学研究プラットフォーム」の構築」

プロジェクト責任者 遠藤 潤

1. はじめに

この研究事業は、日本文化研究所に置かれた「神道・国学研究部門」と「国際交流・学術情報発信部門」の二部門のうち、前者によって行われるものである。平成23年度から3ヵ年にわたって計画されている。

この事業では、日本文化研究所が創立以来進めてきた、神道の基礎的研究、神道・国学関係人物研究、神社史料調査など、神道・国学に関する研究活動の成果に立脚し、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまに行われている国学研究のプラットフォームを構築し、ゆくゆくは学外との研究交流の基点としようとするものである。

2. 事業内容の概略

I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

(2) 国学者の地域拠点の研究

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

(1) 国学研究会の運営

(2) 異なるプロジェクト間での研究関係情報の共有

3. 平成23年度の研究成果

I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』に関する研究を進めるに先立ち、その前提となる『靈能真柱』について、平成22年度までの研究事業「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」の成果を点検しつつ、隔週での研究会において、同書本文の解釈について補訂を進め、同書に引用された『古史伝』の内容の確認を進めた。その上で、國學院大學図書館所蔵の複数の『古史伝』版本について、書誌をはじめとする基本情報を調査した上で、デジタルカメラによる撮影を実行した。また、研究利用のために以前のプロジェクトで撮影済となっていた『古史伝』稿本について、デジタルデータからのプリントアウトおよび製本を業者への委託により行った。

(2) 国学者の地域拠点の研究

加賀藩に関して、藩の神社政策に関する自治体史などの研究成果をリストアップし、重要なものについての検討会を行った。その政策および藩と国学者の関係について、11月2～4日に金沢市玉川図書館での資料調査を行った（詳細は『日本文化研究所年報』本号所収「第2回国学研究会」参照）。また、長野県域に関して、3月21～23日に長野県立図書館および長野県立歴史館で、現在の長野県域の諸藩関係調査を実施した。これらの調査・研究を通じて大平門や気吹舎の門人および組織

についての知見も得ることができた。

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

金沢での史料調査にあわせて、11月3日、共同研究員である一戸渉（金沢大学准教授）の協力により、金沢大学サテライトプラザにおいて国学研究会を開催した（詳細は本号所収「第2回国学研究会」参照）。

3. 平成24年度の研究計画

平成24年度の研究計画としては、当初計画として以下のような計画を立案した。

I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』版本の精読のための研究会を隔週で行う。これは、全体を網羅的に扱うのではなく、近世末から近代にかけての『古史伝』解釈の具体的なあり方に注目しつつ、各人が視点を定めて必要な箇所を精読する。研究会にあたっては『古史伝』稿本（秋田県公文書館所蔵）を適宜参照し、版本の形態になる以前の加筆・訂正などの編集作業についても配慮しつつ読解を進める。研究会の成果については、注釈を本文と結びつけて整序した形で記録し、デジタルの形での公開に向けて編集

する。

(2) 国学者の地域拠点の研究

中津藩、紀州藩などの藩に関わる神道・国学関係資料の調査については、首都圏の収蔵機関における調査を中心とし、遠隔地域への出張調査は行わない形で進める。

鈴屋および気吹舎の地方門人の活動の分析については、江戸・東京での国学者の活動（幕末期～明治期）について、東京都公文書館などの機関で調査を進める。また、大平・内遠門、神習舎などの門人組織については、先行研究やこれまでの研究事業の成果を見しつづつ、包括的な把握を目指す。また、神習舎については学内資料の調査を行うとともに、外部機関での資料についても把握する。幕末・維新期を中心とした京都での国学関係者の活動について、京都府立総合資料館で関係資料の調査を行う。

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

学内のさまざまな国学研究プロジェクト間での研究関係情報の共有を目指して、平成23年度に開始した国学研究会について、平成24年度も数回開催する。24年度からは、国学関係の研究を行う学内の教員に参加を呼びかけるとともに、学外の有志の研究者にも広報・告知を行う。研究会の成果についても、ウェブなどによって広く学外への周知を図る。

宗教文化の授業研究会

本研究会は、2009年に科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表:星野英紀・大正大学)の教材研究の試みとして発足し、その後2010年に「宗教と社会」学会のプロジェクトとして認められた。2011年に科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表:井上順孝・國學院大學)の研究がはじまったことから、この科研の研究と連携した活動を行うこととなった。2011年度は、宗教施設の見学を一つのテーマとし、学生の宗教施設見学を実施しながら、複数の大学の教員が合同で引率、考察する機会を設けるよう工夫した。

第1回宗教施設見学研究会 「東京神田の神社と教会」ⁱ

【日時】2011年7月10日13時半～

【場所】ニコライ堂、神田神社、湯島天神

国学院大学のほか、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学、埼玉大学、明治学院大学の留学生、日本人学生が30名余りが参加した。神道文化学部で「神道と国際交流」の授業を受講した学生が主体となり、留学生に参拝作法の説明をしたり、各神社の由来や建築について説明するなどした。また、ニコライ堂では、国学院大学研究開発推進機構PD研究員のヤニス・

ガイタニデイス氏が東方正教会、ロシア正教、ニコライ堂について説明を行った。

第2回宗教施設見学研究会「創価学会」

【日時】10月2日9時～

【場所】創価学会国際会館、聖教新聞社(東京、新宿)

井上順孝教授の授業で実施する創価学会見学を、本研究会にも開いていただいた。国学院大学のほか、東京大学、上智大学の教員、学生も参加し、国際会館、民音音楽博物館、聖教新聞を見学した。聖教新聞では、創価学会の幹部職員との懇談会もあり、学生が直接創価学会に関するさまざまな疑問を投げかける機会を持つこともできた。



i 平藤喜久子「宗教文化教育の授業研究会の試み」(『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第4号、2011年9月)でも詳しく紹介している。

第3回宗教施設見学研究会「福蔵院節分」

【日時】1月28日(土)13時半～

【場所】福蔵院、東京大神宮

大正大学の星野英紀教授のご厚意により、星野教授が住職を務めておられる福蔵院の節分会を見学させていただいた。国学院大学、東京外国語大学、東京大学、東洋英和女学院大学等から、留学生も含めた学生たちが参加した。福蔵院の節分会は、地元の方々を中心となって企画、運営される大変賑やかなものであった。留学生はもとより、日本人学生のほとんどが寺院での節分は体験したことがないとのことであった。東京大神宮は、近年婚活に御利益があると話題になっており、この日はバレンタインデー前ということもあり、多くの参拝者で賑わっていた。そこでは現代の神道ブームについて学生と討議した。



第4回宗教施設見学会

「天理教月次祭と教団本部、天理参考館」

【日時】2012年2月26日(日)9:00

【場所】天理教(奈良県天理市)

天理大学の岡田正彦教授のご助力を得て、天理教の月次祭と教団本部、天理参考館の見学を行った。学生の参加はなかったが、15名ほどの研究者が参加し、授業教材とする写真を撮影したり、式次第の観察を行ったりし

た。また天理参考館を見学し、博物館で宗教文化を学ぶ方法や説明等についての知見を得た。

「宗教文化教育の教材研究会」

【日時】2月26日(日)13時半～17時

【場所】天理大学研究棟3階・第1会議室

【発表者】

猪瀬優理(龍谷大学)「『宗教社会学』を担当して—シラバスと実際の授業」

大谷栄一(佛教大学)「京都の盆行事をフィールドワークする」

小原克博(同志社大学)「宗教文化を伝えるための素材と技法——テキストからリッチメディアまで」

【コメンテーター】土屋博(北海道大学)

【司会】井上順孝(国学院大学)

天理教の見学会に引き続き、研究会を行った。猪瀬氏は、ご自身の宗教社会学の授業のシラバスを手がかりに、授業内容を紹介し、宗教社会学として教える内容をどのように選択し、授業として組み立てるのかを論じた。大谷氏は、大学のある京都の仏教民俗行事をテーマとして学生にフィールドワークを実践させる試みとその成果について論じた。小原氏は、授業で活用している現代的なメディアについて具体的な例を示しながら論じた。総合討議では、宗教社会学として、いまなにを教えることが必要なのかといった問題や、学生にフィールドワークを実践させる上での注意点、また You Tube などの現代的なメディアを授業に採り入れる上での効果や問題点などを巡って活発な議論がなされた。

2012年度以降は、宗教施設だけではなく博物館等の見学も行いながら、研究会を積み重ね、それぞれの研究者の授業内容がより豊になるよう研究者間のネットワークの構築を行っていきたい。

(平藤喜久子)

国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育 — 開かれたネットワークによる取り組み —

平成23年10月16日（日）、日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 井上順孝 國學院大學教授）、宗教文化教育推進センター（CERC）の共催により、国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」を開催した。

このフォーラムは、次のような趣旨のもとで企画された。

宗教文化教育の教材は、これまで、教科書、参考書、補助資料等、活字媒体が主であった。しかし、映像資料もよく使われるようになり、インターネット時代になるとデジタル媒体も急速に広まっている。

デジタル映像は、YouTube やニコニコ動画といったインターネット上の動画投稿サイトやスマートフォンに慣れているこれからの世代にとって、ごく日常的な情報媒体である。また、だれもが容易に映像・動画をネット配信できることで、作り手と利用者の境界があいまいになっている。宗教文化に関する多様な情報がこのような環境のなかに含まれている。

宗教文化教育においては、これら情報を用いるさいのリテラシーや、教材作成・活用の新しい発想が求められるだろう。デジタル映像時代が宗教文化教育にどのような新しい課題を提示しているかを、幅広い視点から考えてみたい。

このような趣旨にもとづき、海外から2名、国内から3名のパネリストに、デジタル映像を用いた教育実践を紹介していただきながら、

その可能性と課題を提示していただいた。当日司会を担当した一人（もう一人は Norman Havens 神道文化学部准教授）として、その内容を簡単にお伝えしたい。

セッション1 中学校社会科における「宗教文化」の取り上げ方と映像を用いた授業 織田雪江氏（同志社中学校・高等学校）

織田氏は、中学校社会科の授業で宗教文化をとりあげるさいの近年の動向として、教育基本法改正にもとづく新しい中学校学習指導要領の2012年度からの全面実施にともなう「伝統や文化、宗教」の学習内容の充実と、開発教育・国際理解教育における「多様性の尊重」や「多文化社会」の観点からの宗教文化の学習とを挙げた。後者の実践例として、国立民族学博物館の貸出用教材「みんなぱっく」を参考にして集めたイスラム教に関連するモノを教材とした授業や、NHK「イスラム潮流」（1999年放送）の映像を教材とした授業を紹介した。さらに、戦時下の日系アメリカ人の強制収容所での生活を伝える映像をもとにしてニュース原稿を作成する授業や、神戸モスクでの生徒たちとムスリム女性との対話を紹介し、メディア特性についての認識を深める実践が「宗教文化」の学びでも生かせるとした。

セッション2 映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって— 岩谷彩子氏（広島大学）

岩谷氏は、大学での大人数講義（「情報活用概論」）で活用した「インド」を表象する

3つの映像を紹介しつつ、それをもとに映像による宗教文化教育が抱えている課題を述べた。

3つの映像とは、まず、岩谷氏自身がフィールドワークのさいに撮影し、編集した南インドの霊媒師の映像である。2つめは、南インドの宗教実践者が映像制作会社に依頼して制作した、寺院でのセアンス（降霊会）を映し出す広報用映像である。3つめは、女神信仰を描いた勧善懲悪ものの商業映画である。

制作者、制作目的、被撮影者と制作者との関係、想定される視聴者がそれぞれ異なっているこれら3つの映像を授業で視聴し、受講学生に感想を寄せてもらったが、多くは映像の部分についての印象にとどまるものであった。このような受動的な構えを克服し、メディアに内在するフレーム問題と、メディアを通じた他者理解にともなう問題を喚起するには、どのような教材の提示が必要かを検討することが課題だとした。

セッション3 ニュージーランドの大学における Blended Learning と宗教文化教育—大学ティーチングの再考— Elica Baffelli 氏（オタゴ大学）

ニュージーランドのオタゴ大学で宗教学を担当する Elica Baffelli 氏は、ニュージーランドの大学教育の特性として、国内に点在する大学で開講されている科目を受講するために遠隔教育が積極的に採用されており、Skype 等を活用した e-Learning と教室内の集中コースとを組み合わせた Blended Learning の取り組みがあることを挙げた。そして、このような教育環境のなかで、さまざまなデジタル映像を教材とした宗教文化教育を行っているとし、YouTube や Second Life などを活用した具体的な実践事例を紹介した。メリットとして、学生の注意を喚起できること、活字・静止画資料に比べてものごとの複雑さを伝えられること、また学生自身が映像を制作して

みることで創造性が養われることが挙げられ、デメリットとしては適切な資料を探すための検索に時間がかかること、消去される場合があること、情報の信頼性が挙げられた。

セッション4 一回きりの経験の限界：アート教育におけるデジタル動画の活用 Alan Cummings 氏（School of Oriental & African Studies, University of London）

Alan Cummings 氏は、日本の古典文学・古典芸能をロンドン大学の学生に教えるさいのデジタル動画の活用を事例にとり、そのような映像の視聴経験を通して学生が何を学ぶかに焦点を当てることで、当の古典文学・古典芸能が生み出されたときと類似した環境がそこにあらわれていると主張した。

動画投稿サイトの YouTube で閲覧できる古典芸能に関する素材の数は、著作権の問題などもあり限られているものの、伎楽や延年の舞などの貴重な映像が見られる。また地方の民俗芸能をアマチュアの観客が撮影した映像は臨場感があり、それは演劇が他の観客と一っしょに見るものであるという感覚を思い起こさせてくれるという。また、学生が源氏物語などを人形劇に仕立てて演じた動画などは、それ自体がひとつのパフォーマンスとして、古典文学・古典芸能が産み出されたのと同様の創造性あるソーシャル・ネットワークを経験させるものとなっている。

セッション5 宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題— 平藤喜久子（國學院大學）

平藤氏は、大学の授業で日本人および外国人学生に日本の宗教や神話を教える授業を担当している経験から、宗教文化に関しては他文化・自文化という差はもはやなく、日本文化が他文化化している状況を指摘した。そして、YouTube の投稿映像や映画を活用した授業において、この差のない状況で学生の関

心を惹く映像素材がいかに有用であるかを述べた。

しかし同時に課題もあるという。映像教材によって学ぶべき神話などの内容そのものではなく、登場人物の身なりなどの注意を惹くものに学生が集中してしまうことや、またコミュニティの土着の文化よりも主流文化のステレオタイプの理解を促進してしまうおそれがある。こうした問題を回避するような授業の工夫が必要であるとした。

コメント 岩井洋氏（帝塚山大学）

岩井氏は、5つのセッションに対する総括的なコメントとして、次の3つの問題を指摘した。

第一は、「二重のリテラシー問題」。デジタル映像を教材とする宗教文化教育には、「宗教リテラシー」と「メディア・リテラシー」という2つのリテラシーが関わってくる。さらにそれは学生のリテラシーと教員のリテラシーのズレという問題でもある。

第二は、「二重のフレーム（枠）問題」。現実を切り取るフレームと、思考を枠づけるフレームである。前者は周りのコンテクストを抜いてしまうものだが、逆に Cummings 氏の発題はそのコンテクストを浮き立たせて、古典文学・古典芸能が生み出される環境と今日の情報環境を結びつけるという試みになっていた。後者は、平藤氏の発題にあったような、土着の民俗文化の主流文化化、ステレオタイプ化といった問題につながっている。

第三は、「授業デザイン問題」。今日の大学教育では学習到達目標の明確化が叫ばれており、どのような授業をめざして何をやるかが真剣に議論されるようになってきている。そのさい、方法、素材、知識、スキルといった要素のそれぞれに注目し、どのような素材を使うかだけでなく、知識・スキルという面でどのような発問をするかということにも注意を向ける必要がある。

総合討議

岩井氏のコメントを受けて、まずパネリストの5人がリプライを行った。織田氏は、授業デザインに関して、いろんな素材をとりあげながら批判的な解釈を養っていくことを課題として挙げた。岩谷氏は、学生の関与・参加が重要だとして、たとえば不快なほどの大音量で聞かせるなど、身体的な感覚にはたらしかけ、フレームの存在に気づいてもらう工夫を紹介した。Baffelli 氏は、学生のメディア・リテラシーが多様であり、メディアを研究したことのない学生にそのことを注意させるのは難しいとした。Cummings 氏は、必修授業でやる気のない学生からよい反応を引き出すツールとしてデジタル映像環境を考えていると述べた。平藤氏は、神話の授業では文化多様性から来る問いが生まれること（旧約聖書の天地創造を神話とすることへの抵抗感）を期待しているが、そこからズレた反応が出てしまうこともしばしばあり（浦島太郎はかわいそう）、そこに授業展開の難しさがあると述べた。

さらにディスカッションでは、デジタル映像を教材とすることで生じる教員の意図と学生の解釈とのズレに関して、それを当然のものとして受けとめつつ、どのような工夫ができるかが語られた。批判や皮肉の込められた映像は使わないこと、差別的な表現に敏感であること、といった対処策や、ズレの中身を分析する視点をもつことなどが提案された。

むすび

デジタル映像を活用した宗教文化教育のあり方に関して、具体的な授業実践を組上に乗せた発題とディスカッションは充実した実りの多いものであった。フォーラムの副題にある「開かれたネットワークによる取り組み」とは、宗教文化教育に携わるそれぞれの教員、研究者の工夫の積み重ねや抱えている課題を、このフォーラムのような開かれた場で交換し、

それを明日からの教育に反映させていくことを狙いとするものであった。フォーラムでは、岩井氏の的確な総括のおかげで、国内外の教員で思いのほか悩みや課題を共有しているこ

とがわかったことも、大きな収穫であった。これからもこの連携の輪を広げていきたい。
(黒崎浩行)

研究所購読・収蔵英文雑誌とその活用

日本文化研究所では、いくつかの英文学術雑誌を収集している。これらには定期購読しているものと、寄贈されたものが含まれるが、すでに旧・日本文化研究所時代から継続してきているもので、その数は相当にのぼる。日本文化研究所が改組を経て研究開発推進機構のなかの一機関となった2007年以降のものを中心に、これらの一部は、現在学術メディアセンター（AMC）5階の共同研究室2に配架されている。その数は本報告執筆時点で18誌310冊を超え、3段に収められている。これらは本研究所の収蔵資料の一角を構成していながらも、今まであまり活発に利用されてきたとは言いがたい。本報告は、これらの全体像を示した上で、より積極的な活用方法を模索することを目指すものである。

まずは、購読・収蔵雑誌名の一覧をアルファベット順に挙げる。次頁の表を参照してもらいたい。「所蔵巻号・年」のところは2010年以前まででとなっているものは、現在購読・収集を停止しているが、それ以外は現在も購読・収集が継続されている。

全体的に、日本研究・宗教研究に限らず、広く社会学・民族学・民俗学・人類学・地域研究の各専門誌が収蔵されているのがわかる。日本研究のものは『Japanese Journal of Religious Studies』『Monumenta Nipponica』『The Journal of Japanese Studies』の3誌、宗教研究のものは『Japanese Journal of Religious Studies』『Journal of Contemporary Religion』『Journal of the American Academy of Religion』『The Journal of Religion』の4誌である。

全体像が概観できたので、次に活用方法について考えたい。それには、研究所・機構内部での利用と、外部利用あるいは情報発信という両面で考える必要がある。

研究所ならびに機構内部での利用という面では、単に新着雑誌を配架するだけでは有効活用は望めない。どの雑誌が新たに到着したか、何の雑誌がどこまで到着しているかを共有できるような体制構築が必要となるだろう。また、利便性を高めるという面では、2011年度には一部雑誌をスキャンしPDF化する作業も進められた。現在全体の2割ほどが済んでいる。もちろん公開を目的としたものではないが、引き続きこの作業を進めていく予定である。

ただし、この作業を進める際に注意しなければならないのが、現在では各雑誌のオンラインアクセスがかなり整備されてきていることである。たとえば、『Asian Ethnology』や『Japanese Journal of Religious Studies』などは、無料でアクセスでき、PDFがダウンロードできる。また、『American Ethnologist』『Journal of Contemporary Religion』『The Journal of Japanese Studies』なども、巻号が限定されているものもあるが、本学のLANからアクセスが可能である。そうした情報の共有ならびに購読誌の再検討も必要となってくるだろう。

こうした内部での共有・活用体制の構築を踏まえた上で、外部利用面を考えたい。すなわち、これらの雑誌のほとんどは本学では本研究所のみに収蔵されているのだが、現状では本学図書館の蔵書検索システム「K-aiser」

では登録されておらず、ヒットしない。内部での活用体制を整えた後、なるべく近い将来に図書館に移管し、広く利用に供したいというのが全体的な方向性である。また、情報提供・発信という面では、たとえば前述の日本研究3誌・宗教研究4誌のなかから、広い意味での日本宗教・文化に関わる論考を拾い上

げ、その簡単な紹介・レビューを定期的にするなどの工夫があってもいいかもしれない。いずれにせよ、本研究所が継続して収集してきた、これらの英文雑誌がより広く活用される方法を今後も模索していきたいと考えるものである。

(塚田穂高)

表 共同研究室2 配架の英文雑誌一覧

誌名	刊行元	所蔵巻号・年	冊数	年間 刊行数	地域・分野
American Ethnologist	American Ethnological Society	33-2~39-3 (2006~2012)	24	4	民族学
American Sociological Review	American Sociological Association	72-1~77-4 (2007~2012)	34	6	社会学
Anthropology Today	Royal Anthropological Institute	20-1~26-5 (2004~2010)	40	6	人類学
Asian Ethnology	Nanzan Institute for Religion and Culture	67-1~71-1 (2008~2012)	9	2	アジア 文化研究
Asian Folklore Studies	Nanzan Institute for Religion and Culture	65-1~66-2 (2006~2007)	3	2	アジア 民俗学
Comparative Sociology	Brill	5-1~11-4 (2006~2012)	30	6	社会学
Harvard Journal of Asiatic Studies	Harvard-Yenching Institute	67-1~72-1 (2007~2012)	9	2	アジア研究 (東・中央)
Japanese Journal of Religious Studies	Nanzan Institute for Religion and Culture	31-1~38-2 (2004~2011)	16	2	日本 宗教研究
Journal of Anthropological Research	The University of New Mexico	63-1~68-2 (2007~2012)	21	4	人類学
Journal of Contemporary Religion	Routledge	22-1~27-2 (2007~2012)	15	3	現代宗教研究
Journal of Oriental Studies	The University of Hong Kong and Stanford University	40-1~41-2 (2005~2006)	3	2	東洋研究
Journal of the American Academy of Religion	American Academy of Religion	75-1~80-2 (2007~2012)	21	4	宗教研究
Journal of the Royal Anthropological Institute	Royal Anthropological Institute	13-1~16-3 (2007~2010)	18	5	人類学
Monumenta Nipponica	Sophia University	61-1~67-1 (2006~2012)	16	2	日本研究
Senri Ethnological Studies	National Museum of Ethnology	71~76 (2008~2010)	6	4	民族学
The Journal of Asian Studies	Association for Asian Studies	66-1~69-3 (2007~2010)	13	4	アジア研究
The Journal of Japanese Studies	Society for Japanese Studies	32-1~38-1 (2006~2012)	13	2	日本研究
The Journal of Religion	The Divinity School of the University of Chicago	87-1~92-3 (2007~2012)	22	4	宗教研究 (神学含む)

※年間の刊行数は、年により多少のバラツキがある場合もあるが、近年の平均的な刊行数を示した。

※『Asian Folklore Studies』の継続後誌が、『Asian Ethnology』である。



共同研究室 2 の研究所購読・收藏英文雑誌

研究所ウェブサイトのリニューアル

2011年度には、日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」ならびにデジタル・ミュージアム・ワーキンググループ（DMWG）の活動の一つとして、本研究所ウェブサイト（<http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/index2.html>）のリニューアルを行ったので、その概要を報告したい。

日本文化研究所は、2007年の改組により研究開発推進機構となり、その機構内の一つとしての日本文化研究所となった。すでに旧・研究所時代から多くのデータ類をともなった研究所ウェブサイトが構築されていたが（<http://www2.kokugakuin.ac.jp/ijcc/ja/>、現在はアーカイブとしてのみ稼働）、2008年11月に行われた全学的なウェブサイト・リニューアルにより、現行のサイトに移行した。

現行のサイトは、ALAYAというシステムで入力・構築されている。これにより、全学共通のフォーマットで、各学部・機関・部署のページが閲覧できるようになっている。

全学的な移行以降、3年以上にわたり、現行のシステムで研究所サイトが構築されてきた。しかし、ALAYAは共通のフォーマットで提供できる利点がある反面、あまり自由度が高くない。また、各機関ページ内のメニューバーの初期設定も限定されており、それほど自由には増設できなかった。具体的には、メニューバーは「概要」「構成員紹介」「事業紹介」の3つのみであった。従来のサイト構成を振り返っておくと、「構成員紹介」については、研究所スタッフの一覧画面であるので特に大きな問題はなかった。だが、

「概要」には、研究所の紹介文と所長挨拶／設立の趣旨／設立の経緯に加えて、研究所関連のイベント情報や、関連プロジェクト・研究ページなどへのリンクが押し込まれていた。他方、「事業紹介」には現在進行中の2つのプロジェクトの紹介に加え、過去のプロジェクトや過去のイベントの記録、デジタル・ミュージアム（DM）や神道事典（Encyclopedia of Shinto, EOS）などのコンテンツ、刊行物の情報などが全て押し込まれていたのであった。「概要」「構成員紹介」「事業紹介」という限られたメニューのなかでやりくりすることが求められていたとはいえ、これでは第一にサイト訪問者・利用者にとって使いにくい。何らかの形で本研究所サイトへのアクセスを得たとしても、たとえばDM・EOSなどへのリンクや刊行物の情報がどこにあるのかわからなければ、サイトとしての意義は半減してしまう。これは、研究所スタッフにとっても同様に感じられていたことであった。必要に迫られて過去のデータ類にアクセスしようとしても、どこに行ってもよいか一見してわかりにくいような状況だったのである。

以上のような問題意識が、DMWGの場において提示され、話し合わせ、共有された。こうした問題は、何も日本文化研究所だけに限られたものではなかった。現に、機構内の他機関のサイトを見ても、校史・学術資産研究センター、研究開発推進センター、伝統文化リサーチセンター（2011年度で事業終了）、博物館学教育研究情報センターのものは、「概要」「構成員紹介」「事業紹介」のみで構築されている。学術資料館（考古学資料館・

神道資料館)は、3つに加えて「収蔵資料紹介」のメニューバーを増設し、コンテンツ紹介にあてている。なかにはリンクが多くなっているようなページも散見される。今後、コンテンツがより充実した後も、利用しやすいようなサイト構築がやはり必要とされていたのであった。

こうした状況を受けて、まずは改善のモデルを提示するという意味もこめて、日本文化研究所サイトからリニューアルを行うこととなった。

改善の具体的な一手としては、メニューバーの増設である。これまでのコンテンツを検討し、「概要」「構成員紹介」「事業紹介」という従来のものに加えて、「刊行物一覧」「成果公開」「関連サイト」を増設する案を立てた。さらに、英文紹介のページである「Info in English」も加えることとなった。

改善後のサイト構成を簡潔に示したものが、以下の図である。主な改善点について、箇条書きにして整理しておく。

◇「概要」ページ

- ・トップページ化。研究所紹介・概要のみに
- ・開催予定のイベント情報は機構サイトへのリンクを提示

◇「構成員紹介」ページ

- ・外国人スタッフ名の原語表記

◇「事業紹介」ページ

- ・プロジェクト紹介（現行・過去）に特化

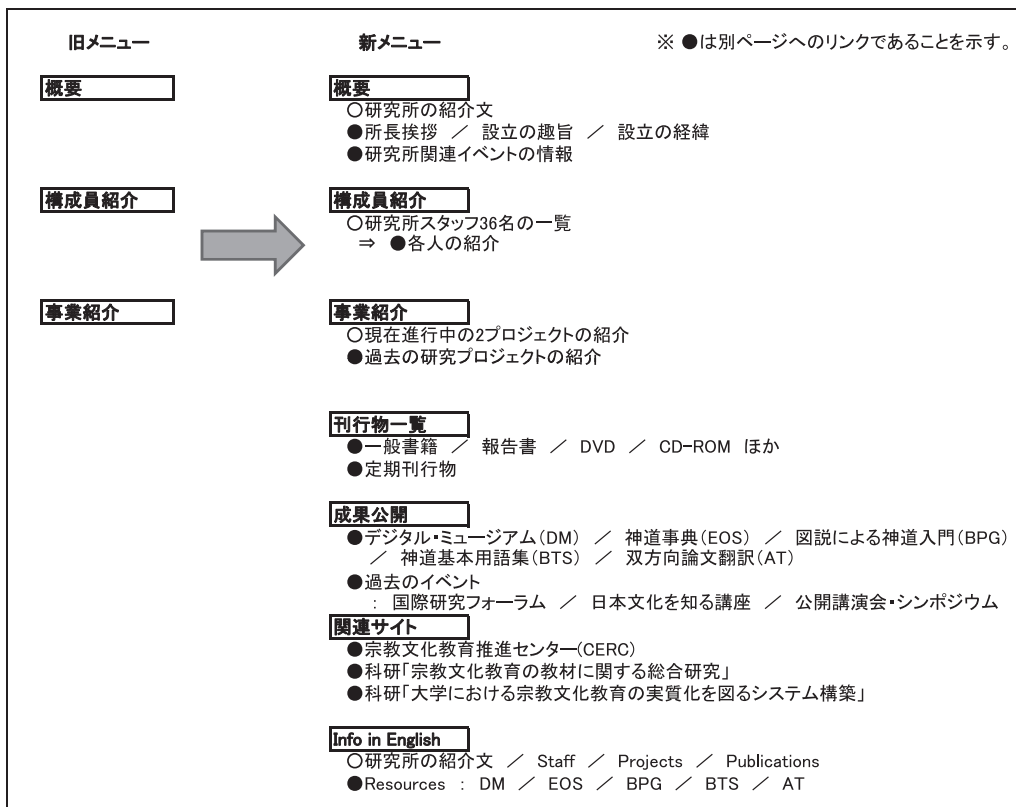
◇「刊行物一覧」ページ

- ・「定期刊行物」情報は機構サイトへのリンクを提示（機構関係の定期刊行物は機構サイトに一元化の方針）

◇「成果公開」ページ

- ・各コンテンツの英語表記の追加
- ・過去のイベント情報の整理

図 日本文化研究所ウェブサイトの新旧メニューと構成



◇「関連サイト」ページ

- ・リンク先の整理

◇「Info in English」ページ

- ・外国語閲覧者に向けたシンプルなガイドページとして新設

以上の改善を経て、全体として、メニューバーを頼りに、必要な情報やコンテンツがどこにあるか、現在どのような事業や活動が行われているのか、分かりやすくなり、大幅にアクセスが改善されたということが言えよう。また特に、「Info in English」ページの新設や英語表記の充実などを通じ、サイトを訪問した外国語閲覧者に対してのガイド機能が向上した点も指摘できる。

本研究サイトのリニューアルが、今後、機構内他機関や学内他機関がウェブサイトを改善する際の一つのモデルケースやヒントとなれば幸いである。

ただし、課題もまだある。主な点では、

- ・アーカイブとして機能している旧サイトの

コンテンツ類の完全引き継ぎ（本研究所関連情報へのアクセスの一本化）

- ・「構成員紹介」ページのスタッフ名読み仮名のローマ字表記への置換
- ・「刊行物一覧」ページの各刊行物についての情報統合と形式統一の徹底

などが挙げられる。これらの改善を進めたい。

DMやEOSをはじめとする研究開発推進機構ならびに本研究所のコンテンツは、教育現場での活用という点においても、非常に高い参照力と活用可能性を持つことは疑いない。また、毎年国際研究フォーラムの開催などを通じて、あるいは国際的な学術成果発信という点からも、その発信力が求められている。しかし、ウェブサイトの不便さなどのためにそうしたアクセスが妨げられているとしたら不幸なことである。今後も、単に情報の掲載のみをもってよしとするのではなく、利用者の目線に立って、サイト構築と改善を行っていきたいと考えている。

(塚田穂高)

The screenshot shows the website for the Japanese Culture Research Institute (日本文化研究所) at Kokugakuin University. The page is in Japanese and features a navigation menu on the left with options like 'Home', 'About Us', 'Staff Introduction', 'Publications', and 'Info in English'. The main content area includes a header with the university logo and a search bar, followed by a banner for the 'Research and Development Advancement Organization' (研究開発推進機構). Below this, there is a section titled '日本文化研究所' (Japanese Culture Research Institute) with a date of '2012年4月23日更新' (Updated April 23, 2012). The text describes the institute's history, its research focus on Japanese culture, and its commitment to international collaboration and academic advancement.

日本文化研究所ウェブサイトトップページ

第2回国学研究会

日本文化研究所研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」では、平成23年11月2日（水）から4日（金）にかけて、金沢市における史料調査を行うとともに、11月3日（木）午後第2回国学研究会を開催した。以下、その概略について報告したい。

1. 史料調査

今回の史料調査は、加賀藩を対象として、国学者の地域拠点および当該藩の神社政策研究のための史料を収集することを目的とするものである。加賀藩は、田中躬之、河内盛征、石黒千尋といった気吹舎門人を輩出したことで知られており、なかでも藩校明倫堂で国史講釈を行った石黒千尋については、著述において開国・交易の必要性を説いている点が注目されてきた。しかし、そうした議論の背景となる彼の思想の全容や、石黒の議論が周囲に与えた影響をより深く考察するためには、藩や地域の状況を踏まえた検討が要請される。このことは、石黒を研究対象にした場合だけでなく、加賀藩における国学者の存在形態を考える際には常に当てはまる。近年、加賀藩に関する研究が活性化しつつあるが、国学者や神社政策に関する研究では必ずしも満足な成果を得られていない。今回の史料調査ではこれらの領域に関する史料調査を行い、その成果にもとづいて今後他の藩や地域を視野に入れて加賀藩における国学者や神社政策の位置付けを図ることによって、国学者・神社政策一般に対する理解を深めることが可能になる。

史料調査に先立って、研究事業のメンバーは加賀藩の宗教政策について、事前に古谷易士（作業協力者）による報告にもとづく内容の検討会を行った。

実際の史料調査は、11月2日午後、3日午前、4日全日に金沢市立玉川図書館近世史料室にて行われた。参加メンバーは、遠藤潤、松本久史、小田真裕、小林威朗である。この調査では、玉川図書館近世史料室内の加越能文庫に含まれる近世藩制史料のうち、寺社関係史料である「寺社方御条目帳」「御領国諸神主組合之事」「延宝年中加越能社寺来歴」「持宮等争論一卷」「加賀国神社録」「神仏混淆調理方留帳」などの史料、および加賀藩に関係する国学者、すなわち石黒千尋、狩谷鷹友らによる著述などについて、実物の調査およびデジタルカメラによる撮影を行った。今回対象とした史料のうち、寺社関係史料には、近世加賀藩の寺社政策の具体的なあり方を明らかにするものが多く含まれていた。また、加賀藩に関わる国学者の関係史料では、その思想内容について直接記述したものばかりでなく、蔵書形成に関わる史料も見出され、今後、当該国学者の思想形成については多角的に検討することが可能になった。

2. 第2回国学研究会

今回の史料調査にあわせて、史料調査参加者ならびに対象とする地域の国学者に詳しい一戸渉（金沢大学准教授）および三ツ松誠（ともに共同研究員）を交えて、当地で第2回国学研究会を開催した。その内容について、以下報告したい。

日時：平成 23 (2011) 年 11 月 3 日 (木)
15:00-17:30
場所：金沢大学サテライトプラザ (金沢市
西町三番丁 16 番地 金沢市西町教
育研修館内)

報告者：

一戸 渉「北陸の国学」
小林威朗「国学者の対外認識から見
る世界観と教化思想」
小田真裕「加賀藩国学者石黒千尋の
対外認識 —『来舶神旨』
を中心に—」
松本久史「国学関係人物データベ
スに見る加賀の国学者」

一戸は「北陸」の示す具体的な地域として、越中、若狭、越前、越後を取り上げ、それぞれの地域で代表的な国学者について説明した。越中では、礪波今道、富田美宏、五十嵐篤好らをあげた。若狭・越中では橘曙覧や伴信友、越後では生田万らを取り上げて、各学者の活動について説明した。論点としては、それぞれの学者が江戸を指向しているか、京都を指向しているかなどの点が、その学問の性格を考える上で重要であると指摘した。また、それぞれの地域の中心となる学者がいたのかどうかについても検討の余地があったとした。

小林は、対外意識に関して論じている国学者・神学者を比較的網羅的に取り上げ、その中で加賀の国学者である石黒千尋の対外観がどのような特徴を示すのか明らかにしようと試みた。谷川士清、本居宣長、服部中庸、塙保己一、平田篤胤、大国隆正、平田延胤、久保季茲のそれぞれについて、対外意識を論じる際に特徴的な点を指摘した上で、石黒千尋『来舶神旨』の内容を説明し、石黒に関する先行研究に対して、再検討を行った。

小田は、これまで書物研究の視点から石黒千尋に注目し研究を進めてきたことを前提として、石黒の対外意識について、その意識にまつわるプロセスのさまざまな局面について検討することが必要だとする問題意識に立ち、彼の著述のみならず受容した知識・情報の総体を把握することを試みた。石黒の著述のうち『来舶神旨』や『近世諸蕃来舶集』の内容を説明した上で、『来舶神旨』の情報源について論じた。

松本は、研究開発推進センターで作成している「国学関連人物データベース」に掲載されている加賀国国学者を包括的に示し、それぞれの人物の概略や活動時期について示した。

(遠藤 潤)

新宗教研究にとっての認知科学・ニューロサイエンス

井上順孝

はじめに

認知科学やニューロサイエンスの最近における展開は、人間の思考や行動の特性についての議論に新しい光を投げかけている。そのパースペクティブは先史時代から現代に至る時間の幅の広さをもち、またあらゆる社会や民族を対象とする空間的広がりをもつ。ミクロからマクロに至る対象の縮尺度も多様である。ホモサピエンスとしての特性に言及する一方で、現代の情報環境への対応にも言及する。視覚、聴覚をはじめ情報の受信の経路を細かく分析し、また記憶や表象の形成の仕組みを脳神経のはたらきを分析、シミュレーションしながら、人間の認知のメカニズムやそのメカニズムが構築された生物学的な理由などを追求している。

認知科学と総称される研究は、現在に至るまできわめて学際的に行われてきているが、それが展開するに際して当初もっとも関わりがあったとされる学問領域は、哲学、心理学、人工知能、ニューロサイエンス、人類学の6つである。この領域を見ただけで、認知科学が議論している内容が、宗教研究にも関わりがあることは了解される。心理学、言語学、人類学は、従来から宗教研究と関わりが深い。宗教心理学、宗教人類学という分野があるし、言語学と神話研究の関わりは、マックス・ミュラーなどの研究者の例があるように、当初から密接なものであった。これら宗教学に深く関連する研究分野において、当初から認知科学に目を向ける研究が出ていたわけであるから、宗教学に認知科学やニューロサイエンスの成果に関心を向ける研究があつて当然である。

認知科学は認知革命¹と呼ばれる1960年代前後からのいくつかの新しい研究方法によって急速に注目されるようになったが、「脳の10年」²と呼ばれる1990年代の研究によって、認知科学はニューロサイエンスの研究成果にとりわけ大きな影響を受けることになった。これと並行するようにコンピュータ技術の革新により、さまざまな人間集団の行動のシミュレーションを高速で行えるようになった³。こうしたことが相まって、人間の行動や思考の特性といったことに関する議論は、新たな段階を迎えたと言っていい。

認知科学やニューロサイエンスの射程距離は広いので、従来もっぱら宗教研究から論じられてきたような現象、たとえば宗教儀礼、神観念、回心体験といったことについても、すでにいくつか分析が試みられている。とはいえ、それらにおける宗教史的な事柄への言及が、これまでの宗教史研究の成果を十分踏まえているとは言い難い。それゆえ、この新しい研究のパースペクティブがこれまでの宗教研究に対し、どのような点で新しい視点をもたらすかの検討は、まだ緒についたばかりとみなすべきである。宗教研究にとって重要な提起と思われる議論を、宗教史をきちんと踏まえて検討するという試みが、宗教研究者側から多くなされることによって、認知科学やニューロサイエンスを宗教研究にどう関連づけられるかの議論が厚みのあるものになると考える。

すでに試みられている理論的なフレームの宗教研究への適用可能性については、宗教史や

宗教現象のさまざまな局面でなしうる。本論では、認知科学やニューロサイエンスが、宗教研究のとくにどのようなテーマへの影響が大きいのかを概観した上で、具体的な宗教史、宗教現象の対象として日本の新宗教を選ぶ⁴。後述するように新宗教研究の分野は、この作業にいくつかの利点をもつ。それを考慮しつつ、新宗教研究の分野においては、どのような研究テーマが認知科学やニューロサイエンスでの議論と連接可能かを考察する。

1. 宗教研究が再考を迫られる理由

宗教研究においては、宗教の起源やその原初形態、神観念の成立過程、宗教と呪術との違い、宗教がほとんどの社会に存在する理由などは、その初期から大きなテーマとして論じられてきた。しかし、世界の宗教の多様な現象が知られるようになると、これらの問いへの唯一の答えを見いだすのが困難になってきた。個別の宗教史についての資料に基づいた緻密な論証は積み重ねられたことは、人間の営みとしての宗教を全体的に把握する試みには、非常に困難さをつきつけることになった。

だが認知科学やニューロサイエンスの展開は、こうした宗教研究の初期からの根本的問題、またその後展開したいくつかの基本的な研究課題にも新たな見解を差し出そうとしている。宗教の根本的問題とは、宗教がいつ起こったのかという起源の問題、あるいは宗教は他の現象とはどの点で区別されるのかという宗教現象の特質の問題などである。

宗教の起源に関しては進化心理学での議論が参照されよう。代表的なものとして、ボールビー (John Bowlby) の進化的適応環境 (Environment of Evolutionary Adaptation, EEA) という考え方がある⁵。この考えによると、現在の人類の認知能力は 100 万年～1 万年の時期 (更新世、石器時代) に形成されたが、この時期は環境の変化が激しく、自然淘汰が強く働いた時代であるとする。これに対し、農耕牧畜が開始されたのは約 1 万年前で、文明社会が築かれたのは数千年前である。そこで 100 万年～1 万年の時期に獲得された心の傾向が現代まで続いているとする。その頃は、おそらく 100～200 人程度の規模の集団で生活していたので、小規模の集団の解決のモデルがそこで形成されたとされる。そうすると、数万人、数十万人、あるいは国家なら億単位の人について考えなければならないのに、小規模集団における解決法に無意識的に頼る傾向が残存しているという理解が成り立つ。それも残存というより、ときに抗しきれないような力を発揮する存在である。あるいは現代人は体に悪いと分かっている、甘いもの、あぶらっこいものを好んで食べる傾向があるが、これはそうしたものを得るのが困難であった時代に獲得された傾向であるとされる。

進化心理学では人間が文明社会においても繰り返す原初的と思われる行動、たとえば暴力や縄張り争いや配偶者をめぐる闘争なども、100 万年にわたる狩猟・採取時代に適応して形成された脳の反応パターンで説明しようとする。つまり、100 万年ほどかかって獲得された認知の仕組みを、まだ数千年程度の期間しかない文明社会で形成されてきた認知の仕組みが、なかなか凌駕できないというロジックと理解できる。

認知科学やニューロサイエンスにおいては、ダーウィンの進化論、またユニバーサル・ダーウィニズム⁶に言及があったり、さらにミーム論が参照されたりする。ユニバーサル・ダーウィニズムやミーム論も、宗教の儀礼や思想が伝播する理由、なぜある宗教的教えが他の宗教的な教えより世界的に広まったのかという問いに、新しい視点を導入した。ユニバーサル・ダーウィニズムを主唱するリチャード・ドーキンスは、利己的遺伝子という概念によって人

間研究の視点を個体として生物次元から遺伝子次元に広げることで、きわめて大胆なパラダイム革命を行ったと言える。その影響はきわめて広範に及んでおり、多くの批判的意見があるが、ドーキンスのような視点も宗教研究から除外すべきではない。

認知科学やニューロサイエンスでは、宗教現象を合理的な分析を拒否する現象としては扱わない。宗教は宗教体験がないものには理解できないというようなスタンスは最初からとっていないのである。宗教現象を人間の思考や行為のあり方の一つとして分析し理解しようとする。理解の根拠として特別な資質や体験を前提としないで、むしろ生物としての人間、誰もが依存している思考や反応のあり方から理解しようとする。つまりは実証的な宗教研究に接続しているのである。その実証の手段が宗教現象とされているものの観察や、複数の現象の比較、各種の資料の検証といった従来のやり方に加えて、よりマクロな方法とよりミクロな方法の参照が必要なことを提起していると考えればよい。

宗教社会学的な研究の立場からすれば、これらの議論の少なからぬ部分が合理性というテーマに関わっていることに強い関心を抱かざるを得ない。合理性は他の人の行為を理解しようとするときの大きな拠り所であり、宗教現象の理解においても、それはウェーバー以来ひとつの重要なポイントであった。宗教現象についての議論には、善悪の問題や真偽の問題が多少なりとも関与してくる。というのも、宗教者の主張自体の根幹部分に、善悪や真偽に関する立場が表明されているからである。この善悪の問題には研究者が入り込めない局面があり、真偽の問題には確かめようがない局面がある。宗教社会学的な立場はむしろその主張が自然か不自然か、他から了解可能か困難かというような視点が主たる議論の柱としてなる。その際の手がかりの一つが合理性である。それゆえ、宗教現象を理解しようとするときの合理性が、何に依拠したものであるかが問われる。自然科学を成り立たせているような判断力を合理性の典型として、呪術などを非合理性の典型とするのは、これまでの宗教研究において論者の自覚の程度は別として、しばしばなされてきたことである。そこにはまた理論のもつ汎用性の問題もあった。たとえばウェーバーの合理性に関する議論が日本の多くの研究者に受け入れられたとすると、それはその説の汎用性を示している。自然科学の法則のようにどこでも成り立つとなれば普遍的モデルである。

しかし、後述するように、最近の認知科学やニューロサイエンスは、むしろ人間の意識や行動における非合理性の普遍性に着目しているところがある。この点も注意しておきたいことの一つである。たとえば進化心理学においては、一見非合理的に見える行動や判断が、人間の進化の歴史に照らして、合理的側面をもつのだという主張がある。この場合の合理性は、個体であれ、遺伝子であれ、主としてその生存にとっての有利性や自らのコピーの可能性の増大に関わる概念になる。これは合理性と非合理性に関して、100 万年以上にわたって形成されてきた人類の遺伝的特質という視点を導入している。

宗教社会学では、1990 年代に合理的選択理論 (rational choice theory) が注目された。ヤナコンニやヤングらが採用した。個人が自分の収益が最大になるように行動するという前提 (「最大化行動」の命題) のもとに、何が最終的な収益かを腑分けする⁸。合理的選択理論を宗教に適用すると、宗教の選択がモノの選択と同レベルで論じられたりする。これは従来の世俗化論を克服しようとする側面ももっていた。宗教が公的な領域で衰退したように見えるのは、供給する側が独占的な状態にあったのが自由競争に変わったのだと説明される。スタークとベインブリッジもこれを応用している。一方で伝統宗教が衰退するよう見え、他方で

新しい宗教運動が陸続と出現する、一つの社会に複数の多様な宗教が競合するような状況が進むのを理解する上で、この理論は分析の枠組みたりうるであろう。しかし、より重要なのは、合理性そのものの議論が一段と多様になったことである。

合理性の問題は、プロスペクト理論⁹によって、人間の認知バイアスに焦点が当たることになった。宗教現象がなぜ人間社会に広く観察されるかが、認知バイアスという視点からも議論されることになる。つまりは従来非合理的とされていたものの、存在理由、さらにはそれがもっているきわめて大きな影響力に目を向けさせることになる。簡単に言えば、科学や理性の発達により、宗教はより高度の状態に向かうというような見方は、単純すぎるということを示唆している。

こうしたことを概観するだけでも、認知科学、ニューロサイエンス、及びそれに関連した分野において議論されている合理性の再検討をはじめ、人間の認知や行動の特性に関する新しい理論の提起が、日本の宗教研究にとっても、今後大きな議論をもたらすことが予測されるのである。

2. 認知宗教学の展開

認知科学の成果を宗教研究に積極的に取り込んでいこうとする動きは、国外ではすでに本格化している。国際認知宗教学会（IACSR）が2006年に設立されている。そのホームページには、この学会の目的が、このテーマに関連して研究を行っているすべての研究者の国際的協力によって認知科学を推進することになるとしている¹⁰。また、自然主義的な研究を目指すものであって、科学と宗教の対話とか、科学の中の宗教もしくは宗教の中の科学を見出す試み、認知科学を通して宗教的あるいはスピリチュアルな教義の正当性を示そうとする試みなどではないとしている。2010年にはカナダのトロントにおいて第20回宗教学宗教史学会議（IAHR）が開催されたが、IACSR会長のマッコレー（Robert N. McCauley）をはじめとして、会員たちが全体会議や個別セッションで多くのプレゼンテーションを行った¹¹。

IACSRではたとえば宗教と呪術の違いに関して、本質的差がないとみなしているようである。また宗教の進化論的説明としては、次の2つがもっとも人気があるとする。1つは認知的副産物とみなすもの、もう1つは向社会的（prosocial）適応とみなすものである。しかし両者は補完的である。ただ、前者の立場では宗教と呪術にほとんど違いはないとするが、後者では超自然的主張は宗教にはつねにあるとは限らないとする。

この学会の主要メンバーは最近矢継ぎ早に研究成果を公にしている。中心メンバーの一人であるホワイトハウス（Harvey Whitehouse）とマーチン（Luther H. Martin）が編者となって、認知宗教学に関する書籍をシリーズとして刊行している。Cognitive Science of Religion Seriesである¹²。

認知宗教学は宗教の儀礼、実践、教化を新たな視点から分析しようとしている。このシリーズの一冊である *Ritual and Memory*, 2004 の中で、同書の編者の一人であるホワイトハウスは、彼が認知科学の応用として提起した2つの宗教性のモード（modes of religiosity）を中心的テーマに据えて、いくつかの宗教史をフィールドとしている研究者からの議論を集めている。2つの宗教性のモードとは、写象的モード（imagistic mode）と教義的モード（doctrinal mode）である。ホワイトハウスは宗教人類学者でフィールドはバプアニューギニアにおける現代宗教運動であるが、この2つのモードを自分の調査対象だけでなく、広く宗教史一般に適用で

きる概念として想定している。2つのモードは、特徴的な儀礼と実践のスタイルなどにおいて、異なった宗教生活をもたらす。認知科学や進化心理学における文化的表象の理解に対する流れと同じ傾向のものであり、淘汰主義の考えに基づく。残っていく文化とはどのようなものかという視点である。教義的モードは、意味的記憶に依存し、より冷静で組織的で言語的である。したがって、言語的形態による宗教的教義を頻繁に繰り返すことで特徴づけられる。典礼、説教、讃歌、読誦、決まった身体的運動などは、主としてこのモードで継承されやすい。一方、写象的モードはエピソード記憶に依存し、感情的で個人的な考えははるかに非言語的に伝えられる。まれにドラマチックな衝撃的な出来事をめぐって組み立てられる。トラウマ的イニシエーション儀礼などはこれに属する。これは少数の人の強度の個人的な孤高性の基礎になることもある¹³。

本の執筆者たちは必ずしも認知科学に積極的な人だけではなく、またホワイトハウスの説に全面的に賛同しているわけでもない。とくに文化概念を変えることには否定的な意見もあり、批判的視点もいくつか出されている。このように多様な宗教史の分野の執筆者たちに、この概念の検討をゆだねるという形式をとっていることに特徴がある。宗教史全般にわたって自説を検討してみようという姿勢がみられ、これが認知宗教学の現在のスタンスの一つをあらわしていると理解できる。

どのような宗教史が検討の対象になっているかを簡単に紹介する。ピール (J.D.Y. Peel) は、ナイジェリアなど西アフリカにおけるキリスト教の受容の例について検討している。マレイ (Brian Malley) はアメリカ合衆国における福音主義キリスト教が対象である。教義的モードは退屈誘発 (tedium effect) にさらされるが、福音主義がこれをどう乗り越えたかは分からないとしつつ、ホワイトハウスの意見を妥当としている。レイドロー (James Laidlaw) はインド半島のジャイナ教と仏教の現世拒否について論じている。両者の展開を2つのモードで分析しようとしている。

ベイリー (Susan Bayly) はベトナムのカオダイ教とインドのアーリア・サマージ (Arya Samaj)¹⁴ が対象である。ハウ (Leo Howe) は中世後期のキリスト教とバリ島のヒンドゥー教について検討している。キリスト教については宗教改革前の2つのモードについて検討する。退屈誘発は改革教会にとっては重要な問題だったが、宗教改革以前はそうではなかったとする。

ホイビエ (Christian K. Højbjerg) は西アフリカのポロ (polo) カルトについて検討している。これはリベリア、シエラレオーネ、南東ギニアの広い地域にまたがる小共同体における男性のイニシエーション祭祀である。写象的モードは高度に団結力の強い特殊な社会的つながりを生みだす傾向があることに触れ、ある地域ではそうだが、他では狭いつながりでない場合もあるとする。ホワイトハウスの説に若干の改良を求めている。

同じシリーズでは、バレット (Justin L. Barrett) が *Why Would Anyone Believe in God?* という書の中で、神概念が人間の認知にとって自然なものであるという議論をしている。後述する「最小反直感的」(Minimum Counterintuitive, MCI)、そして「過敏な動作主探知装置」(Hypersensitive Agency detection device, HADD) といったメンタルツールに関するいくつかの概念が用いられている。最近の認知的、心理学的な科学的データと理論を用いながら「なぜ誰もが神を信じるのか」という問いを正面に掲げている。人間は身の周りの平凡な姿について、深く意識することなく、似たように考えさせてしまうメンタルツールがあり、これらが、我々に神について考えさせるのだとする。神の存在の真偽を議論するのではなく、神に

ついでに信念をもつということが、人間の認知のメカニズムからして自然であり、避けがたくさへあることを示すのである。

国際的にはこのように認知宗教学は新しい研究分野として展開しつつあるが、日本では認知宗教学的な研究はまだきわめて少ない¹⁵。またニューロサイエンスとの関わりに着目した宗教研究もそれほど多くはない。ただこうした研究の重要性を指摘する研究者も少しずつ増えている¹⁶。

3. 新宗教の社会学的研究と認知科学的発想

日本の宗教研究において、1960年代より新宗教研究が一つの研究分野として広がった。資料・データの収集と分析、さらに実態調査も重ねられたが、分析に当たって用いられた理論には、欧米の宗教社会学や宗教人類学等で提起されたものが多く用いられた。とりわけアメリカの社会学や社会心理学の理論からは多くが援用された。マートン、パーソンズ、グロック、フェスティンガー、ゴフマン、バーガー、スタークといった社会学者、あるいは社会心理学者の理論は、新宗教への入信理論、新宗教の展開過程、教祖と信者との関係、新宗教の教義の特徴などについての研究の際に参照されてきた。

これらの理論の中にも、実は認知科学と相通じる視点を含むものが数多くある。ミクロ社会学を展開し「中範囲の理論」と呼ばれる研究方法をとったマートンは、準拠集団に関する理論を展開させたことで知られる。マートンは機能主義者であり、顕在的機能と潜在的機能という区別、逸脱行動とアノミーの研究、予言の自己成就など、宗教研究にとっても非常に応用範囲の広い概念を提供したが、とりわけ準拠集団という概念はその後の研究に広く適用された。彼はストゥーファー (Samuel Andrew Stouffer)¹⁷が行った調査結果に基づいて、所属集団とは別に準拠集団という概念を、人間の行動を理解する方法として用いた。準拠集団とは、人々がある評価や行動をするときに、比較の基準とする集団や行動の模範となるような集団のことである。

準拠集団は人間がある評価、行動をするときに参照される集団であるから、その人間の社会的認知がどのような内実であるかに着目している。ある宗教の熱心な信者は、日常生活において、その宗教の実践を優先させる。社会的な通念とは異なるような教団の主張さえためらわず受け入れたりする。こうしたことは日常的に観察されるが、準拠集団理論からすれば、そうした信者の選択は当然ということになる。つまり信者の認知のあり方から、その信者の行動の特性を説明していることになる。

グロックは準拠集団概念を前提に相対的剥奪理論を展開した。そして、剥奪の種類と、それぞれの場合に入信しやすい宗教というものを典型的に示した。彼は剥奪の種類に、経済的、社会的、有機体的、倫理的、精神的の5つをあげ、これらの剥奪感をもった人間が関わりやすい宗教教団の類型を、それぞれセクト、チャーチ、ヒーリング、改革運動、カルトとしている¹⁸。相対的剥奪はまさに認知的問題である。たとえば経済的剥奪にしても、絶対的な貧困、飢餓状況を言っているのではなく、準拠集団の中での比較であり、さらに自分が当然到達すべき位置を与えられていないことへの不満が本質とされる。宗教への入信は新たな準拠集団を得ることになるから、当然入信した人間の認知のフレームは変わらざるを得ない。それが剥奪感の解消をもたらす場合があると理解される。

社会心理学で広く知られるフェスティンガーの認知的不協和理論は、より明確に認知科学

的な視点に立っている。彼は『予言の外れるとき』¹⁹において、アメリカで活動していたUFOカルトの分析を行っている。そのグループでは女性指導者の予言が繰り返し外れるにも関わらず、信奉者がいなくなることが示されるが、これを認知的不協和理論で説明している。この理論はとくに予言によって信者を引きつけるタイプの教団への研究には適用されやすい。日本では1974年に一元の宮による地震予言の事件があった。真田孝昭はこの事件を分析している。予言が失敗し、教祖の元木教尊は割腹自殺を図るが致命傷ではなかった。そして元木は自分の自殺により日本列島が破壊からまぬかれたという解釈をする。ごく一部だがこれを受け入れた信者がいた²⁰。

またフェスティンガーの強制承諾に関する議論は、認知的不協和が行動の変化をもたらす過程について分析している。彼は人格の変化に関わる要素として、行動の統制、思想の統制、情緒の統制の3つをあげ、この3つは相互に関係しているとする。たとえば行動の統制がなされると、思想の統制、さらには情緒の統制がなされやすいことになる。これは宗教への強制的な勧誘について応用され、とくにカルト問題においては注目された議論である。マインドコントロールについて論じたハッサンは、フェスティンガーが示した3つの統制に加えてもう一つの要素、すなわち情報の統制をあげている²¹。

バーガーの間主観的 (intersubjective) という概念も、認知のプロセスと関係づけることができる。主体と対象との間で構築され続ける外在化、客体化、内在化という循環のプロセスは、発達心理学や認知心理学などでよく用いられる「共同注視」、さらに「心の理論」(ToM) という概念との関係で見えていくと、認知科学との接点が見えてくる。バーガーとルックマンによって提唱された社会構成主義は、主として社会学の土俵で示された立場であるが、認知科学で前提とされることと通底している。バーガーは、社会は外的な現実として経験されるものと、個人の意識の内面にあるものとして経験されるものとの相互作用から成り立つと考えているが、これは認知のメカニズムで想定されている「フレーム」の問題と重なるところが多い。

「心の理論」は、人間の認知が他の人間の認知を推測ないし予測しながらなされる点への着眼である。パーソナリティを個の問題として完結させるのでなく、絶えず他者との関係の中に構築されるものという視点は、すでにジンメルによって示されていた。ジンメルの視点は当時としてはかなりラジカルである。彼の立場はウェーバーの方法論的個人主義、デュルケームの方法論的集団主義に対し、方法論的關係主義と呼ばれることがある。個人も社会もそれ自体で存在する固定的実体ではなく、どちらも絶えず相互作用をしつつ変化の中に存在すると考える。認知科学においては社会よりもっと広い環境という視点が中心的であり、環境と個人との関わりの中にそこで構築されるものをみていくようになる²²。個人の行動や思想を研究するには、その行動や思想のあり方に関与してくる他人、社会、さらに環境との関係においてみていかなければならないという発想は、すでにジンメルにおいて明確に主張されていたということは、宗教社会学においても、あらためて認識しておきたい。

新宗教研究が参考にしてきた宗教社会学的理論のいくつかは、認知科学と非常に近いところに位置していたわけだが、実際に新宗教研究の各テーマにおける理論の適用をみても、それは言える。新宗教研究においては、家族が伝統的に継承してきた宗教とは異なる宗教への入信がなぜなされたかが一つの関心となった。新宗教教団への入信理由については、剥奪理論がしばしば参照された。またゴフマンのスティグマ概念は、大村英昭などにより、日本宗

教の宗教社会学的分析に援用されている。ゴフマンの「フレーム分析」は社会的相互作用の研究の一つであるが、それが着目しているのは、現実はどうあるかではなく、人々はどのように経験しているかである。そしてフレームとは対象の認知・意味づけ・対象との関わりを規定する機能を持っており、これが人々の経験をどう構成するかを描こうとした。こうした視点が新宗教の信者の思考法や行動についての分析には、一定の有効性をもつ。新宗教では教祖を救世主であるかのように崇拜する人がいたり、教祖によって病気を治してもらったと心から信じる人がいたりする。ここでその教祖が本当に救世主であるのかとか、病気が本当に治ったのかを検証するといった視点は宗教社会学的にはあまりなじまない。教祖を救世主とみなすフレームが、信者たち思考や行動とどのように関係づけられているかを分析するのが中心的であった。

リップ (Wolfgang Lipp) は、スティグマ論を自己スティグマ理論として展開しているが²³、川村邦光はこれを新宗教の教祖の分析に応用している²⁴。ウェーバー自身も、カリスマの成立にあたって、弟子 (Jüngertum) の存在の重要性に言及している。弟子たちの存在がカリスマが存在しうる前提ということになる²⁵。

こうした社会的な相互関係に関する議論は、相手を「そのような存在として認知する」ということに着目しているわけであるから、認知科学が提供するパースペクティブとそう異ならない。教祖は信者から崇拜される一方で、しばしば社会全体からは批判される。相反する評価が、教祖の存在意義を際立たせる効果を生む。多くの信者を集める教祖が、むしろ社会的には強い批判を受ける場合が少なくないので、認知の問題として議論することで、相反する評価の存在は、むしろ一般的社会現象として理解される。

4. 新宗教研究と認知科学・ニューロサイエンス

1970年代から80年代にかけて、日本の新宗教研究は急速に広がりを見せ、これまでほとんど研究対象とされてこなかった教団への実態調査が蓄積されていった。それとともに欧米の機能主義など宗教社会学の理論、あるいは文化人類学などの理論が取り込まれて、近代日本に生じた大衆的な宗教運動の分析がさまざまな観点からなされるようになった。多くの著書、論文が刊行されるようになったが、この時期の研究成果は1981年に刊行された『新宗教研究調査ハンドブック』と1990年に刊行された『新宗教事典』によって概要を知ることができる。

しかし1995年3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件以後、新宗教研究は量的にはっきりと減少した。これにオウム真理教事件の影響が及んでいることは明らかである。新宗教を研究対象に据える研究者自体が減少したし、教団調査がやりにくくなったのも確かだからである。オウム真理教事件後のマスメディアの新宗教に関する報道においては、新しく出現した団体がオウム真理教とどう違うのかという視点をしばしば導入した。オウム真理教が、宗教の危険性を測る場合の、一つの目安として機能するようになったということである。これを私は「オウム度」の導入と名付けたが²⁶、このような社会の動向は、研究者にも教団側にも影響をもたらさずにおれなかっただろう。

だがそれだけではない。研究の方法論上の課題も関係していると考えられる。『新宗教事典』によって新宗教研究の対象となるべきテーマと研究方法の概要は示されている。それをどう発展させていくかについて、とくに方法論的な課題がなかなか見いだせないでいたことも関

係している。それは新宗教研究固有の問題というより、宗教の社会学的研究ないし心理学的研究が直面していた状況と直接的に連動していたとみなせる。

1980年代までの新宗教研究においては、個別の教団についての実証的研究の積み重ねが豊富になされたことが、研究の展開を支えるもっとも大きな要因であったと言える。新宗教は新しい運動がいつ生まれどう展開するかわからない。すでに設立より百年以上経たような教団であっても、新たな展開がいつなされるか予測が十分つけられない。ここに歴史的教団の草創期の研究と大きく異なる難しさがある。資料やデータの内容はつねに更新が求められる。調査対象となる教団が増えたということは、更新作業もまた膨大に増えたことを意味した。

他方で対象を分析していく際の理論的枠組みも練られてきた。この作業は新宗教研究に独自のものではないので、宗教研究一般における位置づけを念頭に置きながらなされてきた。その際には宗教学の理論だけでなく、歴史学、社会学、社会心理学、人類学などの隣接分野の理論がテーマに応じて採り入れられた。

新宗教が生じてきた歴史的背景については、歴史学的手法が積極的に取り入れられてきた²⁷。また、新宗教がなぜ比較的短期間に多くの信者を得たのか、あるいは似たような運動が次々と起こったのはどうしてかといった問いには、すでに紹介したような社会学や社会心理学の理論が援用された。入信に当たっての動機、あるいはそのときのその人の心理的または社会的状況、入信を勧めた人との関係、入信を勧めるやり方の特徴、そのとき説かれた教え、等々、多くの分析の視点が展開した。そこにおいては広い意味での機能主義的な視点が数多く見られたし、また理解社会学的な視点も取り入れられた。

近現代の日本では、伝統的宗教への所属はいわば社会習慣として受け継がれた面が強くなっているが、社会的習慣の中に組み込まれていなかった新宗教への所属は、家族や周囲からの反発が生じやすかった。にもかかわらず、自発的な入信が数多く生じた理由は何か、これが新宗教研究でもっとも関心と呼んだ点のひとつである。つまり、なぜ社会的に安定した地位を得ている伝統宗教ではなく、新宗教なのか、さらになぜ新宗教の中でもその教団なのか、という問である。新宗教独自の社会的機能に注目が集まったが、それは機能主義的な宗教理解が大きな比重を占めていたからでもある。新宗教の入信理論として、グロックの相対的剥奪理論のような理解が適用されたのは、こうした観点からすれば当然であろう。

新宗教側が自ら述べたこともあって、研究者の間でも広く使われるようになった「貧病争」理論は、信者が抱えていた現実の問題に着眼していた。すなわち新宗教への入信動機の主たるものは、経済的問題（貧）、病気治し（病）、人間関係のトラブル（争）であるというものである。これは剥奪理論の素朴形態ともいえるもので、新宗教に入信する人々が抱えている現実の問題を問うていくなら、病の問題は常に大きな問題であるし、そしてこれはまた新宗教に限らない話である。

新宗教が現実の問題を解決しようとする人々に対応したことは、近世以来の伝統的宗教がその面での機能を十分果たしていないという説明がされたりしたが、これは基本的に機能主義的な観点に立つものである。すなわち、近代化がもたらした社会変化は、宗教面でもその変化に対応を要請するものであった。より具体的に言えば、都市化、産業化、核家族化、教育水準の上昇、こうしたことは宗教組織が社会制度の中で担う機能に変化を要請した。人々の移動が激しくなれば、それへの対応が必要である。農業主体から給与生活者が増えれば、

それに伴う生活形態の変化が宗教儀礼の遂行やそのあり方に変容を要請する。だが、檀家制度によって安定的に支えられた仏教宗派と、国家により管理されることになった明治期の神社神道は、社会変動への対応に必ずしも積極的ではなかった。それが新しい教団が新たな機能を担うことを可能にした。つまり、伝統宗教がこれに十分な機能を果たせなかったことが、新宗教による代替機能の発揮を容易にしたという理解である。

新宗教が担ったとされるこの機能は、ウィルソンのセクト論を視野に取り込むことで、個々の教団の果たす社会的機能について、細かな区分が試みるといった研究も生まれた。ウィルソンは回心型、革命型などセクトの下位区分に関する議論をしていたからである。新宗教が果たした新しい社会的機能はどのようなものかが、教団ごとの性格の違いと対応させられたりした。新宗教が教祖を中心とした運動となったのはなぜか、また現世利益的とされる入信理由が多くを占めたのはなぜかという問いもセクト論に関連づけられた²⁸。

研究のもとになる資料・データは増え続けているにも関わらず、研究方法に関しては、機能主義的理解や、ヨーロッパにおける社会変化をベースにした研究のフレームに依然として多く依存している。そうした現状を考えると、認知科学、ニューロサイエンスの視点からする新宗教研究への適用は、検討に値する課題である。認知科学的な視点から新宗教を研究対象とするときには、歴史的宗教を対象にする場合に比べて、いくつかの研究上の利点がある。まず信者の認知の内容について議論する際の資料の多さが挙げられる。これは多くの新宗教が機関紙・機関誌を刊行しており、そこに信者の発した情報が掲載されているからである。むしろ、そこに掲載されたものは編集作業を経ているから、信者の認知が直接的に表出されたものとみなすわけにはいかない。それでも、こうしたものが膨大にあるということは、信者の認知の傾向を知る上で役立つし、また編集作業に着目した場合には、どのような認知のフレームが提供されているかを知る上で参考にできる。新宗教は同時代的に観察される現象であるので、研究する側の認知と教祖や信者の側の認知の背景にある環境についての想定が比較的やりやすい。たとえば信者から救世主として崇拜される人物が出現する時代背景についての了解が、より得られやすいということである。こうしたことは歴史的宗教の研究には事実上困難な点である。

また、新宗教の成立過程や展開過程において、教祖と弟子との相互関係に関する資料もある程度得られることが多い。宗教運動の展開にあたって、指導者とその周りにいる人々との相互の認知がどのように展開するかについての材料が多少なりとも得られる。ここでは心の理論の適用も場合によって可能である。新宗教研究では、機関誌など文字資料だけでない。教祖や布教師たちの講演の様子や、それに対する信者たちの反応を知れる場合がある。場合によっては直接教祖との面談も可能であるし、座談会や法座といった地域ごとに信者が集まって語り合う場面の観察も可能である。どの程度の次元での心の理論が観察されるかを検討できる。

体験談の場や儀礼の場を観察できる機会もあるので、たとえばミラーニューロン説²⁹が果たして新宗教研究にどれほどの視点をもたらすかなどを検討するにも適している。あるいは後に触れるミーム論は、文化要素の淘汰を前提としているので、それぞれの教団が説いているどのような教えが信者に受け入れられ、どのように変形していくかという研究との連結を試みることが可能である。

こうしたことは伝統宗教の現代の状況を研究する際にも適用することができるが、新宗教

研究の場合は、運動の草創期や初期の展開過程を観察できるので、そもそも新しい宗教がどのようにして人々に広まるのかという研究にとって欠かせない。認知科学で議論されているいくつかの仮説的な理論を、新宗教研究に導入することで、従来とは異なる新しい研究のパースペクティブが生まれるかどうかは、これからの課題であるとしても、こうした新宗教という対象の持つ特性について確認しておくことは、新宗教研究を対象に選ぶ理由を考える上で重要である。

さて、新宗教研究が認知科学やニューロサイエンスの視点を参照することで、どのような展望が開けるかを考察する上では、IACSRのメンバーたちによる研究が大きな参考となる。彼らによってなされている宗教研究がどのような対象を扱い、どのようなテーマに焦点を当てているかをおさえる必要がある。さらに認知科学、ニューロサイエンスの方法を導入した人間研究、あるいは文化研究の一環として、宗教についても言及している研究が増加しているので、これらをも参照し、採択すべき視点があるかどうかの検討を行う作業も要である。これまでの新宗教研究では、新宗教が短期間に広まり、大衆的な支持を受けたのはなぜかという問いがしばしば提起されているが、それに関わるような議論も彼らによりなされているからである。

こうした観点からして、ただちに検討してもよさそうな概念として、HADDとMCI、「心の理論」をあげたい。

① HADDとMCI

戦後新宗教の活動が社会的に注目された頃、新宗教の特徴を伝統仏教などと比較する言説が多くあった。教義的に乏しく、現世利益が主体というような特徴づけが多く見られた。ここには伝統宗教のあり方を宗教の基本形とするのを暗黙の了解とし、新宗教はどこが特異なのかを取り出そうとするような認知のフレームがあったとみなせる。その後の新宗教の研究の展開にともなって、こうしたフレームとは異なるものが出てきた。たとえば新宗教は日常生活において生じる問題の解決を重視しているといった視点への移動である。あるいは伝統仏教が日常生活とやや離反した教学的な側面を重視しているのに対し、新宗教は現実の社会変化に対応する側面を重視するという視点の提示である。これらの新しい視点は、伝統仏教宗派で先祖祭祀が行われているにもかかわらず、なぜ先祖供養を重視する仏教系新宗教が数多く出現し、しかも多くの信者を得たのはなぜかという問いに関して一つの答えを用意したことになった。つまり伝統仏教宗派が葬式仏教化し、儀礼中心になってしまったのに対し、新宗教は先祖の供養の意義がリアルに説かれたことが、人々の共感と呼んだというような説明である。

こうした新宗教と伝統的な宗教との比較に関しても、たとえばバレットが*Why Would Anyone Believe in God?*の中で展開している議論を適用すると、新しい視点が提供されることになる。バレットは、省察的 (reflective) 信念と非省察的 (nonreflective) 信念という二つの概念を設定している。人間は宗教現象に限らず、一般的にこの二つの種類の信念をもっているが、非省察的な信念が無意識的で日常的であるのに対し、省察的信念は意識的で、ある体系だったものに依拠している。バレットは自由意志を否定するキリスト教神学者が、日常生活ではそれと矛盾するような思考をすることを例にあげているが、人間は片方だけで済ますことはできない。その関係が多様な現象を生んでいくと理解できる。

近代における伝統仏教宗派と新宗教に対する印象の違いは、伝統仏教宗派が省察的信念を

重視する傾向があるのに対し、新宗教は一般に非省察的信念を布教の場で積極的に用いているからではないか、というような視点を導入できる。新宗教でしばしば行われる病氣治しの儀礼や実践の場は、それを検討するには適している。理性的には病氣が治るには、それなりの手段が必要である。医学はその体系的手段を展開してきたわけである。しかし、たとえば「教祖にすがればどんな病も治る」というような信念は、非省察的信念に含められる。圧倒的なものに遭遇したときに、ひれ伏すのと同じようにである。それらは善悪とか正邪とは異なった次元での反応として分析した方が、それが広く観察されることを説明していく上で適切である。

さて、同書におけるバレットの中心的テーマは神の概念がなぜ普遍的に観察されるかである。そして先に触れた MCI と HADD という概念を用いた議論がなされるのである。これらはガスリー (Stewart E. Guthrie) が *Faces in the Clouds* (1995) という書の中で論じた理論がさらに展開されたものと言える³⁰。ガスリーは人間が認知の対象を擬人化する傾向に焦点を当てているが、バレットは対象をもっと広げている。石は動かない、動物は動く、植物は成長する、何かが動くときは動かすものがある、そうした普通に直観的に受け入れられている認知とほんの少しずれるものを MCI と呼ぶ。つまり石がみずから動くとか、何も無いのに何かがあると感じるといった、実際はあり得ないことを認めてしまうようなぎりぎりの脳の反応の総称である。

これを受け入れる人間の認知のあり方の一つが HADD で、出来事の背後に常に何らかの主体を見出そうとする認知の特徴を指摘している。これが神や霊の存在が世界に広くみられることと深い関わりがあるとする。MCI には受け入れられやすいものとそうでないものがあるが、祖霊信仰などは受け入れられやすいとする。MCI と HADD という概念を組み合わせ、神の存在を人間が想定するのがごく自然であることを論じる。つまり、神の存在があるかないか、それが証明できるかどうかという議論ではなく、人間がそのような観念をもち神の存在を信じることの自然さを論じているのがポイントである。これを適用するなら、たとえば教祖をなぜ信じるかについては、教祖信仰が人間の認知のあり方として自然であることかどうかを議論する視点を導入することになる。

HADD、MCI という概念は、新宗教の多くに見られる先祖崇拜とか先祖祭祀あるいは先祖供養などと呼ばれている信念・儀礼がなぜ広く行われているかを分析する際に参照されるフレームの一つになりうる。先祖祭祀は先祖の存在、あるいはその作用 (お蔭、崇りなど) に対する信念が存在することによって、当人には拒否しがたい認知内容を生み出す。これまでは、なぜ先祖供養が日本仏教において大きな役割を果たしているかは、東アジアにおける先祖崇拜の歴史、また日本仏教が先祖概念をどのように教義や実践にとりこんできたか、といった宗教史の展開から主に論じられてきた。しかし、なぜ先祖供養が大きなインパクトをもつのか。あるいは先祖崇拜が宗教観念において重要な位置を占める宗教文化とそうでない宗教文化があるのはどうしてか、という問いは早くからある。

バレットの議論はこれを人間の認知の特性から説明している。彼はギリシア神話のように神が人間の体をして、かつ不死と捉えるのも一つの MCI であり、見えない祖霊が実は存在するというのも MCI であり、火山など自然物に神が宿ると考えるのも MCI とする。これを援用すると先祖が死後もわれわれを見守っているという実感を抱くことは MCI の一つである。仏壇で題目を唱えていたら蠟燭の炎が急に大きくなり、そのとき「これは先祖の霊が私

の供養を喜んでいるのだ³¹と考えたら HADD という反応として適用できる。この理論からは、先祖の实在を感じる、先祖が喜んでいるというのは、人間の認知にとって「自然なこと」の一つであるということになる。またバレットは祖霊信仰は受け入れられやすい MCI であると言っているが、仏教系新宗教などで先祖祭祀が重要な位置を占めたのは、この考えを裏付けることになる。祖霊が本当に存在するかどうかの議論ではなく、先祖祭祀を重視している教団は、人間の認知的特性に適合しやすい教えを伝えているという議論が展開されることになる。霊友会や霊友会系教団は、伝統仏教宗派に比べて、先祖の存在をきわめてリアルなものとして把握し、それを日々の信者の実践に取り入れている。これはバレットのような立場からすると、人間にとってきわめて自然な選択をしたということになる³²。

② 「心の理論」(ToM)

サンドラ・アーモット他は『最新脳科学で読み解く 脳のしくみ』³³の中で、ニューロサイエンスによって宗教問題を議論することはほぼ不可能であるとしつつ、しかしある程度の貢献の可能性は示唆している。たとえば宗教を「心の理論」³⁴で解釈しようとする、すくなくとも二つの段階があるとする。まず「神は考える」という推論が第一段階で、「私は神を崇拝すべきだ」というのが第二段階としている。キリスト教の信仰に即して議論しようすれば、こうした見解も出てくるであろう。

心の理論とは、ある人間が自己または他者の心の状態、目的、意図、知識、信念などといったものを推測する心の機能のことを指している。対人関係において相手の心を読む、推測するという人間の心的能力に関する理論として広く用いられている。しかし神とか天使とか、あるいは祖霊とかが人格的に認知される場合、心の理論をこうした存在の「心」に関する推理に適用することは、認知科学からすれば当然の発想である。

心の理論では理論上では志向意識水準の次元はいくらでも深くなる。たとえば「私は神を崇拝している」というのを一次の志向意識水準とすると、「神は私が神を崇拝していると考えている」というのは二次の志向意識水準になる。さらに「私は『神は私が神を崇拝していると考えている』と思う」というのは三次の志向意識水準となる。神学的な議論は神の存在やそのはたらきについて心の理論による次元が深くなりがちである。それゆえ日常的な推論にとっては面倒になる。

この点について言えば、新宗教の布教の場では比較的志向意識水準の浅いものが多く観察される。たとえば仏教系新宗教によく見られる例をあげるなら、「ご先祖は私たちの供養を喜んでいる」という言い方がよくなされる。これは直截的であるから分かりやすい。これが「ご先祖は私たちが『ご先祖は私たちが供養すれば喜ぶ』と思っていることを喜んでいると思う」となると、次元は二つ増えている。供養自体のインセンティブとしては、前者が直接的である。しかしご先祖に供養しても意味があるのかというような否定的な考えの持ち主には単純な論理のように映るであろう。これに対し、後者はやや婉曲な感じがするが、否定的な考えの人に対しても、少し懐の深い回答として受け止められるかもしれない。次元の違いがそれぞれに異なる影響力をもつのではという議論できる。

新宗教の教義が単純という方向から理解するのでなく、心の理論における推論の次元の違いとして理解すると、一般的な事柄に関する心の理論と接続できる。つまり「浅薄な」あるいは「洗練された」といった一定の価値観をひそませた評価に対し、状況に応じた人間の思考や行動の特性として説明することになる。新宗教も教義が整えられると、先祖供養など儀

礼の意味付けも複雑になる場合がある。平和活動と先祖供養とが結びつけられたりする。

「心の理論」を新宗教教団の布教の場に適用することも新しい視点を生む。より次元の深い「心の理論」に基づき教団の教え、たとえば先祖供養について考察することは脳のメモリーを消費するから、常にそのような考察に基づき行動しようとする、脳に負担がかかることになる。実際、一つの教団の中に、教えを比較的直截に説いて信者に接する教師と、教学的にこれを深めようとする教学者との役割分化がみられる。たとえば霊友会系の立正佼成会では、多数の女性教師が布教に従事するが、他方では中央学術研究所のような教学機関がある。信者に分かりやすく先祖供養の意義を説く人々がいる一方で、教学的にその意義を考察する人々がいる。こうした役割分担は組織の機能分化と従来はとらえられてきたわけだが、これを複数の人間の脳のネットワークングとしてみると、多様な次元の心の理論のネットワークングが一つの教団の中で試みられているという理解が可能である。教団内でこれらが相互に参照される場合もあるからである。

この他、ニューロサイエンスの発達、とくに脳の状態をスキャンする技術の向上、fMRI、PETなどは、ある心理状態とそのときの脳の状態との対応についていくつか仮説を提起し、宗教体験、とくに神秘主義と呼ばれるものがどのような脳の状態をもたらすかという関心を生じさせた。その過程でたとえばゴッドスポット (god spot) の存在などが提起された。ゴッドスポットとは、宗教的信念をコントロールするような脳の部位である。これは宗教が普遍的に観察されることから、神への信仰は人間の脳の奥深くに埋め込まれていて、これが宗教的経験をプログラムしていくのとはして出された仮説である。脳の働きにモジュール性があるとする見解が前提になっている。もっとも、ゴッドスポットに関しては否定的見解が多い。脳の活動についての実験によっても、スピリチュアルな事柄にある特徴をもった脳の反応は見られるが、それは広い領域にわたる広い反応である。さらに、ゴッドスポットを見出そうとしても、その脳の刺激のもとになる事象が何か、その環境を宗教的と感じる人間とそうでない人間がいるという現実を踏まえるなら、検証そのものが困難になってくる³⁵。またこうした見解に対して、特定の刺激が特定の情動を刺激するにすぎないというドーキンスらの反論もある。宗教的体験の特質はそう簡単には分からないことは、あらためて言うべきことでもない。

しかし、同時に今まで宗教研究において「聖の領域」「神秘主義の領域」として、一定以上の分析をとどめていたことに対し、踏みとどまることを知らず突き進む研究があることを示している。それは宗教的領域が特別な領域であることを解体し、古代から人間が遺伝的に継承してきた環境への反応と、内省の仕組みとが織りなす一つのパターンであることに向かっている。むしろ宗教的領域として特徴づけられることはあっても、もはや聖なる領域のように、それ自身いくらか特権化されたような地位に留めおこうとするものではないということである。

5. 二重過程モデルの検討

こうした認知科学やニューロサイエンスを取り込んだ諸理論は、新宗教の組織、活動、教義など、さまざまな側面への適用可能性を検討することが可能だが、認知科学やニューロサイエンスからの宗教現象の分析において、定説に近いようなものが形成されているわけではない。研究者ごとにその視点は大きく異なるようである。宗教の社会的文化的的位置づけにし

ても、ドーキンスのようになり明確な否定的立場もあれば、ホワイトハウスやバレットのように、宗教史の理解の新しい視点を切り拓こうとする立場もある。ボイヤー (Pascal Boyer) のように、認知人類学によって、マクロな宗教理解を図る試みもある。

そうした多様な立場があるとすれば、特定の研究者が提示している分析のフレームに絞った上で、それが新宗教研究にどう適用可能かを検討してみるという方法が考えられる。そこでそうした試みの一つとして、スタノヴィッチ (Keith E. Stanovich) の二重過程 (dual process) モデルについての議論を組上に乗せてみたい。彼の議論は人間の文化や行動についてかなり包括的に扱っていて、宗教研究の分野でも検討すべきものと考えられる。さらに新宗教研究は先ほど述べたような特徴をもつので、こうした包括的な立場からの議論を検討していく上で利点がある。

スタノヴィッチは心理学者であるが、認知科学を踏まえている。また進化心理学の重要性を認識しながらも、合理性に関わる議論では批判もしている。彼の唱える二重過程モデルは、遺伝子に関する議論、ミームに関する議論、決定論に関する議論、進化心理学における議論、カーネマンらの合理性に関する議論などを踏まえた非常に多角的な視座をもっている。その著『心は遺伝子の論理で決まるのか——二重過程モデルでみるヒトの合理性』の原題は *The Robot's Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin* である。タイトルに明確に示されているように、人間をロボットに比喻しつつ議論が展開されている。ドーキンスに始まりブラックモア (Susan Blackmore) などによって強烈に支持されているところの、人間を遺伝子の乗り物とみなす立場を大きく取り入れている。こうした議論が、新宗教で展開されている現象の理解にどのような新しい展望をもたらしうるのかを少し検討してみたい。

二重過程モデルからすぐ連想されるのは二重相続説 (dual inheritance theory, DIT) である。DIT はボイドとリチャーソンが唱えたもので、世代から世代への行動パターンの継承は、遺伝的相続と文化的相続の両方が関与するとする³⁶。これだけの説明だと、従来の生得的・習得的という考えと大差なく思われるが、両者は独立しているのではなく、文化的相続のパターンは様々な遺伝的要因によって規定されるという考えがあって、その規定のされ方が関数的に議論されている。

スタノヴィッチの二重過程という考えは、さらにダイナミックな構図である。人間の行動、思考を左右するものを三層で考える。一つは遺伝子のレベル、一つはミーム的レベル、一つは前頭葉における思考のレベルである。³⁷スタノヴィッチの議論のポイントは、人間が遺伝子とミームの二重の操作を受けているとし、かつそれでも理性的に判断できる部分はどこにあるかを問い続けていくところにある。宗教はミームの一種としてみなされるが、同時に遺伝子的レベルの命令にも関係するとされている。

彼は、人間という乗り物が遺伝子とミームの相互作用によって二種類の制御を受けるとし、これが二重過程ということになる。その制御のあり方の特徴から、一つをショートリーシュ型の TASS、もう一つをロングリーシュ型の「分析的システム」と名付ける。TASS とは The Automatic Sets of Systems のアクリニムである。自動的に作動する認知機構のこととされる。これは従来の合理性・非合理性についての議論を再構築するやり方でもあり、「適応的合理性」という概念が提示される。

TASS の具体的な例として、顔貌認識、直観的数値、心の理論、社会的交換、道具使用、感情知覚、友情、育児、恐怖、努力配分・再調整などがあげられている。このうち顔貌認識

はガスリーやバレットの議論とも通じるものであり、人間が自然界に顔に似たものをみつけるとすぐそれを顔とみなす認知の傾向を指す。人面魚が話題になったりする例を考えると分かりやすい。これが宗教現象にとって重要なのは、宗教においては擬人化が占める位置がきわめて重要だからである。

一方、分析的システムは、対象に対する脳の膨大な演算を伴う認知であり、相当の時間がかかる。分析的システムに関しては、その主体に関する議論をしてホムンクルス誤謬をするに至らないようにと再三注意を促している。ホムンクルスというのは、脳の中にいる小人的な存在で、複雑な脳の働きを仕切っているような仮説的存在である。これが誤謬だというのは、そのホムンクルスを仕切るのは何か、ホムンクルスを仕切っているものを仕切っているのは何かという具合に、論理的な問いは無限に続いていくからである。

分析的システムは論理的、記号的思考に適した強力なメカニズムだが、文脈から離れた認知様式であるため演算能力への負担が大きく、維持するのが容易ではないとされる。たとえば神学的議論が結論に至るのに時間がかかり、また多様な見解が生じるのは、分析的システムに大きく依存するからと考えると非常にわかりやすい。

進化心理学と似たような発想をもつにもかかわらず、彼は進化心理学には批判的な議論も展開している。それは現代社会における非合理的な認知をあまりに合理的に解釈していくことに対してであって、発想法自体を否定しているわけではない。進化心理学はまた個人的差違の問題を等閑視しているとする。さらに、現代社会の脱文脈化の要求にも言及する。進化心理学者は遺伝子の目的と個人の目的が一致するような状況に注目しがちだが、現代世界は、進化適応認知システムのデフォルト値の一部が最適でないような状況をつくりだす傾向があるとされる。楽観的な進化心理学では対処できない現代世界の複雑な特質を重視するのである。こうした現代社会の特質にも言及していることも、新宗教研究にとっては参考になる。

宗教問題に関してはミーム論が重要な位置を占めることになる。宗教が環境に付随的に生じる偶発的ミームの古典的例であることはいうまでもない、という立場を表明している。またカトリックやイスラーム信仰は単純なミームではなく、ミーム複合体であるとする。彼の理論を考察するということは、新宗教をミーム複合体として扱う視点を受け入れることになる。

遺伝子におどらされ、ミームにもおどられる危険性のある人間はどんな生き方があるのか。これに対しては「ノイラートの試み」を提起している。簡単に言うと、万能の解決策ではなく、楽観論でもないが、自己修正の可能性をもつ合理性に望みをかけるような立場と考えられる。ホムンクルス的な存在を仮定しないから、そのときどきの「最終決定」は「賭け」のような性格をもつことになる。

遺伝子が個体の利益に反する作用をすることがあると同様に、ミームもそうした作用をする可能性がある。宗教概念もミームの一種としてとらえられているので、それは個体にとって有用であったり、逆にその存続にとって危険であったりする。集団自殺をさせるようなミームは個体にとっては利とならないような命令を個体に下すことになるといった例が示される。

彼の議論は宗教研究が主たる対象ではないが、宗教への適用が十分視野に収められているので、新宗教研究への適用可能性を検討する意味がある。たとえば、先に述べた入信理論に関しては、人がある新宗教を選ぶときにどのような TASS と分析的システムが関与していると考えられるか、新宗教が布教の手段としているものがどのようなミーム戦略とみなせるか

というようなテーマを導くことができる。従来の新宗教研究とは異なった視点からの分析になるが、ただその検討が思弁的となりらないように注意すべきである。先に述べたように新宗教には豊富な資料やデータがあり、それに即してこそ、新宗教研究を対象とした意味が出てくる。信者の体験談や、教祖と信者あるいは教師と信者とのやりとりを観察する機会ももてる。

そのような新宗教研究の特徴を念頭に置きつつ、具体的テーマとして二重過程モデルの適用を試みるに適切なものとして、ここでは教祖論、入信と布教、それにカルト問題に関わるテーマを中心的に取り上げたい。いずれも新宗教研究においては、多くの関心と呼んできたものである。

(1) 教祖論

日本の新宗教研究では、もっとも研究が集中しているのは教祖研究である。教祖は広く言えば宗教の創始者に含められるが、たんに宗教の創始者という以上のニュアンスをもたされるのが一般的である。マスメディアなどにおける使用方法では、否定的なニュアンスをもつこともある。世界宗教においては創始者は歴史的人物であり、かつ人物の数は限られている。しかし、新宗教では教団の数ほど教祖がいて、かつ場合によっては同時代の人物として研究できる。新宗教研究が教祖研究に集中したのは、ある意味で当然である。『新宗教教団・人物事典』³⁸においては、300人以上の新宗教教団の創始者や後継者の経歴や思想などを扱ったが、とくに創始者の場合には、非常に重要な宗教体験や宗教家となることを決意した前後の状況などについては、できる限り言及することを原則とした。それは新しい宗教を始める人物にとって、何らかの非日常的な体験があった可能性があることと想定したことによる。ある人物が「教祖」となっていく際の心理的過程を研究する場合は、回心研究や相対的剥奪理論などが適用されてきた。

新宗教では教祖崇拜が顕著であり、自分たちを指導してくれた人物、あるいは現に指導している人物の指示が、信者の言動に大きな影響を及ぼす。なぜ教祖はそのような影響力をもつのか。こうした議論の際にしばしば言及されたのがカリスマ論である。ウェーバーは支配の三類型の一つとして伝統的支配、合法的支配とともにカリスマ的支配をあげている。この議論のポイントは、支配を受けるのが当然と考える場合を挙げたという点であるが、カリスマ的支配は伝統的とか合法的という理由ではない支配の力を個人の資質に求めている。

しかし、これを新宗教研究に適用して、教祖が多くの信者を集めた理由を、教祖のカリスマ性で説明しようとする、一種の循環論法に陥りかねない。それは「人を魅するカリスマ性があったので信者が集まった」という説明と、そのカリスマ性が、「信者が多く集まったことがカリスマ性の証明になる」という説明とが循環するからである。また多くの信者を集める教祖とそれほどでもない教祖とがいる。その差をどう説明するのか。カリスマの多寡に還元すると、これもまた循環論法に陥る。

これまでの研究によって、天理教、大本、天照皇大神宮教といった「神がかり」と呼ばれるような体験をした女性が教祖であるような場合を含め、教祖のライフヒストリーに関わる資料や、中心的弟子たちについての資料はかなりの程度収集されている。教団形成の過程もそれぞれにアウトラインが描けるようになった。しかし、新しい運動が形成され、多くの信者が集まったことをカリスマ性だけで説明するのは、それらの資料を十分活かしていないことになる。なぜその人物は教祖たりえたのか。多くの弟子や信者を集めたのか。短期間に拡

大したのとはどうしてか。こうした基本的な問題についての分析は、まずは収集された資料やデータに即して行われるべきである³⁹。

あるいは、教祖が教祖となっていく際の重要なプロセスとして言及される「神がかり」現象については、これをシャーマニズムとして位置づける議論が多くみられる。その場合、佐々木宏幹が依拠するようなシャーマンの二類型、すなわち脱魂型と憑依型を参照して、それぞれの教祖がどちらに属するかという類型化がなされることがある。神がかりはさまざまな個人的状況と社会的環境の中で生じるわけだが、結果的に二タイプのいずれであるかを指摘するだけで終わるのでは、それが教団にとってもつ意味を十分議論することにはならない。

では、こうした新宗教研究にとっていわば基本的問題と言えるような教祖に関わるテーマに、二重過程モデルを適用することで得られる展望は何であろうか。二重過程モデルに即して教祖の思考内容や行動を捉えるときには、まず教祖もミームに動かされる存在であり、かつミームを広く伝達する存在であるという前提を導入することになる。さらに、特定の宗教信念ミームを構築し、それを広く伝える存在であるという特徴が想定される。新宗教をミーム複合体としてとらえると、教祖は一つの新しいミーム複合体を形成した人物ということになる。教祖はミーム側からすると大量のコピーをしてくれる「乗り物」になる。教祖が民俗信仰、伝統宗教から影響を受け、さらに先行する新宗教からも影響を受けていることは、これまでの研究で指摘されてきたことだが、ミーム複合体というとらえ方からは、宗教家にとって、こうしたことは常に生じることであって、新宗教の教祖特有ではないということになる。ミーム理論による淘汰という考えを導入すると、ある種の運動が大衆的な広がりを得やすいのは、淘汰圧が働いた結果であるとみなされる。

教祖は一定の数の弟子や信者を惹きつけたので、教祖を核とする組織が形成されたのであるが、ではなぜ多くの弟子や信者を惹きつけたのかという大きな問いが横たわる。二重過程モデルを援用しようとするなら、まず検討すべきことの一つは、教祖の言動に人間のTASSを駆動させるような要素があるからではないかという点である。この作業自体、多分に思弁的になる恐れがあるので、解釈には注意が必要であるが、この視点が従来のカリスマ論とどのような違いをもたらすのであろうか。

TASSは、人間の古くからの反応を刺激するものである。死の恐怖や緊急事態からの避難などは、TASSの反応を呼び起こすと想定される。そこで、教祖により説かれている教えの内容が、利己的遺伝子に訴えるようなものである可能性を検討することになる。TASS的反応をそそのものとして、死の恐怖を強く説くという点が挙げられる。死への恐怖は自己の存在の防御策と関わるもので、TASSへの反応をもたらす。かつて仏教では地獄図の「絵解き」によって、死の恐怖を喚起させ、仏教への帰依や罪への恐れを抱かせるということがなされていた。現代では伝統宗教は、そうしたことを過度に強調するのは好ましくないという立場が一般的である。

しかし教祖の中にはそれを強調した人物がいる。オウム真理教の麻原彰晃はその典型で、徹底して死の恐怖をあおった。「人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ」と繰り返し語ったことが知られている⁴⁰。これにより、彼の教え全体が信者に強いインパクトを与えることになる。重い病気になったことに対し宗教的意味づけを行うことも、死を連想させて教えを説くことになり、似た効果をもちうる。他にも生存を著しく脅かす事態の強調も含まれる。終末感を強調したり、破滅的な危機が迫っているとする教説などである⁴¹。

スタノヴィッチの説では、TASSの力は強烈でかつほとんど自覚されない間に人間の認知に影響を及ぼす。宗教の教典は一般に天国や極楽を描くよりも、地獄を描く方がリアルで具体的で感覚的に訴える内容である。あるいは源信の『往生要集』は厭離穢土・欣求浄土がキーワードであるが、浄土の素晴らしさの描写とは比べものにならないほど微に入り細に入り地獄の怖さが描かれ、それとの関係で現世の穢土が描かれる。つまり宗教の教説が人々の心を強く惹きつける一つのケースとして、TASSを刺激するような教えを説いたのではないかという仮説が提起できる。「切迫した終末観」が注目されるのも、これに関係づけられる。日本の新宗教では、終末を強調する教えはそう多くないが、戦前には一時期の大本などにその傾向がみられた。

教祖が信者に伝えた信念が「伝播に適したミーム」なのではないかという視点も検討すべきものである。スタノヴィッチは、「存続するミーム」について4つを挙げている。第一は、それを格納する人々の助けになるものである。たとえば、環境について正確な情報をもつようなミームは個体にとって有利であろうから、そうしたミームをもった個体を生き延びさせる確率が高くなるということになる。第二は既存の遺伝的傾向、あるいは領域特異的な進化的モジュールによく合うものである。指導者に従ったり、仲間を大事にするミームなどだという。第三は、そのミームに適した宿主である乗物を形成する遺伝子の複製行動を容易にするものである。たとえば子だくさんを奨励する宗教の信念などである。創世記(9:1)にあるような「産めよ、増えよ、地に満てよ」はその古典的例になろう。そして第四は、そのミーム自体の自己を永続させるような特徴をもつものである。ここにはサブカテゴリーとして、改宗戦略、予防戦略、説得戦略、敵対戦略、ただ乗り戦略、物真似戦略など多数のミーム・サバイバル戦略が含まれるとする。

新宗教の中には信者のつながりがとくに強調される場合がある。信者同士の社会的結束は一般に「同志縁」⁴²と呼ぶものを形成すると考えられるが、同志的つながりが強いことは、ミームの存続には有利に働くということである。あるいは、激しい布教とともに、「この教えを信じない者は地獄に墮ちる」と言うような教えは、TASSに訴えるとともに、そのミーム自体の自己を永続させるような特徴に含めうる。社会的には批判を浴びるような教えでも、信者が増えていく場合は少なくない。改宗的ミーム伝達の例として、スタノヴィッチは「わが国の軍力は危険なまでにレベルが低い」という信念を挙げている。これは危機感を伴うので、改宗行動を発火させるという。ファンダメンタリズムはこれと似ている。ファンダメンタリズムについては、「原点主義」「原典主義」「減点主義」によって特徴づけられたことがあるが⁴³、最後の「減点主義」は社会の墮落を説き、それからの脱却を主張する。改宗的ミーム伝達によく似た構造とみなせる。新宗教において、こうした教えは一般的ではないが、一時的にせよ信者たちの関心を惹いた事例を見出すことはできる。

(2) 入信と布教

新宗教が研究者やマスコミ関係者などに関心を呼んだ理由の一つは、比較的短期間に多くの信者が入会あるいは入信して大きな組織が形成されたことにある。なぜそのような現象が生じたのか。社会的な背景としては都市化、産業化、情報化などが影響したことは間違いない。これらは従来の研究によって明らかにされてきた点であるので、とくに説明を加えないが、これらはいずれも新しい運動を受け入れやすい条件として作用した。また短期間の広まりに関しては新宗教の布教方法、つまり万人布教者主義が一つの要因として考えられてきた

し⁴⁴、さらにその基盤としては情報の発信と受信の相互作用を促進する上での教育水準の向上と情報メディアの発達も挙げられる。

こうした社会学的な説明に対して、二重過程モデルでは何が新しい視点になるのか。ここでも伝えられていく情報の内容がポイントになりそうである。TASSを喚起し、分析的システムにとっても利用しやすいミームが存在したのではないかということである。これについては、HADDとMCIに関連して言及した先祖供養がまず候補となる。

先祖供養は新宗教、とくに仏教系新宗教にとっては、信仰実践においては、かなりの重要な位置を占める。バレットの考えに基づいても、先祖供養が多く宗教に見出されるのは不思議なことではないことを述べた。スタノヴィッチの説を敷衍すると、先祖供養はTASSに関わるとともに、日本社会ですでに常識に近いミームとして多量のコピーの担い手もっていた。それを取り込んだ新宗教は、生き残り戦略には利のあるミームを手にしたということになる。では祖先供養はどうして日本社会で広まったかであるが、これは一族の結束を高めるミームと親和性があるから、広く見出されるミームとなって不思議ではないことになる。

ときおり、先祖供養は崇りの観念と結びつく。先祖が成仏していないので子孫に禍や不幸が及ぶという教えを説く教団もある。この場合崇り観念は別のミームと解釈しうるが、それらが複合体をなすと、さらに強い作用をもたらす場合があると考えられる。先祖の崇りという考えは、仏教的な輪廻の思想から直ちに導かれるものではないが、日本では新宗教に限らず広く見出される観念である。これはTASSに働きかけるミームと理解すると、非常に分かりやすくなる⁴⁵。

スタノヴィッチは認知バイアスに触れ、カーネマン (Daniel Kahneman) とトベルスキー (Amos Tverski) の説の紹介にかなり頁を割いている。認知バイアスの問題は宗教研究には非常に重要である。先に述べた合理性が宗教行為の理解には重要な意味をもったからである。これまでの宗教研究でも、宗教は非合理的側面があることがその特徴の一つであるとされている。他の人からは根拠がなさそうに思えることを信じこんだり、明らかに自分にとって経済的など多くの面で不利益をもたらすような行動をあえて選択したりする。見たことがなくても神の存在を信じる、財産を捨てて出家したり、瞑想の生活にはいったりする。多くの時間を単純な儀礼に費やす。それらはその宗教を信じていない人からは、しばしば非合理、あるいは不合理に思える。理解を超えている、あるいは理解しがたいという反応を生む。

認知バイアスは、脳がことがらを複数のルートで処理していることと関係している。視覚でさえ、物の色や形、あるいはその物がなんであるかを認知するルートと、その物がどう動いているかを認知するルートは別々であることが分かってきた⁴⁶。人間が意識を形成したり、あることを判断していく上で、脳では複数のルートが独立に進行して、最終的に何かが決定的な仕組みがしだいに明らかになると、非合理的行為の意味もあらたに問い直されることになる。カーネマンらの行動経済学はまさにこの点に注目している。カーネマンらは、人間が論理的な意味での合理的選択をしない理由を認知バイアスなどに求め、プロスペクト理論を提示した。そこでは損失回避性という人間の心理的特性が指摘されている。人は何かを得るときよりも、何かを失うときに強く反応するというものである⁴⁷。この指摘からも、認知バイアスは宗教的信念を議論する場合にも検討すべきものであることが分かる。

宗教行動は非合理的なものであるとする議論がしばしば見受けられるが、仮にその非合理性が宗教以外の行動における非合理性と同じメカニズムなら、宗教行動の非合理性を特別視

する必要もない。宗教行動が認知バイアスと関係をもっているという視点を導入すると、あることを信仰するようになった理由、入信したり脱会したりするときの理由、宗教を嫌う理由などの説明として、認知バイアスを加えうる。認知バイアスは、進化心理学における理論と結び、明らかに不合理に見える人間の行動も、百万年単位での環境への適応という観点からすると、必要があって生じたバイアスであるという理解を生じさせた。またニューロサイエンスにおいては、脳の演算能力とも関係づけられる。常に合理的な判断をしようとする分析的処理が求められる。そこで用いられるアルゴリズムによる処理は単純な問題でも非常に多くの演算を要するので、脳に負荷がかかりすぎる。そこでヒューリスティックな処理をする。間違えることがあるかもしれないが、正解ないしそれに近い答えが得られる確率が一定程度あるからである。とりわけ、事実上の選択肢が二つか三つくらいしかなく、かつ生死に関わる問題、緊急に処理しなければならない問題は、アルゴリズム的処理をしている間に命を落したり、そうでなくても危機的状況に陥ってしまうという危険性が高い。ならば近似的でも仮にまちがった推論であっても、すぐに答えを出した方が、結果的にいい場合があるということになる。

死に至るような事態を避けようとするのは、生物に共通する。進化論的には古い起源をもつ機構と考えていいだろう。繰り返し死という言葉を発することは、死に関わる概念の連想をもたらす。こうした恐怖への反応は逃走か攻撃かである。窮鼠猫をかむは、逃走が攻撃に転じた例である。どのような知的な教育を受けようとも、この遺伝子レベルで発せられる反応には抗することはできない。あとはそれに全面的に従うか理性によって軌道修正するかである。しかし、ここでもその理性が教団のミームによって支配されているとすれば、おのずと反応は限られてくる。これにもまた反旗を翻すとすると、それは個人の大きな賭けということになる。つまり選択の結果が「乗り物」にとっていいか悪いか、事前には分からないからである。

現代のように日常的な安全性が高まった時代でも、予期せぬ危機はいつ訪れるかもしれない。認知バイアスはそうしたときのためになくなるともいえる。とくに生命の危機が突然に迫るといった事態をなくすということは、どの文明社会も達成し得ていない。それがライオンやトラの襲撃であるか、原発事故であるか、といったような違いは生じるようになったとしてもである。

新宗教の教えには、先祖供養の他にも、神道系新宗教であれば手かざしなどの儀礼がある。病氣治し、悪霊を除くといった目的をもつ。これが効果があったと考える信者の体験談などには、心身相関論からするプラシーボ効果から解釈されたりしてきた。手かざしによる病氣治しや悪霊祓いを信じる態度は、認知バイアスという視点から考えようとするなら、それが多くの呪術的行動と呼ばれるもの、たとえばコンピュータの上にウィルス祓いのお守りが置かれるといった行動に通底する思考法と比べるべきことが分かる。自然科学的な意味とか論理的な意味での合理性でこれらの行為を議論するのではなく、不安に直面したとき、そのような判断を是とする人間の認知のあり方を議論していくということである。

この観点からは、真に論理的思考に基づいた立場からは不合理でバイアスを伴った判断であっても、人間の環境への適応という観点からすると、ある種の合理性を持ちうるということである。さらに、生活の諸場面で起こるできごとにおいては、合理・非合理は明確な境界線をもったものでなく、相互に入り組んだものとしてあらわれるのが普通である。平たく

言えば、ある角度から見ると合理的なものが、別の角度からは非合理になる。その逆も成り立つのである。見えない存在を信じることなど、非合理的な思考や行動を多く伴うとされる宗教について論じてきた研究にとって、このような観点からの合理性の再検討は無視できない。

(3) カルト問題

オウム真理教事件以来、新宗教研究の分野にいわゆる「カルト問題」が参入してきた。新宗教研究においては、新宗教のいわば「正邪」を問うような論評をどう扱うかは、初期より一つの課題であった⁴⁸。戦後まもなくの頃の新聞や雑誌における新宗教についての評論などでは、戦前の「新宗教＝淫祠邪教」観を継承するような論評が少なくなかった。それらは端的に表現するなら、伝統宗教を宗教の正常な姿とし、新宗教を誤った、あるいは逸脱した姿として位置づけるやり方であった。こうした見方は大教団となったような一部の新宗教が、日本社会でそれなりのいわば市民権を得るようになると少し後退するが、今でも依然として存在する。新宗教の研究者の大半はそうした価値観を極力排除する形で対象と取り組んできている。しかしながら、オウム真理教事件以後、カルト問題が注目されたことがあり、新しく出現した教団の正邪を問うような論評は、ふたたび盛んとなった。新宗教研究においても、カルト問題、あるいはカルト性⁴⁹というテーマに関心が抱かれるようになった。正邪、善悪の価値軸をどう処理するかという問いが無視できなくなったということである。

カルト問題を布教方法を基準として論じようとする、一種のダブルスタンダードに陥りやすくなる。宗教教団の場合は「積極的な布教」であり、カルト団体の場合は「強引な勧誘」であるとするような判断である。それに社会的に「カルト」にみなされがちな教団が強引な勧誘をするかという、必ずしもそうではない。布教方法ではなく、教えや実践の内容が問題にされる場合がある。いわゆるカルト批判の場合、カルトとされる団体は個人を最終的に傷付けるという暗黙の前提がある⁵⁰。組織は拡大しても、そこに引きこまれた個人は結果的に不幸になるという視点である。

この点に関連して興味深いのは、スタノヴィッチが二重過程モデルで最終的に問題としていることは、ある決定が個体の利益になるかならないかという点である。これだけを取り出すと、ものごとの善悪を判断する際によく示される基準であって、何の変哲もなさそうに思える。しかし、その背後に自分の利益のつもりが遺伝子やミームの利益であることが多いという議論があつてのことである。遺伝子やミームの利益とは、つまり多くのコピーが可能になるということである。個体の利益が実は遺伝子やミームへの奉仕であって、個体の利益にはならないという例は、たとえば殉教を説く宗教などであるとされる。「国のために命を捨てよ」と説くことも同様の類になると考えていいたいだろう。

なぜこうした教えを受け入れる、あるいはさらに進んで惹かれる人がいるのか。ここにも認知バイアスの視点を導入しうる。ただし、これは実はきわめて厄介な議論になる。認知バイアスが生じるのは、脳の負担の軽減という側面がある。複雑な環境、状況のもとでなるべく脳の負担を減らすにはヒューリスティックな方法が選択され、これはしばしば各種の認知バイアスをもたらす。通常はそれでも大きな問題は生じない。多大な時間をかけてもっとも適切な品物を選ぶより、短時間で実は二番目、三番目であるような品物を選んでも、それが決定的な不利をもたらす状況というのはそうざらにはない。それにたいしての場合は、何が一番いいかの基準さえ単純ではない。

宗教を広める行為を、布教というより「宗教の勧誘」という観点からとらえるとき、認知バイアスは大きな参考となる。認知バイアスにはいくつかの種類が提起されているが、その中に演算バイアスと呼ばれるものがある。結論が道理に合っている場合に、推論をきちんと検証せずに受け入れてしまう傾向をいう。「私があなた方を大事にするのは、あなた方が信者になれば私の説得力を増すからである」という言葉と、「私があなた方を大事にするのは、私があなた方を自分の子どもと思っているからである。」という言葉のどちらを受け入れやすいであろうか。演算バイアスの観点からは、脳がその正しさを自動的に判断するのは後者となる。自分の子どもと思って大事にするという論理は、道理に合っているが、自分の説得力を増すために大事にするのは、功利性が読みとられてしまうからである。

自分の親が信仰している宗教は自然に受け入れられている場合が多い。それは親への信頼は道理に合うから、親が子どもに信仰を勧めた場合、子どもは受け入れるのが自然と判断する。ここでも一つオウム真理教の事例を出したい。オウム真理教のプロモーションビデオの中で、麻原彰晃が弟子たちを「子どものように思っている」と強調する場面がある。もし教祖が親のような存在であるとしたら、論理的にすぐさま判断できないようなことに、「親のような存在」の人の意見に従うのは、一つのヒューリスティックな選択である。逆からみれば演算バイアスを惹起しやすい言説を用いたということになる⁵¹。

むすび

新宗教研究に認知科学・ニューロサイエンスの研究視点を導入することは、これまでの議論とは大きく異なるパースペクティブをも取り込むことになる。これまでの研究においては、新宗教を近代社会に出現したものとして捉え、その社会変化に対応して形成されたものという捉え方が主流であった。教義的には伝統宗教ほど練られていないことが多く、歴史性が乏しいのでどうしても学術的な蓄積は少なくなるが、近代の社会変動がもたらした問題には直接的応答をなす部分が多いというように捉えられてきた。

これに対し、認知科学・ニューロサイエンスを援用した分析視点は、先史時代から形成され現代人をも動かしている人間の認知のあり方、反応の仕方に注目がなされる。近代の社会変化は、その反応が引きだされる条件として考察されることになる。これは新宗教と伝統宗教との間に引かれていた組織論からする境界線は、以前ほど重要ではなくなる。一方で新宗教と民俗信仰とに通底するものにはいっそうの注意が注がれる。

ミーム論を導入することで、新宗教研究がどう展開しうるかは、これからの課題である。宗教的に思考し行動するとされている人間を動かしているものの正体が、大半がそれ自身のコピーをさせることだけに関心をもつものの集合体だという前提は、伝統的な宗教性への議論にとってはきわめて挑戦的だが、方向性がみえづらいものである。それでも、宗教の現代的展開に対し、検討に値する視点をもっているのは疑いえない。宗教における悪の問題などがそうである。なぜある宗教運動が突然変質したりするのか、善を目指す運動であったはずなのに、どうして悪へと至ったのかなどの問いが重く問われるのは、それらがなかなか理解に苦しむ現象と認識されているからであろう。だが、異なったミーム同士の競争の結果というフレームを受け入れると、説明し難いというような現象ではなくなる。社会的に悪と批判されるような宗教運動や教団が出現したとしても、それはそれぞれのミームの存続に都合がよかったのだという説明になる。あるいはどうしてもよさそうに思われる儀礼や観念が長く継

承されることについても同様のことが言える。

それぞれの個体もっている遺伝子も、その個体に有用であるから伝えられたとは限らない。何か役に立つか、立たないかを個体を基準に考えるとなかなか解決できない。ところが遺伝子を主体にすれば説明しやすくなる。遺伝子はただひたすらコピーされることのみを戦略としてもつとするなら、それが宿主たる個体に役立つかどうかは一義的な問題ではない。個体をすぐ殺してしまうような遺伝子のみが、コピーできないような戦略をもつことになる。たとえば幼児期に自殺したくなるようにさせるような遺伝子は継承されないということである。

ミーム論を採り入れたスタノヴィッチの二重過程モデルは、宗教的な教義や儀礼のある部分が、なぜ時代を超えて伝承されるか、またなぜ伝承される部分とそうでない部分があるのはなぜか、といった議論に新たな視座を開いている。新宗教研究について言えば、教祖論や布教論など、新宗教がとくに問題としてきたいいくつかのテーマに新しい視点をもたらしている。

認知科学やニューロサイエンスが宗教研究に示唆していることの一つに、これまでの研究で呪術的とか原初的、あるいは未開といった表現で、人間が乗り越えるべきもの、あるいはすでに通過したかのようにみなしているものが、依然として人間の思考や行動の中核に腰を据え、大きな影響力をもっているということがある。また他方では、「聖なるもの」としてとかく神秘的な領域へと囲い込まれがちな事象を、人間の認知の自然な発露、そして誰にも観察される心のはたらきとして見ていくことで、ごく日常的な現象に基盤を置くものとして捉え直していく道を用意している。1990年代以降、たとえば認知心理学の立場から言語に着目したピンカー、認知人類学者のボイヤーなどと⁵⁾、宗教現象を他とは異なる特別な現象とせず、人間の認知の特性から生じたものとしてみなす立場は、いろいろな学問分野において増加の一途である。中には基本的に宗教を否定する立場のものもあるが、欧米の認知宗教学の主流は、宗教をいわば人間の諸活動のなかに再配置しようとする方向性をもつとした方が適切に思われる。伝統的な宗教に比べ、肯定的から否定的までその評価に大きな幅をもつ新宗教は、その意味でもこの新しい視点を取り込んで研究する意義が大きい。

注

- 1 ガードナーは『認知革命—知の科学の誕生と展開』（産業図書、1987年）の中で、認知革命という言葉を用い、それは1960年頃に生じたとみなしている。原著はHoward Gardner, *The Mind's New Science: A History Of The Cognitive Revolution*, 1985。
- 2 アメリカ連邦議会が1990年代を「脳の10年 (Decade of the Brain)」とする議決をし、1992年にはヨーロッパ会議でもニューロサイエンス研究の推進が決議された。
- 3 本稿ではこの面については触れる余裕がないが、たとえばベインブリッジ (William S. Bainbridge) は、*God from the Machine* という書の中で、コンピュータ・シミュレーションによって宗教所属が条件によってどのように変化するかを示し、これを現実の宗教の展開の例と比較している。
- 4 近代に形成された教団については、近代新宗教、ハイパー宗教などの概念を提起しているが（拙著『人はなぜ「新宗教」に魅かれるのか?』三笠書房、2010年を参照）、本稿ではそれらをすべて包括する意味で新宗教として言及する。
- 5 ボールビイはイギリスの心理学者。愛着理論 (attachment theory) を展開したことで知られる。
- 6 進化の思想・枠組みを生物進化以外の領域に拡大して考える分野・学問・思想をユニバーサル・ダーウィ

ニズムという。リチャード・ドーキンスの造語。

- 7 ダーウィンの進化論をユニバーサル・ダーウィニズムとして展開したドーキンスの宗教についての言及は過激とも言えるほどである。『神は妄想である』（原題は *The God Delusion*）、『悪魔に仕える牧師』（原題は *A Devil's Chaplain*）などは、タイトルからしてきわめて反宗教的である。彼が用いているミーム論には批判も少なくないが、ブラックモア（Susan Blackmore）など一部の認知科学者には非常に大きな影響を与えている。とくに文化を遺伝される情報として捉えていくのは、文化の継承が実際は誰によってなされているのかについての再考を促さずにはおれない。ブラックモアは、人間をミーム・マシンと規定する。自分もミーム・マシンであると公言してはばからない（*The Meme Machine*, 1999 参照）。文化はミームの塊ということになる。むしろ宗教もミーム群を構成しているとみなしている。
- 8 岩井洋論文「合理的選択理論についての覚え書」『國學院大學日本文化研究所紀要』86、2000年。合理的選択理論は宗教の自由競争の側面への注目であるとしている。住家正芳「宗教社会学理論における『市場』—宗教の合理的選択理論批判」（『宗教研究』79-3, 2005年）、藤原聖子「90年代の世俗化論」（『東京大学宗教学年報XV』、1998）なども参照。
- 9 行動経済学、1979年にカーネマン（Daniel Kahneman）とトベルスキー（Amos Tversky）によって展開された。現実の選択がどのように行われているかをモデル化することを目指すものである。プロスペクト理論では、認知バイアスが論じられ、これは宗教行動の理解に適用できる側面がある。
- 10 <http://www.iacsr.com/iacsr/Home.html>
- 11 たとえばマッカーレイは“Taking a Cognitive Point of View: Religions as Rube Goldberg Devices”（「ルーブゴールドバーグ装置としての宗教」）というタイトルでプレゼンテーションを行った。
- 12 Cognitive Science of Religion Series として、Altamira Pr から次のような書籍が刊行されている。
Harvey Whitehouse, Luther H. Martin, *Theorizing Religions Past: Archaeology, History, and Cognition*.
Harvey Whitehouse, *Ritual and Memory: Towards a Comparative Anthropology of Religion*.
Ilkka Pyysiainen, *Magic, Miracles, and Religion: A Scientist's Perspective*.
Jesper Srensen, *A Cognitive Theory of Magic*.
Justin L. Barrett, *Why Would Anyone Believe in God?*
William Sims Bainbridge, *God from the Machine: Artificial Intelligence Models of Religious Cognition*.
- 13 この議論に関しては認知的に最適な位置 cognitive optimum position、分岐する宗教性モード divergent modes of religiosity」といった概念が用いられる。
- 14 1875年にスワミー・ダヤーナンドによって設立された、インドのヒンドゥー教改革団体。
- 15 ジュマリ・アラムは「宗教の“感性”を探訪する——「認知宗教学」の予備的考察」（『文学会志』58、2008年）、「宗教とは何か？—認知宗教学的視点からの探究」（『山口大学哲学研究』18号、2011年）などの論文において、認知宗教学の可能性を論じている。
- 16 仏教心理学キーワードにこうした最近の動向を反映した項目が組み入れられている。葛西賢太他編『仏教心理学キーワード事典』春秋社、2012）を参照。またニューロサイエンスと宗教研究の關係に注目した最近の研究として、芦名定道他、星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか？』（春秋社、2012）がある。
- 17 ストウファアーによる *The American Soldier*, 1949 は、第二次大戦中に50万人以上のアメリカ兵に対し、200目以上の質問をした調査結果をまとめたもの。
- 18 日本でもこれを受けて、たとえば森岡清美は剥奪に関するグロックの5つの類型を、入信動機として4つの類型に分類し直している。すなわち基本的剥奪、下降的剥奪、上昇的剥奪、派生的剥奪である。森岡清美『現代社会の民衆と宗教』（評論社、1975年）参照。
- 19 Leon Festinger, Henry W. Riecken, and Stanley Schachter, *When Prophecy Fails: An account of a modern group that predicted the destruction of the world*. University of Minnesota Press, 1956.
- 20 真田孝昭「予言がはずれた後に—日本の事例の再吟味」『CISR 東京会議紀要』CISR 東京会議組織委員

会、1979年。

- 21 Steven Hassan, *Combatting Cult Mind Control*, Park Street Pr 1990 参照。
- 22 なお環境が個人に与える影響についての議論では、ギブソンのアフォーダンスという概念はきわめて重要である。J.J.ギブソン『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』（古崎敬訳、サイエンス社、1986年）などを参照。
- 23 Wolfgang Lipp, “Charisma—Social Deviation, Leadership and Cultural Change”, *The Annual Review of the Social Sciences of Religion*, 1, 1977.
- 24 川村邦光「スティグマとカリスマの弁証法」『宗教研究』253、1982。
- 25 これに言及したものとして渡邊秀司「カリスマの検討——「カリスマの構築」論に向かって——」『佛教大学大学院紀要社会学研究科篇』第39、2011年）がある。なお、渡邊は Jüngerium を使徒とする訳を採用している。
- 26 拙著「現代宗教を考える4 宗教観変えた九五年ショック」（『寺門興隆65』2004年）参照。
- 27 新宗教に関する歴史学的な視点を踏まえた研究は、村上重良らによって推進された。とくに『近代民衆宗教史の研究』（法藏館、1957年）は、60年以降の新宗教研究の一つの基盤となった。
- 28 この間の欧米の宗教社会学での理論を SISR（国際宗教社会学会）における発表テーマから見ても、依然として世俗化論が一つの潮流として存在していたことが分かる。新たなものとしては、先に述べた合理的選択理論があった。むろん、個別研究テーマとしては毎回多様な発表がみられるが、全体として理論的には大きな展開がなされているとは言い難い。
- 29 ミラーニューロンはイタリアのリゾラッティ（Giacomo Rizzolatti）らが1996年にサルの実験で発見した。ヒトにもこのようなニューロンがあるという説が支持されるようになっていく。他人の行動を見て、自分が同じ行動をしているときと同じようなニューロンの反応がみられることで、この命名がなされた。他人の行為への共感、情動の理解と深く関連するので、宗教儀礼の分析などへの適用の可能性がある。
- 30 ガスリーはこの書の中で、擬人化の問題とアニミズムの問題を扱っている。過大評価の方が安全性が高いということが主張される。ハイカーが熊を岩石と見間違えるより、岩石を熊と間違える方がましだとする。前者は熊に襲われる危険に直面することになるが、後者は逃げた無駄だけで済むということであろう。
- 31 これに類した体験談は、霊友会系の複数の教団の信者から聞いたことがある。つまり、たとえとして述べたのではなく、面談調査の聞き取り内容をもとに記したものである。
- 32 パスカル・ボイヤールはバレットとの共同研究も行っているが、『神はなぜいるのか？』（原題 *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought*, 2001）の中で宗教的概念が直観的存在論に寄生しているという考えを示している。近親者を埋葬するとき、なぜ罪悪感を感じるのかという問いを出し、これを認知的解離として分析している。また「死体は、私たちの人物ファイルシステムと有性システムがその人物の矛盾する表象を生み出すという、まさにその事実により、そして強い悲しみと捕食の恐れとがかわることにより、特別な認知的効果を生み出す」（295頁）とも述べている。
- 33 サンドラ・アーモット、サム・ワン共著、三橋智子訳、東洋経済新報社、2009年。
- 34 心の理論という用語は1978年にプレマック（David Premack）とウッドラフ（Guy Woodruff）による論文“Does the chimpanzee have a theory of mind?” *Behavioral and Brain Sciences* 1 (4) において使用され注目されるようになった。その後発達心理学などにおいて広く使われている。
- 35 ゴッドヘルメット（God helmet）を公案したパーシinger（Michael Persinger）という研究者もいる。ゴッドヘルメットは、入力型BMI（Brain-machine interface）に属し、脳の状態をコントロールして一定の対応する宗教的状态を作りだそうとするものである。これは、オウム真理教が信者に対して用いていたPSIを連想させないでもない。PSIは、パーフェクト・サルベージョン・イニシエーションの意味であるが、麻原彰晃の脳波を直接弟子にコピーするという発想で作られたもので、外形からヘッドギアと呼ば

れた。なお、BMI はモジュール仮説と結び付いた考えであり、IBIT (脳情報双方向活用技術、Interactive Brain Information Technology) などにより、医学面で応用が始まっている。IBIT は入力型 BMI と出力型 BMI を組み合わせ、身体を媒介せず脳と外界とで直接情報をやりとりする技術である。

- 36 Robert Boyd and Peter Richerson, *Culture and the Evolutionary Process*, University of Chicago Press, 1985
- 37 ドーキンスにより提起されたミーム論は、その後多様な用法を生むようになり、この概念の有用性を失わせかねない状況である。ここではスタノヴィッチの用法に沿って議論する。彼はミームは文化を構成する情報の単位で、普及したミームは常識となるという見解をもっている。またミーム論に関する議論が日本語に翻訳されたものとして、ロバート・アンジェ編『ダーウィン文化論—科学としてのミーム』(産業図書、2004年)がある。
- 38 井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編、弘文堂、1996年。
- 39 カリスマの支配の適用が再検討されるなら、当然議論は伝統的支配や合法的支配という残り二つの類型にも再検討されるべきである。これらも宗教現象に適用されてきたからである。そうした場合にはマキアベリ仮説の適用可能性なども議論されることになるだろうが、ここでは手に余る作業であるので、立ち入らない。
- 40 麻原の説法の特徴に関しては宗教情報リサーチセンター編『情報時代のオウム真理教』春秋社、2011年を参照。
- 41 韓国のタミ宣教会の牧師が1992年にイエス・キリストが再臨し、最後の審判が行われるとして、信者たちに衝撃を与えた事件がある。救われる、救われないはキリスト教の教義の根幹であるが、これが表現によっては死の恐怖を喚起することにつながる。
- 42 同志縁については拙論「信仰共同体の今—変質しつつある絆」(『岩波講座宗教6』、2004年所収)を参照。
- 43 拙論「ファンダメンタリズムの挑戦」(川田順造他編『開発と文化3 反開発の思想』岩波書店、1997年所収)参照。
- 44 万人布教者主義に関しては、拙著『新宗教の解説』を参照。これは仏教宗派や神社神道など伝統的な宗教があまり信者を増やさない一方で、新宗教が短期間に信者を増やす現象の説明として用いたものである。天理教は1890年代に創価学会は1950~60年代に急速な信者の増加をみせている。
- 45 むろん、伝統仏教も先祖供養を説いているのであるが、一般的にその説き方があまりTASSに訴えるものではない。
- 46 一次視覚野から側頭葉に下るルートである腹側路 (ventral stream) と一次視覚野から頭頂葉に上昇するルートである背側路 (dorsal stream) がある。腹側路は知覚した事物の色や形態、カテゴリーなどの認識し、対象の意識的知覚の形成に貢献する。背側路は物体の動きを認識し、その物体への注意、眼球運動、身体運動が制御される。意識的知覚には貢献しない。ふつうは両者は共同して認知を形づくっているので、二つのルートが独立しているということが分からない。だがどちらかのルートに関わる部位が損傷すると、それが明らかになる。腹側路に障害があると、知人とあっても誰だか分からないとか、物を見ても形を言えなくなる。だがその道具は使える。逆に背側路に障害があると、人や物をそれがなんだと認識はできるが、目の前の物を手でうまくつかめなくなったりする。
- 47 ダニエル・カーネマン『ダニエル・カーネマン 心理と経済を語る』(友野典男監訳、楽工社、2011年)ではプロスペクト理論のポイントが分かりやすく説明されている。
- 48 拙著『新宗教の解説』(筑摩書房、1996年、文庫版)を参照。
- 49 カルト問題については、櫻井義秀『「カルト」を問い直す—信教の自由というリスク』(中央公論新社、2006年)、同『霊と金—スピリチュアル・ビジネスの構造』(新潮社、2009年)などを参照。
- 50 これについては藤田庄市がオウム真理教に殺害された坂本堤の言葉として言及しているものが端的にその価値観を示している。それは「人を不幸にする信仰の自由はない」というものである。『情報時代のオウム真理教』(前掲)所収の藤田論文「オウム真理教事件の源流」を参照。

- 51 容易に推測されようが、「共同体に奉仕にすることになる」とか「社会のためになる」、というような結論も、同様に演算バイアスを形成しやすい。これも新宗教に限らず、宗教一般に観察される。バイアスというニュアンスはマイナスのイメージがあるが、これはそうなりやすいということを行っているのであって、それが悪いという評価に直結してはるわけではないことに注意しなければいけない。
- 52 ピンカー (Steven Pinker) については『心の仕組み (上)・(中)・(下)』(日本放送出版協会、2003年)などにおける議論を参照。ボイヤー (Pascal Boyer) 『神はなぜいるのか?』(NTT出版、2008年)では、「宗教の本能といったものはないし、心にそういった特殊な傾向もないし、宗教的概念のための特別な性質もない」(427頁)と述べられている。

圓佛教の海外布教現況 — 日本教区を中心に —

李 和珍

はじめに

圓佛教は少太山（ソテサン、朴重彬 1891～1943、大宗師と呼ばれる）によって1916年に全羅北道益山市で開教された。仏教系新宗教である圓佛教は現在、中央総部を中心に韓国内に14教区、500余カ所の教堂、200余カ所の関連機関がある¹。圓佛教は韓国では4大宗団として数えられており、その教徒数は文化体育観光部（宗務室）の統計結果（『2008年韓国の宗教現況』）によると148万余人である。しかしこれは教団公式発表教徒数と考えていい。2008年の圓佛教教団資料（『2008年教団現況』²）によると30万人程度である。

圓佛教では圓紀という年号を使っており、1916年を圓紀1年とする。開教100年になる2015年に向けて圓佛教では、「圓佛教100年記念聖業会³」を設立し、さまざまな事業を展開している。「圓100 5大指標」として①教化大仏供、②自身聖業奉賛、③世界主世教団、④大慈悲教団、⑤報恩大仏事があるが、その中で③世界主世教団は教団制度の革新、世界教化基盤構築を目指している。

本稿では、圓佛教100年記念聖業事業の一つでもある世界教化について焦点をあて、圓佛教の海外布教の歴史や現況について考察する。圓佛教の定期刊行物である『圓佛教新聞⁴』の記事と『国際教化総覧92⁵』を中心にその流れを探ってみる。特に日本教区の教堂の歴史と現状については面談調査を通して得た情報を加えてまとめる。

1. 圓佛教の海外布教の歴史と現況

圓佛教は日本の植民地時代である1916年に開教し「仏法研究会」という名で活動を始めたが、植民地時代ということもあって、教団の活動は容易ではなかった。少太山大宗師の死後、大宗師の法通を継いだ鼎山宗師によって1947年に「圓佛教」を正式教名とし、教勢を広めていく。現在の圓佛教教団の海外教化は、2011年にアメリカのニューヨークに海外総部として「圓達磨センター（Won Dharma Center）⁶」が開院するなど、アメリカを中心に日本、フランス、中国、ドイツ、ロシアなど20カ国に、5教区、50余カ所の教堂、20カ所の関連機関が設立されている。教化の教役者は100余名であるが、ニューヨークの圓光韓国学校、ハワイ国際訓練院、ロシアの韓国語学堂では、外国人や海外教徒に韓国の文化を知ってもらう機会を設けながら、圓佛教を広めるという方法をとっている。フィラデルフィアには米州禅学大学院大学が設立され、ここから国際的に活動する教役者を輩出している⁷。

圓佛教の国際的な布教活動⁸（圓佛教では「海外教化」ともいう）を概略すると日本→アメリカ→ヨーロッパ→中国の順に教化が進んでいる。初めて活動を展開したのは、1935年に日本の大阪と満州の牡丹江における教化である。日本は1年、満州は8年で撤退する事態になる。植民地時代から解放され、6.25朝鮮戦争が終わったあと、1959年に圓光大学の学長である崇山宗師（朴光田 1915～1986、少太山大宗師の長男）が欧米と東南アジアを巡

訪することで国際教化の端緒が開かれた。圓光大学校には1957年に「海外布教研究所」が設けられており、これにより教化の支援が始まった。

本格的な国際教化は、1972年にアメリカに教務⁹を派遣して翌年ニューヨークで宗教法人登録を取得した後に展開する。1981年に圓佛教中央総部の教政院¹⁰に世界教化支援のための国際部が設立され、世界教化のための政策樹立、教書・教材の翻訳作業及び広報物の制作、国外教堂及び機関の設立、国際交流及び宗教連合運動推進など幅広い教化活動が行われている¹¹。教書の英文翻訳は、1971年に作業が始まり、主な経典の『正典』『大宗経』はむろん、宗師法語、教史、礼典、聖歌、教憲・規定までも出版されている。現在、『正典』は25ヶ国語、『大宗経』は9ヶ国語に翻訳され、また圓佛教についての案内本なども各国語に翻訳されている。

1999年に改定された教憲によって、従来の人間関係に依存する教化方法から政策的に外国の文化と環境に適応させ土着化が可能になるような本格的な国際教化を目指した。また国際的な教化者の専門的な養成のために2001年11月にフィラデルフィアに米州禅学大学院大学校が、アメリカのペンシルベニアの州政府教育部から正式認可を取得して開校した。現在の教政院の国際部は、教化と教堂の経済的自立が難しい海外教堂に経済力と教化が同時に相乗効果をもたらすために海外教化支援体系構築という重点政策を通して教化方法を模索している。

ここでは5つある海外教区の中で4つの教区を中心にまとめたのち、日本教区については2節、3節において少し詳しく言及する。

<米州東部教区・米州西部教区>

『圓佛教新聞』によると、米州教区の教化は1972年から始まり、現在40年を迎えている。米州教区は地理的な理由によって、1983年6月から東部教区と西部教区に分けて教化をすることになった。米州教区の主要機関としては圓佛教総部 UN 事務所(Won Buddhism United Nations Office、1995年設立)、米州禅学大学院大学校(Won Institute of Graduate Studies、2001年開校)がある。現在は2011年に開院した「圓達磨センター」が海外総部として位置づけられている。

米州の東部教区¹²には14ヶ所の教堂と訓練院や圓光福祉館、思想研究所などがあり、教役者は45名が活動している。ニューヨークには米州総部や訓練院とニューヨーク圓光韓国学校がある。西部教区¹³は、10つの教堂とハワイ国際訓練院に20名の教役者が常住している。

アメリカ大陸での教化活動の対象はアメリカに住む韓国人や在米同胞が中心であるが、ボストン、マンハッタン、マイアミ、ノースカロライナ、フィラデルフィア教堂などでは現地人による禅法会及びヨガ法会が肯定的な評価を受けている。現地人教化は主に東部教区を中心に行われている。現地人は圓佛教の教理に対する関心よりは禅に対する関心からの参加が多いため、禅の指導にも体系的な指導案が必要な状況である。

また韓国の文化を伝えるプログラムも並行している。法会後には韓国料理を一緒に作って食べる事や、地域別に毎年民俗行事の場を開いて在米同胞2・3世に韓国の文化を知ってもらえることを目的とした活動もしている。

『国際教化総覧92』によれば、圓佛教の実質的な海外布教は米州教化から始まる。米州

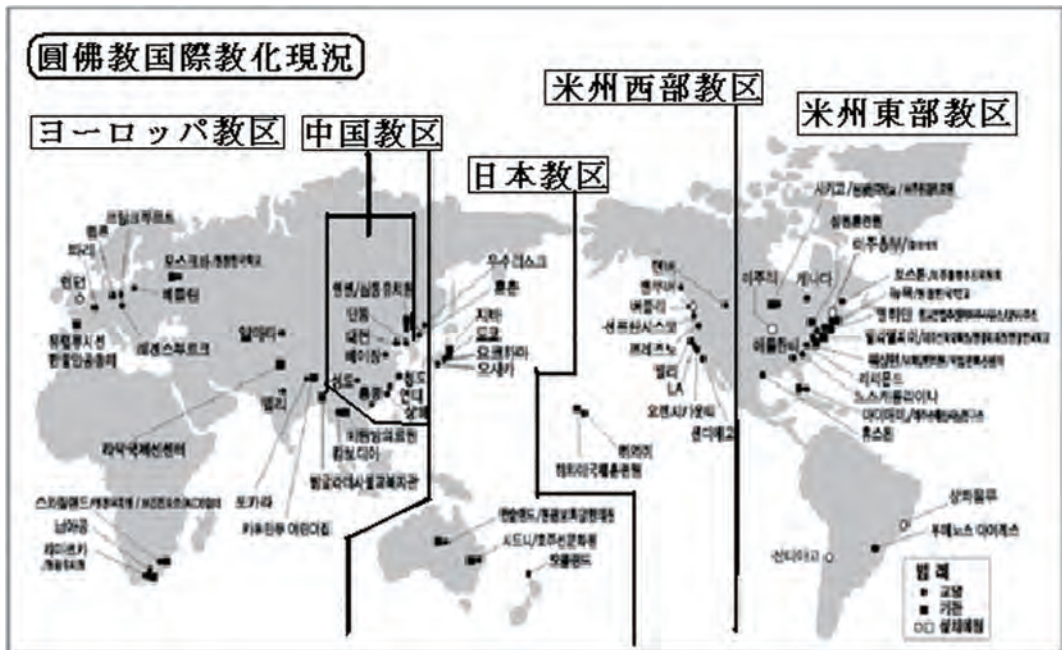
教化は3段階に分けられ、第1段階は、1956年の朴光田学長の欧米視察の前後に、円光大学の教授が世界各国の図書館、その他機関を通して個人団体の住所目録を作成し、書簡をやりとりし、文書を通しての交流から始まった。第2段階は、文書を通しての交流とともに、各種国際会議に教役者を参加させ、現地視察と長期滞在を通して圓佛教の理念を伝え、理解を深める作業を行ってきた。1960～80年代の初期の状況では活動上の制限も多く、短期間の滞在での教化は難しかったようである。第3段階は、教役者を現地に長期間滞在させることによって、同胞を対象に教化活動を行った。1973年にはLA教堂、1975年にニューヨーク教堂、シカゴ教堂、1977年にヒューストン教堂が宗教法人の認証を得た。

<ヨーロッパ教区>

ヨーロッパ教区¹⁴の始まりは、1989年3月にドイツのフランクフルトに教務を派遣し、同年ドイツ連邦政府より圓佛教社団法人の認可を得たことである。この教区はアフリカとインドまでを含んでおり、管轄する範囲が非常に広いため、教区の役割を果たすための地理的、環境的条件は容易ではなかった。14カ所の教堂があり、29名の教務が勤務している。ドイツとフランス、ロシアにある教堂では、同胞中心の教化から現地人中心の教化へと変化を模索中であるところもある。主に韓国語教育と韓国文化を紹介している。特にパリ教堂はヨーロッパ訓練院（ヨーロッパ無時禪ハンウルアン共同体¹⁵）を通してヨーロッパ人に教化を進めている。南アフリカ地域に所属されている教堂とカンボジア、ネパールでは、医療奉仕と保育園などの運営、住民の啓蒙を実践しながら教化活動をしている。特にネパールのポカラ教堂では、変化する時代の要請と市場性を考えて特殊実業専門学校の設定を通して教堂の法人確保と、教育インフラ構築を通して教化基盤の造成を目標にして準備している。モスクワ教堂とカンボジアのバタンバン教堂では現地人教徒による教典の翻訳も行われている。

<中国教区¹⁶>

中国への教化は、韓国が台湾との外交関係を断絶し、中国と外交関係を結ぶ1992年から始まる。中国の基本的な宗教政策は外来宗教と自国宗教を区分し、差別化している。1983年から本格的に適用された「三定政策」、すなわち指定された場所、指定された区域、指定された聖職者によって宗教活動ができるという規定によって家庭訪問教化などの自由な布教及び教化活動が制限されている。現在の中国教区には10カ所の教堂と12名の教務が駐在しているが、中国の教堂は日本教区に属していた。2001年9月、圓佛教首位団会で中国教区を新設することが決議された。中国が解放とともに東アジア中心文化圏として浮上している点などを考えて日本教区から中国教区として独立させたのである。中国の教化対象は、韓国人と留学生が中心である。圓佛教経典が中国語に翻訳されて各研究団体に普及しており、オンライン書店での販売も行われている。2011年2月には中国内で圓佛教が認可をもらうための準備作業を具体的に開始した¹⁷。



上記の図は『圓佛教新聞』1376号（2007年4月20日付）に掲載されている「圓佛教國際教化現況」である（<http://www.wonnews.co.kr/news/articleView.html?idxno=58608>）。

上記の図からは教堂・機関の名前や数が分かりづらいため、以下の表にまとめた。なお各国教堂の写真、住所、連絡先、位置などが分かる最新の地図は圓佛教のホームページに掲載されている（<http://www.wonbuddhism.org/temples?category=0>、2012年7月30日閲覧）。

表1 圓佛教教団の5つの教区

教区	布教開始	教堂	関連機関	設置予定地
米州東部教区	1972年。 1983年に	14	7（学校系・研究所・訓練院）	4（サンパウロ ・サンティアゴなど）
米州西部教区	東部西部分け	10	0	1（パークレー）
ヨーロッパ教区	1989年	14	7（学校・保健所など）	1（ロンドン）
日本教区	1935年	7	2（漢医院・禪文化院）	0
中国教区	1992年	10	1（幼稚園）	0

以上、簡略に各教区についての歴史と現況についてまとめたが、圓佛教教政院では2008年10月に、海外教区に「地区制度」を導入した。5つの教区の中、米州東部教区、ヨーロッパ教区、日本教区に地区を作った。地区制度を導入したのは、教区が管轄しづらい地域を地区としてまとめ、今までの距離・文化圏の差異による問題点を解消するためである¹⁸。

教区に地区を設けて、より良い教堂運営を目指したが、2012年4月の記事によると、現在5つの教区で区分されている海外教区を大陸別、国家別にして政策的に海外教化を推進していく方針であるという。5つの教区に南米教区、アフリカ教区、アジア教区、オセアニア

教区を加えて9つの教区に編成されることになる¹⁹。しかし、2012年9月時点では、圓佛教ホームページ上の概要のサイトに9つの教区になったことに関する情報更新はされていない。

表2 新設地区から昇格した教区

教区	新設地区 (⇒教区)	所属教堂・機関
米州東部	南米地区 ⇒南米教区	ブエノスアイレス教堂 (アルヘンティナ)、サンファウロ教堂 (ブラジル)、サンティア教堂 (チリ)
ヨーロッパ	アフリカ地区 ⇒アフリカ教区	南アフリカ教堂、ラマコカ教堂、スワジランド圓光幼稚園・保健診療所
	インド地区 ⇒アジア教区	ポカラ教堂、バットンバン教堂、デリー教堂、ラダク国際禅センター
日本	オセアニア地区 ⇒オセアニア教区	シドニー教堂、クインズランド教堂、オークランド教堂、濠州圓光漢医院、圓佛教濠州禅文化院

2. 日本布教の歴史

圓佛教の海外への布教は日本が最初であった。1930年代から日本への布教が始まったが、今日に至るまでの活動を準備期、始動期、展開期の3段階に分けて、それぞれの段階における動きを簡単にまとめる。

(1) 準備期

準備期は1930年代から1970年代までで、大阪が中心である。日本への布教は早い時期から始まっているが、植民地時代からの解放、韓国戦争を経て60年代後半から教化のための活動が始まる。

1931年当時、「仏法研究会」の第2代会長であった曹頌廣（法名：慶山）氏が大阪に引越すことから始まる。1935年には教務を派遣し、大阪教堂の活動が始まるが、植民地支配下での活動は難しく、弾圧により1年で撤収する。日本での布教活動が再開するのは1966年で、教化をしていくための状況を把握しようと、教務の派遣も行っている。1975年には教典の日本語版が刊行された。1977年2月には日本人のO氏が圓佛教の総部を訪問、入教する。その際、教堂の設立を約束し、日本教区事務長に任命される。同年6月には大阪市西淀川区千舟（看板「圓佛教日本教区」）に初めての教堂ができた（大阪教堂とも呼ばれる）。この時に圓佛教教化のために土地3万坪を購入する予定で、韓国人公園墓地、養老・療養施設、子どもの遊び場などを施設し、収益とともに教化の基盤を作ろうとする計画があったようだが、実現には至らなかった。O氏は教区事務長として日本教化に励み、日本教区の教徒5名とともに1978年5月には韓国の総部を訪問するなど活動をしている。また同年10月には圓佛教講座²⁰が開催され、日本現地人のために日本語で進行されるなど、圓佛教について分かってもらうことを目的とした活動を展開している²¹。1979年には岡山教堂を設立するなどして、活動を広げた。

(2) 始動期

始動期は1980年代から1990年代とする。この時期には日本での宗教法人の認証も得て、関西地域のみならず、関東にも教堂が設立され、日本人の教徒も増えつつあった。

関西地域の大阪から始まった教化活動は、1980年2月には宗教法人の認証（岡山県で宗教法人認証）を取った。同年、奈良教堂と岐阜教堂、1981年には福岡教堂、91年には京都教堂も設置されて活動をするが、教堂の維持ができず、閉鎖や撤収をすることになる²²。関西地域の教堂は結果的に大阪教堂のみが活動をしている状況である。

関東地域に関東教堂（現在、横浜教堂であるため、以下横浜教堂と明記）ができ、教化を着手したのは1987年である。同年2月に教区長、教務、日本教化推進委員長らが横浜市金沢に到着し、知り合い所有のマンションに無料で住むことになった。簡単な仏壇をつくって法身仏を祀り、同年3月には各界の来賓を含む36名が参加した奉仏式²³が行われ、横浜教堂が活動を開始した。日本教化は首都の東京を中心とする関東地区と、大阪を中心とする関西地区に分け、活動の活性化が目指された²⁴。

横浜教堂では1987年10月から「ハングル教室」が開設され、横浜市近辺の韓国人在日同胞と日本人を対象に教務が無料でハングルを教えるようになった。「ハングル教室」の新聞広告を見て18名が参加した。8ヵ月間、毎週土曜日あるいは木曜日の午後2時から4時までハングル勉強をし、キムチ作りなどを通して韓国文化も伝える活動も行った²⁵。横浜教堂は韓国の中央総部の支援と教徒の協力で1989年8月に現在の建物を購入し、12月に法堂増築工事が終わった。そして翌1990年4月に現地人20名をはじめ70名が参加して奉仏式が行われた。この時点では70名が入教しており、日曜法会では第1週目は韓国人法会、第2週目は東京出張法会、第3週目は日本人法会、第4週目は殉教法会を実施していた。横浜教堂は1993年に神奈川県宗教法人の認証を得て、現在に至っている。

千葉教堂は1991年から法人認証のための活動をし、93年に宗教法人の認証を得て設立された。95年1月に日本人2名と韓国人教徒、留学生など20名が参加して初めての法会を開いていたが、関東地域の教化活性化を図るという考えから、法会運営を変える必要があった。2ヶ所の教堂で毎週行われた法会を、第1、3日曜日は横浜教堂、第2日曜日は東京開拓地、第4日曜日は千葉教堂で法会を開催することになった²⁶。

1995年7月には東京の新宿に圓佛教東京会館が完成された。日本へ出張、研修、観光、留学などで来日する教徒のための宿泊施設である。この会館は1992年に入教した日本人H氏が、東京の土地35坪を提供、建築基金の銀行保証貸出などにより完成したものである。同氏は日本人としては初めて1995年2月に家に法身仏を奉安した。東京会館の経営権限は20年間とされている²⁷。新聞にはこのような記事があり、一時期運営されたと思われるが、現在はその存在を確認することはできない。

1996年には千葉の市川宣教所と東京の錦糸町教堂が設立され、活動を開始する。市川宣教所の活動は微々たるものであったが、錦糸町教堂はマンションの一室を借りて毎週法会を開くなど教化活動を行っていった。

(3) 展開期

展開期は2000年以降になる。2006年に東京教堂が設立され、日本教区庁となることによって、それまでと比べて比較的安定した教化活動ができる環境が整えられた。

日本教化が活性化したのは、関東教堂である。関東教堂は2001年に「横浜教堂」と改名し、2006年の東京教堂ができるまで日本教区庁としての役割を果たしていた。横浜教堂では2002年12月に40名が参加して名節大齋²⁸と会長団指令状授与式が行われ²⁹、法会に参加する教徒による教堂の運営ができるほど安定していた。

2004年4月に中央総部で行われた大覚開教節記念式で日本人のK理事長（宗教法人圓佛教岡山）が特別法号をもらっている。1995年に中央総部を訪問し、教政院長のヨンウォン（淵源³⁰）によって入教したK氏は、東京に4階建物を喜捨し、錦糸町教堂の教化活動費と生活費を負担していた。この建物をリモデリングして日本教区庁兼東京教堂として使用する予定となり、横浜から東京へと教堂の中心が変わることになった。2004年時点で4つの宗教法人（岡山、大阪、神奈川、千葉）があり、5つの教堂（大阪、横浜、千葉、市川、錦糸町）がある³¹。

2006年6月6日、日本教区兼東京教堂の法仏式が行われ、日本教区教徒と韓国内出家・在家教徒、来賓を含む100名が参加した。東京教堂が発足することで錦糸町教堂は統合という形となり、2006年の時点で日本教区は4つの宗教法人と4つの教堂（大阪、横浜、千葉、東京）とまとまった³²。

横浜教堂では、2012年1月に圓佛教儀礼による日本人の入廟式が行われた。横浜市民墓地に一圓相のシンボルと礼文が日本語で書かれている黒い幕をお墓の後ろ側に設置して挙行された。日本人の夫の入廟式は遺族のみが参加する家族葬で、進行は日本語で行われた。現在、涅槃人の薦度齋が行われる³³など、少しずつではあるが、日本での圓佛教の活動、教化が定着しつつあることがわかる。

なお圓佛教の韓国教徒からの支援によって、東日本大震災後、被災地救援のための活動を行っている。日本教区の教務とともに2011年6月3日に岩手県大船渡市の被害村で津波被害霊魂のための慰霊祭を行ったほか、圓佛教災害災難救護隊が2011年6月29日～7月1日まで第3次救護活動を岩手県宮古市で行った。宮古市水産高体育館で被害を受けた学生や住民のために慰問公演をし、救護物品を渡した。この公演では日本で有名なギタリストの寺内タケシと公演団が特別演奏をした。高校生2,000名、村の住民1,000名とともにしたこの公演に地域住民と学生たちは韓国から慰労と物品を渡すために宮古市と学校に訪問したことに感謝の意を伝えた³⁴。こうした救援活動は日本に教堂があり、日本での活動の拠点があることで、容易になったと考えられる。

3. 日本教区の現況

以上のように日本教化の過程、活動などから見てわかるように、現在日本教区には4つの教堂があるが、現在活動していると言えるのは3つの教堂である。筆者が圓佛教の日本教堂の面談調査を開始したのは2005年である。以下ではそれ以後現在に至るまで知り得た情報を中心に現況をまとめる。

最も多くの面談調査を行ったのは東京教堂である。現在まで数十回、法会や行事に参加した。東京教堂の前身である錦糸町教堂での法会にも2回ほど参加した。2005年4月24日が錦糸町教堂で行われる最後の法会であった。当時はマンションの一室に法身仏一圓相が祀っており、教務が常住していた。日曜日11時から始まった法会は、4月28日の大覚開教節³⁵に近い日曜日であった。

法会の式次第は次のとおりであった。

- ① 法身仏である一圓相と大宗師（写真が掛ってある）に向かって4回クンチョル（土座のような姿勢）をする。
- ② 背筋を伸ばしてアグラをかき、座禅を10分ほどくむ。
- ③ 「読経集」の中の「一圓相誓願文」を全員で読経。
- ④ 圓佛教全書の中の「四要」を全員で読む。
- ⑤ （今回の法会は「大覚開教節」であったため）宗法師の法文である「自力と他力」についての10個の項目を全員で読み、教務がその意味について説明する。
- ⑥ 最後に「読経集」の中の「日常修行一要法」を全員で読む。お辞儀をして終わる。

錦糸町教会での法会はこれが最後で、以後は「金町」に新たな建物に「韓国文化センター」を重ねた日本教区庁兼「圓佛教東京教会」が設立されることが、教務から伝えられた。法会が終わるとみんなで昼食を作って食べるが、筆者を含め参加者は8人であった。錦糸町教会の日本人初の教徒であるMさんを含め、韓国語を勉強する日本人2人、留学生が4人、社会人1人。参加者のほとんどが留学生であるため、布施はほとんど無い状況であったが、新しい教会へ移転してからは教会の経済力をつけるための事業などを考えていかなければいけないことを教務が語った。例えば韓国料理を売るなどの案も示された。

日本教区庁である東京教会³⁶には、2005年末に教会が完成して正式に法仏式が行われる前までの期間の法会に数度参加し、2006年6月の法仏式にも参加した。新しい教会は延建坪184坪、4階建物で、1階は「韓国文化センター」、2階は法堂、3～4階は生活館として利用している。

錦糸町教会から東京教会へ移転するまで務めていた教務が韓国へ移動になり、新しい教務が2006年から常住することとなり、日本教区長も新たに任命された。現在まで数人の教務が東京教会で務めているが、2人の教務が常住する時期もあった。東京教会は経済的に自立した運営には至っておらず、教務の交代も多く、教徒の数もあまり安定していない。2012年に就任した現在の教務は日本教区長を兼ねている。活動の中心的なものは、第2、4日曜日の11時から始まる法会である。東京教会の法会の参加者は、錦糸町教会の時と同様に留学生が主で、通常5、6名が参加する。留学生の数が法会の参加者数に深く関係していて、それが東京教会の特徴とも言える。1階の「韓国文化センター」では週2回くらい韓国語講座が開かれており、日本人が圓佛教を接する機会はあるものの、圓佛教に入教するまでには至らないようである。3、4階の生活館には留学生などに部屋を貸している。

横浜教会³⁷は、東京教会が設立される前までは関東地域教会の中心とも言える教会であった。横浜教会には2005年末に錦糸町教会の法会参加者とともに訪問した。当時は、参加人数が錦糸町教会より2倍ほど多く、教徒の年齢層も高かった。在日同胞2世の人や日本人と結婚して帰化した韓国人、その家族が中心であった。法会の順などは錦糸町教会と同様な傾向であったが、韓国語教室やヨガ教室、座禅などの訓練プログラムも行っているということから、当時までは横浜教会が関東地域の中心的教会で活発な活動をしていたと言える。

2012年6月に東京教会の法会に参加した際に、横浜教会に訪問した時に出会ったことのある教徒が法会に参加していたため、横浜教会の現況について面談調査を行った。現在横浜教会には法会参加人数が日本人1人を含む2、3名ほどであると。法会参加者の減少の主たる理由として、次のような点を挙げた。

- ① 東京教堂が設立されてからは横浜まで足を運ばない人が多くなった。
- ② 留学生や駐在していた韓国人が韓国に帰ってしまった。
- ③ 円高によって留学生があまり来なくなった。

これらの理由など、教徒の動きによって教堂の運営は大きく左右される。

大阪教堂³⁸には2012年2月に訪問した。住宅地の中に位置し、1階の入り口には金色の丸い一圓相のシンボルが目立つ3階建ての建物である。それほど広いスペースではないが、1階が法堂で、2、3階が生活館になっている。2階は主に教務の住居スペースで部屋が一室と台所と風呂という間取りで、3階が留学生の住まいである³⁹。法会には参加できなかったが、教務への面談調査を行った。

大阪教堂は1989年に設立された。3階建ての建物はそう広くはないが、教団からの支援によって購入されたものである。1990年4月に奉仏式が行われ、1997年12月に宗教法人登記が認証された。1999年から現在の教務が大阪教堂に常住することになり、現在に至っている。教務は一人で教堂を管理・運営している。教徒数は18名（男8、女10）で、年齢はほとんどが50代である。法会の進行を担当するほど熱心に参加する教徒もいるが、その教徒一家は韓国に帰国することになり、教徒数は減る予定であるという。法会は毎週日曜日11時からで、毎回の法会に参加する人数は10名以内。東京教堂は2週間に一回の頻度で法会を行っているが、大阪教堂は毎週法会を行っていることから、東京教堂に比べて熱心な教化活動をしていると言える。

大阪教堂の社会活動、布教活動においても、関東地域の教堂と比べると特徴が見られる。毎週の法会を通しての教理勉強はむろん、活動の期間が長い分、これまでさまざまな試行錯誤を経て定着した活動がある。主に4つ紹介する。①年1回に「圓コリアフェスティバル」を開き、周辺の朝鮮学校および日本の小学校などで韓国の民俗遊びを指導している。②文化教室を開いて日本人に韓国語を、留学生に日本語を教え、お正月やお盆などの名節にはソンプジョン（お餅）作りなどを通じて韓国文化を紹介する。③漢方無料診療は、2001年から2010年まで10年間行われた活動である。圓光大学校漢医科大学院の海外医療奉仕隊の協力により毎年夏に3日間コリアタウンで実施された。大阪教堂は狭いので、近くのお寺やコリアンタウン会館などを借りて在日同胞や日本人を対象に無料診療を行ってきた。10年間にわたるこの活動が終了したことを惜しむ声が多いという。④大阪教堂の教徒を中心に韓国へのテーマ旅行なども企画し、圓佛教中央総部、聖地巡礼なども年1回ほど行っている。

現在の教務が大阪教堂に就任した後、行ってきたさまざまな活動が写真集に納められていて、今までの活動の規模や雰囲気が確認できる。このような社会・教化活動が可能であった理由は、在日同胞が密集して住んでいる生野区のコリアンタウンであるという立地条件と、漢方無料診療などは圓佛教教団側の支援が大きいと考えられる。また、現教務の地道な努力も理由としてあげられる。現教務が大阪教堂に就任して間もない頃に、法会にあまり参加できない韓国人留学生の教徒や、圓佛教に入教はしていないが、かつて法会に参加した事のある人には「圓佛教新聞」や毎週手作りする教堂会報などを郵送して、圓佛教の情報を知らせたという。これによってその人達とのつながりが保たれ、場合によっては入教するまでに導くケースもあったという。

まとめ

圓佛教の海外布教は多くの国、地域で広まっているが、教堂が経済的に自力で運営できているのはアメリカ地域のみで、ほかの地域はまだ韓国教団側からの支援を必要としている状況である。日本教区は始動期の1980年代から数えると30年以上が経過しているが、あまり活発な教化活動を行っているとは言い難い。数年にわたり調査してきた3カ所の教堂の場合も、まだ自力での教堂運営は難しい状況である。関西に多数の教堂が設立されたが、現在残っているのは大阪教堂のみで、関東には日本教区庁兼東京教堂が設立されて活発な教化活動が期待されたが、安定した教勢力を持つことまでには至っていない。一定の時期、関東地域で安定した教堂運営を見せていた横浜教堂も新しい教徒を増やすことができず、千葉教堂も現在は教堂としての機能が欠けていると言える。歴代の教務などによってそれぞれ多様な試みがなされてきたと思われるが、全体として信者数はあまり増えていない。

圓佛教は韓国の宗教団体の中でもそれほど大きな教団というわけではない。したがって、海外布教地の一つである日本において、活動が大規模なものにならないのは、当然という考え方もあるかもしれない。日本にいる教徒自体もきわめて少数である。しかし、アメリカやヨーロッパにおいてはある程度教勢が増加しているという例があることを考えると、なぜ日本では教勢がそれほど伸びないのかについて、若干の宗教社会学的な考察を加えてみることも必要になるだろう。

第一に考えられるのは、日本はアメリカやヨーロッパと異なり、仏教的な宗教団体の活動は珍しいものではないということである。欧米では、圓佛教の教理に対する関心よりも禅に対する関心からの参加が多いことを述べたが、日本では韓国から紹介されるまでもなく禅宗は日本仏教の柱の一つになっている。少なくとも圓佛教の禅の実践に関わる部分は、日本ではその意義が見出されにくいかもしれない。さらに禅系の新宗教教団は日本では形成されていない。この点では圓佛教の禅的な要素に対する関心は、日本では高まりにくいと考えられる。

第二に、新宗教としての圓佛教という側面を考えた場合、日本には数多くの仏教系新宗教があり、仏教と関係したさまざまな活動や教えが展開されている。したがって、圓佛教が日本人の信者を得ようとしたときに、それらに関して特徴的な意義を示すのがなかなか困難になる。欧米にも新宗教はあるが、ほとんどはキリスト教系新宗教である。そこでは圓佛教は仏教系新宗教としての特徴を欧米の人に示しうる。しかし日本の新宗教には多くの仏教系教団がある。そして多くの場合が先祖供養と深く結びついて展開している。とくに霊友会系の教団はそうである。この点については妙智會教団についても同時に研究しているが⁴⁰、現代においても、やはり先祖祭祀は日本の新宗教においては重要な意義をもつことを確認できる。圓佛教にも先祖供養の要素はあるが、霊友会系の教団は、それを日本的に広く浸透させているので、あらたに圓佛教の先祖供養を説いていくのは、これもかなり困難と考えられる。

第一と第二の点は、数多くの仏教宗派があり、また仏教系新宗教がある日本においては、欧米と比べたとき、圓佛教の特徴的な要素が独自性を示しにくいということを指摘することになる。

第三に韓国の新宗教の海外布教の歴史がまだ短いことも付け加えておきたい。新宗教は日本では近代以来数多く形成され、社会的にも大きな影響力をもつようになった。そして戦前から海外布教を行っている。韓国では戦後キリスト教の影響が大きくなり、新宗教の社会的

な影響力は全体として日本よりもかなり小さい。海外布教も、比較的最近本格化したと言える。韓国の新宗教の国外での活動は日本の新宗教よりも歴史が浅いので、圓佛教の場合も、欧米での布教と日本での布教の違いの比較などはこれからの課題である。

圓佛教の日本における活動の特徴を分析し、またさほど信者が増えていない理由を検討する上では、本稿で紹介した具体的な活動の分析を重ねていくとともに、他方では最後に列挙したような、マクロな社会学的な見方も加えて検討していく必要がある。

注

- 1) 圓佛教ホームページ「圓佛教紹介」の「世界の中の圓佛教」(http://www.won.or.kr/mbs/won/subview.jsp?id=won_010700000000)。
- 2) 李和珍「圓佛教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から—」『国学院大学開発推進機構日本文化研究所年報』第4号、2011年、p.73～86。このファイルは現在の圓佛教 Web サイトが更新されたため見ることができない。
- 3) <http://www.won100.org/>
- 4) 『圓佛教新聞』は1966(圓紀51)年創刊の『圓佛教青年会報』が前身である。1968年に『圓佛教新聞』創刊を決意し、1969年6月1日付に文公部の認可を得て発行された。現在は週刊で2008年6月からはホームページで全面閲覧可能となった。<http://www.wonnews.co.kr/>のホームページへのアクセスにはウェブ会員登録が必要である。
- 5) 2009年に海外教化68年間を2冊にまとめたもので、第1巻は海外教化活動および教堂・機関の沿革を1部、2部に分けている。1部は海外教化政策および歴史—国際部門別沿革および活動現況、2部は海外教堂および活動現況。第2巻は海外教化および政策に関する内容で、海外教化に関する研究・発表資料などが集録されている。
- 6) Won Dharma Center (www.wondharmacenter.org)は2011年10月2日開院し、51万m²の宗教敷地の認可を得て2970m²規模の親環境建築物5棟(信仰・修行共同体、宗教共同体、人材養成、宗教連合運動建設、ホールとゲストハウス)が配置されている。グローバル時代に合う体制と制度の革新、欧米社会に合う新しい教化方式と宗教生活などを運営することで、圓佛教の世界化のための基地としての国外総部として活用する(コ・シヨン「圓佛教教化の様相と方式」『宗教教育研究』2011年、p.153～173)。
- 7) 圓佛教ホームページ「圓佛教紹介」の「世界の中の圓佛教」(http://www.won.or.kr/mbs/won/subview.jsp?id=won_010700000000)。
- 8) 圓佛教の国際教化現況に関する概要においては、『圓佛教新聞』1221号(2003年12月5日付)と1376号(2007年4月20日付)を主に参考にしている。
- 9) 圓佛教の出家教役者の一般的名称。教化の使命を持って教堂や機関などに派遣され、奉職する出家教役者。圓佛教用語辞典(<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>)。
- 10) 教団行政の中央執行機関。教団の初期頃は、庶政院があり二つの執行機関であったが、1948年に圓佛教教憲制定の際に中央執行機関として「教政院」、中央監察機関「觀察院」の両院体制になった。圓佛教用語辞典(<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>)。
- 11) バク・ヘフン「世界化時代の圓佛教世界教化方向—圓佛教100年記念聖業を中心に—」『新宗教研究』第25輯、2011年、p.61～83。
- 12) 『国際教化総覧92』第1巻によると東部教区は、ニューヨーク教堂(圓光韓国学校、心元訓練院)、シカゴ教堂、フィラデルフィア教堂、ワシントン教堂(圓光韓国学校、文化禅センター、ボファタン漢医院)、マンハタン教堂、カナダ教堂、マイアミ教堂、アトランタ教堂、ヒューストン教堂、ブエノスアイレス教堂、リッチモンド教堂、ノースカロライナ教堂、サンティアゴ教堂、心元訓練院、圓光福祉館(ニューヨーク)、圓光福祉(フィラデルフィア)、米州少天山思想研究所がある。

- 13) 『国際教化総覧 92』第1巻によると西部教区には、ロサンゼルス教堂、ハワイ教堂サンフランシスコ教堂、バレー教堂、オレンジカウティカウティ教堂、サンディエゴ教堂、フレズノ教堂、コロラド教堂、パークリー教堂、バンクーバー教堂、ハワイ国際訓練院がある。
- 14) 『国際教化総覧 92』第1巻によるとヨーロッパ教区には、フランクフルト教堂、ベルリン教堂、レーゲンスブルク教堂、モスクワ教堂（圓光韓国学校）、パリ教堂、アルマタアルマティ教堂、南アフリカ教堂（アフリカ子どもを支援する集い）、スワジランド教堂（圓光幼稚園、保健診療所、アフリカ子どもを支援する集い）、ラマコカ教堂（圓光幼稚園）、ウスリースク教堂、ボカラ教堂（カトマンズ子供の家）、バタンバン教堂、デリー教堂、ケレン教堂、ヨーロッパ無時禪ハンウルアン共同体、ラダク国際禪センター、圓佛教-NOW コミュニティーセンターがある。
- 15) 「ハンウルアン共同体」とは、ヨーロッパ人全体に圓佛教の教法を伝えるために開設されたもので、命名の際に4代の左山宗法師がいつでもどこでも誰でも禪を実践するという意味の「無時禪」を必ず入れるようにと話したことから「ヨーロッパ無時禪ハンウルアン共同体」と名付けられた（『国際教化総覧 92』第1巻）。圓佛教には「ハンウルアン運動」というのがあり、これは圓佛教女性会創立5周年を記念して提唱された。「ハンウルアン」とはみんなが一つの輪の中に住む家族という意味で、宗教が異なってもお互いの宗教を認め、共同禪を實踐する信仰生活をし、平和と平等、和解と相生の世界を目指す。主要事業の一つである人類共同禪實踐のための宗教連合運動で「ヨーロッパ無時禪ハンウルアン共同体」の設立に支援した（<http://hanuran.or.kr/introduce/work.html> 社団法人ハンウルアン運動）。
- 16) 『国際教化総覧 92』第1巻によると、北京教堂、上海教堂、延辺教堂、琿春教堂、丹東教堂、青島教堂、香港教堂、成都教堂、烟台教堂、延辺三同幼稚園がある。
- 17) 『圓佛教新聞』1601号（2012年2月3日付）。『圓佛教新聞』1559号（2011年3月11日付）。
- 18) 『圓佛教新聞』1447号（2008年10月24日付）。
- 19) 『圓佛教新聞』1610号（2012年4月13日付）。
- 20) その講座では圓佛教の特徴を次のように紹介している。①信仰の対象を一圓相として概念化することで象徴哲学を提起した、②恩を存在論的に把握してその生命力を宇宙の機運としてみることで四恩を信仰の本質として表した、③宗教を通してすべての教えが人間化作業に戻ってくるために訓練法を提起した、④福祉社会に向けての實踐が教団の使命であることを強調した。また、「現実に満足しよう」というテーマで、圓佛教は宗派ではなく仏教の宗派が分かれる前の宗教であり、實踐の宗教であるため圓佛教を信仰することで明るい生活ができ、現実に満足できると説いている。
- 21) 『圓佛教新聞』199号（1977年11月25日付）、211号（1978年5月25日付）、220号（1978年10月25日付）。
- 22) 『圓佛教新聞』256号（1980年5月25日付）、258号（1980年6月25日付）、595号（1990年4月20日付）、654号（1991年7月26日付）。
- 23) 法身仏一圓相を奉安すること。
圓佛教用語辞典（<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>）。
- 24) 『圓佛教新聞』483号（1987年4月6日付）、515号（1988年3月26日付）。
- 25) 『圓佛教新聞』532号（1988年9月16日付）。
- 26) 『圓佛教新聞』818号（1995年2月10日付）。
- 27) 『圓佛教新聞』869号（1996年3月15日付）。
- 28) 「名節大齋」は12月1日に行われるもの。大齋は一年に2回行われ、少太山大宗師をはじめ圓佛教の全ての先祖と聖賢及び一切生靈を追慕して合同饗礼をあげること。
圓佛教用語辞典（<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>）。
- 29) 『圓佛教新聞』1177号（2002年12月27日付）。
- 30) 圓佛教に初めて入教する際に、導いてくれた人を「ヨンウォン（淵源）」という。入教の根源になる人を入教淵源、出家修行の道へ導いてくれた人を出家淵源、成仏の道へ導いてくれた人を成仏淵源という。

圓佛教用語辞典 (<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>)。

- 31) 『圓佛教新聞』1241号 (2004年5月7日付)。
- 32) 『圓佛教新聞』1337号 (2006年6月16日付)。
- 33) 『圓佛教新聞』1600号 (2012年1月20日付)
- 34) 『圓佛教新聞』1575号 (2011年7月8日付)。
- 35) 少太山大宗師が一圓の真理を悟り、圓佛教を創立した日で毎年4月28日に慶祝する。
圓佛教用語辞典 (<http://www.won.or.kr/mbs/won/jsp/dictionary/dictionary.jsp>)。
- 36) 〒125-0042 東京都葛飾区金町5-1-15
圓マウル (<http://www2.won.or.kr/wonmaeul/club/0001111/index.html>)。
- 37) 〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町25-15
- 38) 〒544-0002 大阪府大阪市生野区小路3-9-13
- 39) ただ外階段を通して2、3階に上がれないといけない構造で、法堂と生活スペースとの分離という面ではいいが、法会が終了した後の食事の準備などには不便な造りの建物であった。
- 40) 拙稿「グローバル化時代の到来と新宗教の展開—妙智會教団の事例—」駒沢宗教学研究会『宗教学論集』第27輯、2008年、「新宗教の先祖祭祀の日韓比較—妙智會教団と圓佛教の事例を中心に—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号、2010年を参照。

スタッフ紹介

* 氏名、現職、専門分野、担当研究事業、および 2011 年度の研究業績について紹介しています。今年度新任のスタッフには、研究紹介および 2011 年度以前の研究業績についても掲載しています。

井上 順孝 所長・教授 宗教学・宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[単行本]

- ・『本当にわかる宗教学』日本実業出版社、2011 年 4 月。
- ・『図解雑学宗教 最新版』ナツメ社、2011 年 5 月。
- ・『神道一日本人の原点を知る』マガジンハウス、2011 年 9 月。
- ・『情報時代のオウム真理教』（編集責任、宗教情報リサーチセンター編）春秋社、2011 年 7 月。

[論文]

- ・「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』369（85-2）、2011 年 9 月。
- ・「宗教文化士制度発足への歩み」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報第 4 号』2011（平成 23 年）9 月 30 日、37～43 頁。
- ・「グローバル化時代の近代新宗教とポスト近代新宗教」中牧弘允・ウエンディ・スミス編『グローバル化するアジア系宗教』東方出版、2012 年 1 月。
- ・「教育における宗教情報リテラシー—「宗教文化士」制度発足の背景」『宗務時報』113、文化庁宗務課、2012 年 3 月。
- ・「映画・ビデオ・DVD」『宗教と現代がわかる本 2012』、平凡社、2012 年 3 月。
- ・“Media and New Religious Movements in Japan, *Journal of Religion in Japan* 1, Brill、2012 年。

[その他]

- ・（講演）ドイツ・ライプチヒ大学における講演「Media and New Religious Movements in Japan」、2011 年 7 月。
- ・（学会発表）・日本宗教学会第 70 回学術大会（9 月、関西学院大学）での発表「自然災異の神道的表象の認知宗教学的アプローチの試み」

斉藤 こずゑ 教授 教育心理学、発達心理学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・「第 18 章 発達研究における倫理」日本発達心理学会 [編] 岩立志津夫・西野泰広 [責任編集]『発達科学ハンドブックシリーズ 2 研究法と尺度』新曜社、2011 年 11 月

[解説]

- ・「心理学領域の資格をめぐる問題」國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所『日本文化研究所年報』第 4 号、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行、2011 年 9 月

[学会発表]

- ・「育児ブログにおける映像とプロガーの発達観」日本心理学会第 75 回大会発表論文、2011 年 9 月
- ・「発達ナラティブにおける表象媒体と場の変容の効果」日本発達心理学会第 23 回大会、2012 年 3 月

遠藤潤 准教授 宗教学・日本宗教史

担当研究事業 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

【論文】

- ・「平田国学における〈靈的なもの〉—靈魂とコスモロジーの近代—」鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史』下、リトン、2012年1月

【口頭発表】

- ・「近世靈山における神仏関係と組織」シンポジウム「神仏関係史再考—カミを祀る担い手をめぐって—」（神道宗教学会第65回学術大会、國學院大學）2011年12月

黒崎浩行 准教授 情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【論文】

- ・「都市生活における共存と神社の関わり—東京「大塚まちの灯り」の試み」國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学：文化・社会の多様性』弘文堂、2012年、89-105。

【口頭発表】

- ・「被災地支援・復興と神社の公共的次元」、パネル「東日本大震災と神道—被災地支援と復興を探る」神道宗教学会第65回学術大会、國學院大學、2011年12月4日。

【その他】

- ・（書評）板井正斉著『ささえあいの神道文化』『宗教研究』370（2011）：117-122。

平藤喜久子 准教授 神話学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【論文】

- ・「宗教文化の授業研究会の試み」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第4号 2011年9月。

【口頭発表】

- ・「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み」國學院大學学術メディアセンター、2011年10月16日。
- ・「神話学の研究史における岡正雄の位置の再検討」国際シンポジウム「岡正雄—日本民族学の草分け」法政大学国際日本学研究所、2012年3月11日。

【その他】

- ・（監修）上大岡トメ+ふくもの隊（著）『「開運！神社さんぽ」古事記でめぐるとご利益満点の旅』泰文堂、2011年12月。
- ・（監修）「記紀神話の舞台を歩く」『一個人 古事記入門』2012年4月号、2012年2月発行。
- ・（講演）「日本の神話と昔話」大倉精神文化研究所・横浜市大倉山記念館共催、大倉山講演会、横浜市大倉山記念館、2011年7月16日。

ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman) 准教授 日本宗教史、日本の民間信仰
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

松本久史 准教授 近世・近代の国学・神道史

担当研究事業 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

[著書]

- ・ (分担執筆 第3章、第7章) 阪本是丸・石井研士編『プレステップ神道学』(弘文堂)、2011年4月

星野靖二 助教 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[単行本]

- ・ 『近代日本の宗教概念——宗教者の言葉と近代』(有志舎、2012年2月)

[論文]

- ・ 『『来世之有無』について——新仏教徒同志会における宗教観と来世』(鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史・下巻』リトン、2012年1月)

[学会発表・講演・シンポジウムなど]

- ・ ”’Rational Religion’ and the Shin Bukkyo [New Buddhism] Movement in Late Meiji Japan” in the panel ”Buddhist Constructions of ’Rational Religion’ across East Asia ” organized by Michel Mohr, at the XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, held at Dharma Drum Buddhist College in Jinshan, Republic of China, 2011年6月24日

塚田穂高 助教 宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・ (共著) 「現代日本「宗教」情報の氾濫—新宗教・パワースポット・葬儀・仏像に関する情報ブームに注目して— (国内の宗教動向)」(財団法人国際宗教研究所編『現代宗教2011』、秋山書店)、2011年5月
- ・ 「オウム真理教が社会に向けて刊行した書籍」(宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』、春秋社)、2011年7月
- ・ 「事件前の「オウム論」書籍と学術研究—ジャーナリズムから宗教研究まで—」(宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』、春秋社)、2011年7月
- ・ 「真理党の運動展開と活動内容」(宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』、春秋社)、2011年7月

[その他]

- ・ (共著) “Religious Issues in Japan 2010: A Deluge of “Religious” Information on New Religions, Power Spots, Funeral Services, and Buddhist Statues”, (translation by Kinoshita Tomoko) in *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion & Culture* Nr.35 (2011), 2011年6月
- ・ 「書評 櫻井義秀・中西尋子著『統一教会—日本宣教の戦略と韓日祝福—』」(『宗教と社会』17、「宗教と社会」学会)、2011年6月
- ・ 「報告1. 日本の宗教社会学、宗社研／オウム事件以降—「宗教と社会」学会と会員は何をしてきたか— (テーマセッション報告「現代社会における宗教社会学の可能性—「世俗化論」以後の課題と応答—)」

(『宗教と社会』17、「宗教と社会」学会、2011年6月)

- ・(共著)「コメントへのリプライ・質疑応答とセッションのまとめ(テーマセッション報告「現代社会における宗教社会学の可能性—「世俗化論」以後の課題と応答—)」(『宗教と社会』17、「宗教と社会」学会、2011年6月)

市川 収 客員研究員 惑星物質科学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

カール・フレーレ (FREIRE, Carl) 客員研究員 近代の日本史(特に社会史・思想史)

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

市田 雅崇 PD研究員 民俗宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・「新田義貞をめぐる歴史叙述と顕彰運動—新田神社の別格官幣社昇格運動を中心として—」、由谷裕哉編『郷土再考—新たな郷土研究を目指して』、角川学芸出版、2012.2
- ・「地域の文化資源と信仰の道—峨山道を事例として—」、『山岳修験』vol.49、日本山岳修験学会、2012年3月

李和珍 PD研究員 宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・「圓佛教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から—」(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報)4、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所)、2011年9月

ヤニス・ガイタニディス (GAITANIDIS, Ioannis) PD研究員 医療人類学・宗教社会学・日本学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・「At the forefront of a 'spiritual business': independent professional spiritual therapists in Japan」、『Japan Forum』(23/2)、pp.185-206、2011年8月。

[口頭発表]

- ・「The changing meaning and role of 'community' in Japanese spiritual therapy circles」、Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop(金沢大学)、2011年4月23日。
- ・「スピリチュアル・ビジネスの定量分析」、『宗教と社会』学会第19回学術大会(北海道大学)、2011年6月11日。
- ・「Researching the supirichuaru in Japan」、マーク・マリンス教授の研究会(上智大学)、2012年12月1日。

加藤久子 PD 研究員 政治と宗教

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【研究紹介】

研究対象は、20 世紀後半から現在にいたる政治変動・社会変動（民主化や近代化）と宗教の関係。政治学と社会学の関連領域を横断する学際的アプローチを取り、特に、社会主義体制下で自律的な活動を展開したポーランドのカトリック教会と民主化の関係について研究している。研究の特徴は、国家と教会の間での激しい対立ではなく、妥協や合意形成のプロセスに注目する点。

また、戦後復興期の宗教・文化状況や、第二次世界大戦にまつわる戦争遺産の保存・観光資源化にも関心を持っている。

【2010 年度までの主な研究業績】

- ・「レーニン製鉄所と十字架—社会主義ポーランドにおける政治と宗教—」『ロシア・東欧研究』第 36 号、2008 年、61-71 頁
- ・「ポーランドにおける社会主義政権の『終焉のはじまり』—カトリック教会をめぐる政治性の問題—」国際宗教研究所編『現代宗教 2005』東京堂出版、2005 年、107-129 頁
- ・「社会主義政権下ポーランドにおけるカトリック教会—「三月事件」（1968 年）に対する教会の見解に着目して—」『宗教と社会』第 10 号、2004 年、71-92 頁

小林威朗 PD 研究員 近世・近代の国学・神道史

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

【口頭発表】

- ・「久保季茲の思想—明治期を中心に—」（神道宗教学会第 65 回学術大会、國學院大學）、2011 年 12 月

今井信治 研究補助員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【論文】

- ・「教材開発の現状報告」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第 4 号、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所）、2011 年 9 月

小田真裕 研究補助員 日本近世史

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

【論文】

- ・「幕末筑前における平田国学」（『七隈史学』14）、2012 年 3 月

【口頭発表】

- ・「加賀藩国学者石黒千尋の対外認識—「来舶神旨」を中心に—」（近世史研究会 10 月例会、名古屋大学）、2011 年 10 月
- ・「近世後期における関東農村の虚無僧取締り—武州八條領を中心に—」（千葉歴史学会近世史部会 3 月例会、千葉大学）、2012 年 3 月

武田幸也 研究補助員 近代神道史・近代神道教化と国学

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

【研究紹介】

近代の神道史・国学を専攻している。特に近代神道における「教化」とは何か、という点に関心を持っている。具体的には、近代神道史の展開を踏まえながら、神宮の教化活動の一環として設立された神宮教院、その後継団体である神宮教・神宮奉斎会の活動を、通史的に検討し、そこに関わった国学者・神道人の思想や教化観を研究している。人物としては、浦田長民や田中頼庸、藤岡好古、篠田時化雄といった人々である。彼らは近世・近代の国学と深い関わりを有する人々であり、国学の営みが、神道による教化活動という課題を有していた人々にどのように受容されていたのか、という問題を検討している。

【論文】

- ・「神宮教の組織と活動に関する基礎的研究」（『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第4号、國學院大學）、2012年3月

【口頭発表】

- ・「浦田長民の神道教説」（神道宗教学会第65回学術大会、國學院大學）、2011年12月

【2010年度までの主な業績】

- ・「明治初期神宮教院における教化と教説—教説書の検討を中心に—」（『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第3号、國學院大學）、2011年3月
- ・「田中頼庸の教化思想とその神道論」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第3号）、2010年3月
- ・「明治初年神宮教院出版の教説書について」（神道宗教学会第64回学術大会、國學院大學）、2010年12月

天田顕徳 宗教社会学、民俗宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【研究紹介】

現代の日本における伝統宗教のありようについて、宗教社会学的な観点より考察をおこなっている。現在はとりわけ「霊場の観光地化」に関心を抱いており、かつてその霊験が「日本第一」と称され、現在は世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部としても知られる和歌山県・熊野三山の近年の動向に注目している。フィールドに還元できる宗教学を目指し、観光学や民俗学をその視野に収めつつ、伝統的な社寺や祭りが関わっておこなわれる地域興しや、文化遺産のマネジメントなどに関して事例調査をおこなっている。

【論文】

- ・「本来の祭の行方—和歌山県新宮市「お燈祭」に関わる言説の競合をめぐって—」（由谷裕哉編『郷土再考』角川学芸出版、2012年）。

【口頭発表】

- ・「熊野」に投影されるもの—世界遺産・熊野古道「中辺路ルート完全踏破」モニターツアーを事例として—「宗教と社会」学会
- ・「現代の聖地にみる「癒やし」と「蘇り」—熊野セラピーを事例に—」日本宗教学会
- ・「彼岸としての熊野、此岸としての熊野—世界遺産登録と熊野にむけられるまなざしの変化—」国際熊野学会

【学会レジュメ】

- ・「現代の聖地にみる「癒やし」と「蘇り」—熊野セラピーを事例に—」（『宗教研究』85（4）、2012年）。
- ・天田顕徳「現代日本の霊場における聖性の位相」（駒澤宗教学研究会『宗教学論集』、2012年）。

一戸 渉 共同研究員 日本近世文学

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

【単行本】

- ・『上田秋成の時代—上方和学研究—』（べりかん社）2012年1月

【論文】

- ・「『自像笥記』異文—秋成と自伝—」（『上方文藝研究』第8号）、2011年6月
- ・「羽倉風のゆくえ」（『朱』第55号）、2011年12月

【口頭発表】

- ・「周縁から眺める—上田秋成の門人研究—」（2011年度金沢大学国語国文学会）、2011年10月

【その他】

- ・「板本を写すということ—『林の秋ぬきがき』『かきねの小草抜書』瞥見—」（『お舟津さん』第14号）
2011年12月

マシュー・チョジック (CHOZICK, Matthew) 共同研究員 カルチュラルスタディーズ・比較文化

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

イグナシオ・キロス (QUIROS, Enrique Ignacio Luis) 共同研究員 上代の国学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

小堀馨子 共同研究員 古代ローマ宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

齋藤知明 共同研究員 宗教学、宗教教育史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

エリック・シッケタンツ (SCHICKETANTZ, Erik) 共同研究員 宗教史学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

高橋典史 共同研究員 宗教社会学、日系宗教の海外布教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

ジャン＝ミシェル・ビュテル 共同研究員 日本文化研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

村上 晶 共同研究員 宗教社会学、シャーマニズム研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【研究紹介】

専門は宗教社会学であり、日本の巫者を対象として研究を行っている。巫者や巫者伝統の変容を記述することを通して、人々が神や霊といった超自然的な存在や世界とどのように関わってきたのか、また現代社会においてそうした態度はどのような変化の中にあるのかという点について考察してきた。今後は、かつての巫者伝統が消失した茨城と、形を変えながらも存続している東北地方、そして「拝み屋」などが活躍する都市という3つの異なるフィールドの調査を進め、そこから得られた知見を比較・検証していくことで、巫者研究と現代宗教論を結び付けた新たな研究視座の構築を目指していく。

【論文】

- ・「巫者の鎖をたどって—現代の巫者に関する一考察—」（『現代宗教 2011』、秋山書店）、2011年5月
- ・「茨城県の巫者について—文書と口承からみるワカサマの姿—」（『宗教学・比較思想学論集』第13号、筑波大学宗教学・比較思想学研究会）、2012年3月

【口頭発表】

- ・「宗教体験の語りの諸相とその現代的意義」（日本宗教学会第70回学術大会、関西学院大学）、2011年9月

(2010年度までの主な研究業績)

【論文】

- ・「都市の「憑霊」体験—「カミダーリィ」の語の使用をめぐる—」（『哲学・思想論叢』第29号、筑波大学哲学・思想学会）、2011年1月
- ・「日本におけるシャーマニズム研究の展開—ユタ研究における成巫過程への着目とその背景—」（『宗教学・比較思想学論集』第11号、筑波大学宗教学・比較思想学研究会）、2010年3月

【口頭発表】

- ・「都市「霊能者」の自己物語に見る現代宗教の位相」（日本宗教学会第69回学術大会、東洋大学）、2010年9月

三ツ松 誠 共同研究員 国学思想史

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

【論文】

- ・「紀州藩における国学者の存在形態—参沢明の例から—」（『論集きんせい』第33号、近世史研究会）、2011年5月
- ・「『古史伝』の索引と気吹舎門人たち」（『清内路—歴史と文化—』第3号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室）、2012年3月

【口頭発表】

- ・「国家神道と近世史研究の現在」（近世史研究会例会、文京区湯島地域活動センター）、2011年6月
- ・「前橋神女と平田門人たち」（日本宗教学会第70回学術大会、関西学院大学）、2011年9月

【その他】

- ・（新刊紹介）「須田努編『逸脱する百姓—菅野八郎からみる19世紀の社会—』」（『史学雑誌』第120編第6号、財団法人史学会）、2011年6月
- ・「【書評】有富純也著『日本古代国家と支配理念』」（『東京大学日本史学研究室紀要』第16号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室）、2012年3月

山梨有希子 共同研究員 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

土屋博 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

ナカイ・ケイト (NAKAI, Kate W.) 客員教授 日本思想史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

林淳 客員教授 日本宗教史

担当研究事業「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」

星野英紀 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

山中弘 客員教授 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

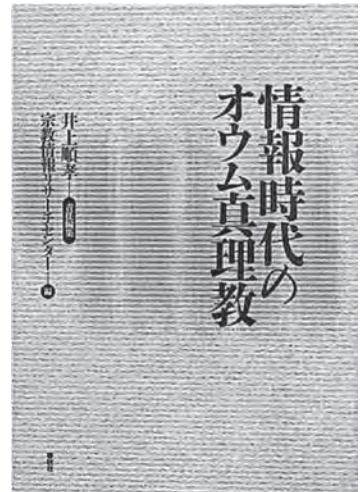
出版物紹介

宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集 『情報時代のオウム真理教』

(春秋社、2011年7月)

内容紹介

1995年の地下鉄サリン事件のオウム真理教について、オウム真理教側の情報発信と社会の側からのオウム真理教についての情報発信を対比させながら考察した書。十年以上にわたって宗教情報リサーチセンターの研究員を中心に行ってきた資料・データの分析に基づく緻密な検証である。第一部ではオウム真理教の情報発信を映像メディア、ラジオ放送、説法テープ、音楽、書籍などについて内容を分析している。第二部では新聞、テレビ、ジャーナリストや研究者の報道や言説を分析している。事件以後との大きな違いが示される。第三部では政治活動、事業、陰謀論などのテーマの他、現在のアレフ・ひかりの輪にいたる経緯も示されている。今後のオウム真理教研究の基本文献になる。



井上順孝『図解雑学宗教 最新版』

(ナツメ社、2011年5月)

内容紹介

2001年に刊行された『図解雑学宗教』を増補改訂したもの。巻頭に「国旗と宗教」、「宗教と人々の暮らし」、「宗教と建築・美術」のカラー図版が加わっている。また「アフリカと東南アジアのイスラーム」、「東学の系譜と儒教的新宗教」、「新しい葬法と変わる死生観」、「スピリチュアル・ブーム」、「現代の宗教紛争」、「観光資源化する宗教」が新しい項目として付け加えられた。入門書の案内も大きく改訂されている。全体が11章からなるが、この構成は前のものと同じである。



井上順孝『神道—日本人の原点を知る』

(マガジンハウス、2011年9月)

内容紹介

神道についてあまり知識のない人を対象に、神道の特徴や基本概念、歴史的展開などを分かりやすく解説したもの。図解、図表を交えながら、神道の基礎知識的な事柄をまとめてある。マガジンハウス社の「45分でわかる」シリーズの一冊。

構成：はじめに／神道の特徴／神道の基本概念／神社という不思議空間／神道の歴史／おわりに



星野靖二『近代日本の宗教概念——宗教者の言葉と近代』

(有志舎、2012年2月)

内容紹介

本書は近代日本における宗教概念の展開を宗教者の言葉を追うことで考察するものである。現代日本語における「宗教」が religion の翻訳語として明治期以降に成立したことは既に指摘されてきているが、本書はその成立の過程に焦点を合わせる。そして一方ではキリスト教徒達や仏教徒達が抽象概念としての宗教を論じる局面、他方ではそれを自らが奉じる宗教伝統の自己理解へと組み込んでいく局面について検討する。

第1部「文明としての宗教」では宗教と文明や学術との関係がどのように取り扱われていたのかについて、第2部「文明から宗教へ」では宗教の独自性が超越性との関わりの中に措定されるようになっていく過程について、第3部「宗教と道徳の再配置」では宗教と道徳や日本なるものとの関係がどのように再配置されていったのかについて論じている。

なお、本書の発行に際して平成23年度國學院大學出版助成を受けている。



テレビ放映・番組紹介

本研究所の国際研究フォーラムの様子、および本研究所が関わった番組が、スカイパーフェク TV！(216ch ベターライフ ch)『精神文化の時間』で下記の通り放映されました。

○特別番組「国際研究フォーラム デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み」(2011年10月16日開催)

放映日時：2011年11月23日、30日(水) 21:30~22:30

2011年12月14日(水) 21:30~22:30

2012年1月25日(水) 21:30~22:30

○特別番組「国際研究フォーラム 映画のなかの宗教文化」(2009年9月20日開催)

放映日時：2012年2月22日(水) 21:30~22:30

○特別番組「宗教文化士をめざす人へ」

放映日時：2011年8月25日(木)、28日(日) 21:30~22:15

→現在 YouTube で公開中

宗教文化士説明会 1/3 <http://youtube/uNGGP5vHWf4>

宗教文化士説明会 2/3 <http://youtube/WXWuJR7D64Q>

宗教文化士説明会 3/3 <http://youtube/OsmEbfmUlp0>

*なお、2012年2月からは「iPhone」アプリの「stylecast viewer」にも同時配信されています。



上段左右、下段左：「デジタル映像時代の宗教文化教育」より

下段右：「宗教文化士をめざす人へ」より

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第5号

平成24年9月30日 発行

発行者 井上順孝

編集担当 遠藤 潤

平藤喜久子

印刷者 サングラフィック株式会社

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237